

汝は我に従え

野村末義の生涯と信仰

汝は我に従え

野村末義の生涯と信仰



目次

		一 野村末義記念誌発行にあたって		
		主の恵み	榎本 和義 牧師	1
		二 野村末義の生涯と信仰		
(1)	主な略歴	……	……	4
(2)	証詞			
①	昭和四七年	聖日礼拝	……	5
②	昭和五八年五月五日	木曜会	……	8
③	平成三年二月三日	聖日礼拝	……	18
④	平成三年二月十日	聖日礼拝	……	21
⑤	平成三年三月二四日	聖日礼拝	……	24
(3)	教会誌「ぶどうの木」の証しから			
①	福岡浜の町基督伝道館の思い出	……	……	33
②	悪夢?	……	……	39
③	死んだ犬	……	……	42
		三 野村末義の証し(教会誌「ぶどうの木」から)		
(1)	「みぎわ」騒動記	……	……	45
(2)	日記断片	……	……	48
(3)	随想二題	……	……	51
		四 病床日誌(入院から召天まで)		
		野村 美恵子	……	65
		五 前夜式(平成三年九月十日)		
		榎本 利三郎 牧師	……	78
		六 野村末義の思い出		
(1)	記念会(平成三年十一月二四日)	……	……	81
(2)	記念会(平成八年九月十六日)	……	……	101
(3)	主人の思い出	……	……	123
(4)	思い出	……	……	127
①	野村末義兄の思い出	尼田 隆己 兄	……	
②	野村先生、今日は	大田 敏夫 兄	……	
(7)	暖かい日・寒い夜	……	……	60
(8)	婦人会研修旅行に連れられて詠める	……	……	62
(9)	奇跡の神の恵み	……	……	63
(6)	われらの会堂(旧会堂の思い出)	……	……	58
(5)	続 雑想	……	……	56
(4)	雑想	……	……	53

- ③ 思い出の記 河本 信生 兄
- ④ 野村先生の思い出 小松 南子 姉
- ⑤ 野村先生の思い出 島崎 博子 姉
- ⑥ 野村先生と私 正野 真宏 兄
- ⑦ 野村先生と海老津集会 正野 百合子 姉
- ⑧ 野村先生 正野 悠子 姉
- ⑨ 主の恵みに感謝 鈴木 一幹 兄
- ⑩ 野村先生を偲んで 深町 郁子 姉
- ⑪ 故・野村先生の思い出と感謝 水村 静江 姉  
水村 光義 兄  
李 文珠 姉  
飯田 美紀子
- ⑫ 手紙より(その二) 水村 静江 姉
- ⑬ 手紙より(その二) 李 文珠 姉
- ⑭ 父の思い出 飯田 美紀子
- ⑮ 父の背中 野村 仰一

七 思い出の写真

……

147

八 あとがき

……

155

一 野村末義 記念誌発行にあたって

## 主の恵み

榎本 和義 牧師

「主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、ほむべくして恐るべきもの、くすしきわざを行うものであろうか。」

(出エジプト記 一五・一一)

世間では「事實は小説よりも奇なり」といいます。小説家は想像力を働かせて、凡人には思いつかない物語を作ります。こんなことがあるだろうかというような筋立てで読者をおどろかせます。しかし、現実の世界ではさらに不思議なことが起こることをこの言葉は語っています。確かに、実際この世は人の想像を超えたものです。

この記念誌に証しされている野村末義兄の生涯も例外ではありません。彼の前半生は文字通り波瀾万丈でした。複雑な親子関係、信頼する人から捨てられる悲哀、結核に侵され死を目前にした青春など、絶望的な境遇のなかから、思いがけないイエス・キリストとの出会い、救いの体験はまさにドラマ以上というほかありません。この冊子に証しされている野村兄の生涯を振り返るとき、人の力、知恵、計画をはるかに越えた神様に導かれ、生かされた生涯

だったと思います。人生に失望し、生きる望みを失っていた彼が、どのような経過であったかわかりませんが、昭和初期の「浜の町伝道館」に導かれてきました。当時、まだ三十代半ばであった折滝鶴治郎牧師のもとで、イエス・キリストを信じる信仰を持つようになりました。イエス様を信じて生きる希望が与えられ、人の愛に失望した彼は、神様の変わらない大きなご愛に感じて、生涯を神様に献げ修養生となったのです。まさに人に捨てられた者が神様に拾い上げられました。このことは彼の人生での大転機となったのです。

献身修養生の生活は容易なことではありません。早朝の早天祈祷会から始まり、礼拝、各集会、家庭集会、子供のための集会など、連日休むヒマもない。その上、生活上の雑事、炊事の手伝い、掃除洗濯、畑仕事、水汲み薪割り、子守から買い出しに至るまで、牧師の家庭に生活しながら、神様に従う訓練でした。病弱な体でありながら、倒れることなく過ごし得たのは奇跡としか言えません。昭和七・八年ころから、昭和二十年、福岡の空襲で教会が焼失し、折滝先生一家が群馬へ疎開して、一時期教会が中断したときまで続いたのではないのでしょうか。その頃のことははっきりしません。

終戦を迎え、社会は混乱した状態にありました。野村兄

がどこで何をしていたのか、その間の消息は不明です。ただ、思いがけないことから八幡に連れてこられたのです。伝道館時代から親しくしていた河本実兄が戦後復員して、野村兄がどうしているのか安否を尋ねたけれども誰も知っている人がなく、心配して探し下さったそうです。

当時の博多駅裏のあたりを尋ね歩いてるとき、とある印刷屋を偶然覗いたらそこに野村兄が働いていました。お互いびつくりして再会を喜んだそうです。その日のうちに、実兄がお父さん（河本小太郎兄）に野村兄を見つけたから、うちに来てもらおうと言って頼んだところ、早速そうしなさいということになり、翌日から八幡に来て河本商店で働くことになりました。八幡に来るまでの生活は荒れて、信仰も失いかけていたそうです。食糧難で空腹が続き、餓えを紛らすために辞書に使う薄い紙でタバコを巻いて、吸っていたと聞いたことがあります。神様は思いがけない道を備えて、ひとりの魂を滅びの中からすくい上げて下さったのです。これが彼の人生第二の大きな転機だったと思えます。

それ以来、仕事と教会生活がすべてとなりました。やがて結婚され、お子さん方を育てられました。体力的な限界を感じて河本商店をやめて、書道教室を開いてご自分の体調にあわせての生活へとかわりました。これもまた神様

の備えられた大きな恵みでした。

野村兄は教会の週報「みぎわ」を作ることを始められ、それを最後まで全うされたことを、私は忘れることができません。教会の隣が職場でしたから、毎週土曜日に仕事が終わると欠かさず牧師館に立ち寄って、礼拝の讚美歌、聖書の箇所、報告など週報に記載するものをもらって帰るのです。春夏秋冬を問わず、休むことなく続けることは大変忍耐のいることでしょう。旧会堂の階下にあった牧師館の玄関に、土曜日の夕暮れ、暗くなりかけた頃、「こんばんは、野村です」と声をかけて入って来られます。父は大あわてで必要なものを用意してお願いしたものです。玄関先で、二人が翌日の礼拝のために祈って別れるのもいつものことでした。後に、電話が普及してそれに代わったのですが、いつ頃であったか分かりません。

召される二年くらい前だったと思いますが、日曜日の伝道集会が終わり、オルガンの上に置いていた花鉢を講壇の方へ移そうとされたとき、長椅子の脚につまずいて倒れました。大きな音がして、居合わせた人たちが集まり、助け起こしましたが、胸のあたりを強打して、とても痛そうでした。皆で一緒に祈り、気持ちも落ち着いて「大丈夫、帰れます」と言って、自宅へ戻られました。後日伺うと、肋骨を骨折していたそうです。それまで、比較のお元気で、



各集会へ励んでおられましたが、その時から、体調を崩されるようになり、ずいぶん弱られました。ここから召されるまで試練の時を過ごされたと思いますが、絶えず主との交わりのなかで、人生で最高の恵みをあじわったときでもあります。奥様をはじめ、愛するご家族との交わり、介護を受けつつ、この世にあつてすでに神様の豊かな報いを受けておられました。

詩篇一六篇八節から一一節に、

「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた安らかである。あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである。あなたはいのちの道をわたしに示される。あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。」とあります。

これはまさに野村兄が証しする詩です。彼の生涯を通して、神様が栄光を顕してくださいましたことを感謝しています。残された私共も、彼が証したように、神様を信頼する生涯を歩ませていただきたいと願っています。



二 野村末義の生涯と信仰

(1) 主な略歴

- 一九一一年（明治四四）一月九日 野村久一郎、ゆきの三男として、福岡に生まれる。
- 一九二五年（大正一四）三月 福岡市奈良屋小学校卒業
- 同年 福岡市立福岡商業学校入学
- 一九三一年（昭和六）三月 同校卒業（病気のため一年休学）
- 同年 家業に従事（刀剣、骨董取扱）
- 一九三二年（昭和七）一月十日 初めて教会に行く（福岡浜町伝道所 新年聖会）
- 同年 十二月 クリスマス後、教会に入る
- 一九三三年（昭和八）四月二四日 受洗 福岡大濠公園教会（折滝鶴治郎牧師）にて献身
- 一九四五年（昭和二十）六月 福岡大空襲（証の中の「悪夢？」参照）
- 同年 八月十五日 終戦
- 一九四六年（昭和二一）四月 合名会社河本商店入社
- 一九五〇年（昭和二五）十月十五日 八幡前田教会にて信仰生活を復活させられた
- 新原一雄、シゲノの長女 美恵子と結婚
- 仰一、（飯田）美紀子、（上島）恵子、（笹木）真理子の、一男・三女を  
与えられる。
- 一九六七年（昭和四二）六月 河本商店を退職。以後、自宅で書道の指導にあたる。
- 一九九一年（平成三）六月 療養のため北九州市八幡西区の萩原中央病院に入院
- 同年 九月九日 召天（八十歳）

## (2) 証詞

### ① 昭和四八年（一九七三年） 聖日礼拝

— ヨハネ第一 四章七節から一二節を朗読 —

私はまだ青年だと思っていたのですが、おじいちゃんに成らなければならなくなつたんです。気分だけは若いつもりで、今日でもまだ学生のような気分なんですけど、いかんせん身体はそうじゃないんですね。皆さん、そういう時がまいりますよ。これは間違いないんです。その時になつて「しもた」、と言つても遅いんです。今日このキリストを信じて、そして私たちの罪が赦されておりますから、これからどんな嵐が来ましても決して恐れない。その中にちゃんと救いの方が立っていらつしやる。皆さんの人生のこれから起つてくる問題の中に、ちゃんと主がそこに立っていて下さるのです。

この間ある本を読みましたら、山室軍平と言う大将がいます。救世軍の創始者ですけれども、この方がある時に祈つておつたら夢で幻を見た。その幻は何であつたかと言いますと、大海の中、周囲は全くの暗黒の中で、暴風に船が沈んで流された人が幾らでも浮いている。そして、救われることができるようにと一生懸命にしがみつくものを求めているけれど

ど何も無い。ところがそこにたつた一つ、海の中に岩があつた。その岩を見つけた人は、皆その岩に這い上がつて救われたんです。しかし他の人たちは、岩があるから岩に行こうとするけど行き着くことができない。そして浮きつ沈みつして次々に沈んでいくんです。その時、そこに神様のひとり子であるキリストが現れて、その人たちを皆岩に乗せて下さつた。

これは夢、幻です。しかしキリストは私たちの岩となつて、イエス・キリストは岩と書いてありますけれど、その救いの岩の上にいる私たちは、どんなに嵐が吹いてきても安全に救われることができるのです。この岩なるお方を私どもの避け所とし信頼して行きますなら、確かに神様は愛のお方ですから危ない時にその救いが私たちにまいります。このお方に私たちはいつでも愛され、愛によつてみ子を遣わしていただき、沈んで行かなければならない者を水の底から引き上げるようにして下さつたんです。これは神様の方の出来事であります。

これも聞いた話ですけれども、これは実際にあつたことでもあります。北海道の青函連絡船が台風で沈んだことがありました。皆さんご存知かも知れませんが、あの時に一人の宣教師がその船に乗っていました。船が沈んでいくというときに、皆救命胴着を着て海に飛び込んだんです。ところが、ある一人の若い娘さんが救命胴着も何も無く、ただ木を掴まえてぶら下がっていて浮きつ沈みつしている。そして、水を飲ん

で死ぬか分からないというような危ないところにあったんです。ところがその宣教師が、自分は救命胴着を着けて海の中に飛び込んでいたけれど、ひよつと見たらそのお嬢さん、救命具も何も着けていない。それからその宣教師は自分の救命具をはずして、「あなたにこれをあげます。あなたはこれを着て木に掴まって助かって下さい。あなたはまだ若いしこれからやらなきゃならんことも沢山あるだろう。私はもうこれで沈んでもいい。そしてあなたはキリストを信じなさい。私はキリストを信じているから、ここで死んでも天国に行く」と、その娘さんに自分の命の綱ともいえる救命具を与えて沈んでしまったと言うんです。

丁度そのように、イエス・キリストは私のために命を捨てて、永遠の滅びの底に沈んでしまわなきゃならないような者を救いに与らして下さいました。今日ここに置いていただいて、神様を私のお父さんと呼ぶことができるようにして下さいましたのです。皆さん、神様はひとり子を下さり、またひとり子が私のために命を捨てて十字架の上に一切を贖って下さったんです。だから私たちはこのお方に従って、このお方の愛を素直に有り難うございますと受け入れればいいんです。とやかく文句を言うことはない、言う必要はありません。

私も四十年間いろんなことがありました。様々な人生の中を通過してきました。敗戦という、あのドサクサの中も通りま

した。空襲に遭って焼け出され、丸裸に成って着のみ着のまままで放り出された時もありました。しかし神様はここまで私を支えて下さいました。だからこれから私はこのお方にお仕えて、このお方の愛に応える者になりたいと願っているわけです。

この間、私はある方のお話しを聞きました。その方は足が不自由でございます。足が動かないけれども何としても集会に行きたい、イエス様がこんな私を愛して下さいているなら私もイエス様を愛して行こう、そしてイエス様の聖書の御言を一言でも聞き、イエス様の愛に一言でもお応えしたい、私の足が適う間は歩いてでも行ける、そういう願いの一念で、杖を突いて一時間かかって駅まで来るんです。私が駅に行きますとその方がベンチに座って待っている。私はそこから車を呼んでその方と一緒に集会場まで行くんですけど、私が自分で歩けば十分もかからないでしょうが、その方は駅まで来るのに一時間かかるのです。目と鼻の先なんですけれども一時間かかって、杖を突きつつ痛い足を引かずって、途中で休んで、また立ち上がって歩いて、また休んで、また歩いて駅まで来る。それを聞いたときに、私は五体満足で歩けるのに、この方は一時間かかってここに来る、そんなにイエス様を慕ってイエス様を愛していらっしやるのに、私はどうだ。私にはその方のような渇きが無いんじゃないか。そのようなイエ

ス様の愛に対して応える愛が私には無いんじゃないだろうか、心を刺されました。イエス様が命まで捨てて私を愛して下さっているのに、くだらないものを愛して、頼りにならないものに一生懸命に全力を尽くして、金を使いまた時間を浪費している。テレビみたいなものには時間が何時間有っても足りはしません。聖書を読むために五分間でもやったことがあるかと言うんです。神様が私たちのためにひとり子まで、かけがえのないひとり子まで下さっているのに、その愛に応えるものが何か有るのかと、私は自分を刺されました。

私も、これからは素直に優しく神様の愛をお受け入れし、そして神様の愛に応えるようになりたいと願います。何かいろいろするのではなく、ただ信じればいいんです。「はい、有り難うございます」と言えば、神様は喜んで下さるんです。

皆さん、これからの生涯をどうぞこの愛なるお方の内にかまっていただけ、このお方を私たちの内に迎え、ことごとくに、勉強の中に、あるいはご家庭の仕事の中で、あるいは皆さんの一挙手一投足の中で、この愛のお方を私どもの内に迎え、そしてこのお方に聞き従いながら正しい人生を歩んでいただきたい。そこには何の不安も恐れも有りません。何時どんなことが有っても、喜んで私たちの輝く天国に行くことができるんです。例え自分の不利益であっても、その中を喜んで行けるんです。愛することができない人も愛することが出

来るようになるんです。ここに書いてありますように、神様が私を愛して下さったんだから、私も主を愛することが出来るんです。

ある兵隊さんが終戦になって満州から帰って来る時に、途中で皆お腹を空かして腹がぺこぺこなんです、ある所まで来たところ、りんご畑があつてりんごが一杯成つていた。「ああ、これを喰おう」と皆が脱兎のごとくりんご園の中に入り込んで、りんご園の人が止めるのも聞かないで取って食べはじめた。ところが、日本の兵隊が荒らしていると聞いたものですから、ソ連の兵隊がジープに乗って飛んで来た。そして、その兵隊さんがポケットから財布を出して、「済みませんが、これでりんごの値に相当するお金を支払いますから取つて下さい」と、お金を払おうとしているところをソ連の兵隊が見て、「こいつがこの頭だ、やつてしまえ」と、ダダダダーンと撃つてしまった。弾がその人に当たりその人は死んでしまいました。その人はクリスチャンでした。ですから、人のものを黙って取るということはこれは泥棒だ、金を払って買わないけれど、こんなことをしてはいけないとお金を払おうとしたときに撃たれて死んでしまった。他の人は、ああ良かった良かったと行つてしまった。ところが、それを見ておつた司令官の隊長が、一人の人が自分で金を払いながら弾に撃たれて死んで行つたその姿を見て、これこそ本当に人間とし

て生きているんだ、この人こそ本当の人間だと思った。

その司令官は日本に帰って来ました。日本に帰ってからその人はとうとう教会の門をくぐって、自分の罪を懺悔して悔い改め、キリストの信者となりました。そして献身して伝道者になりました。人が、本当にキリストの愛に感じて、正しいことはどこまでもやる、そんな力は何処から湧いてきますか。またそのような、人を愛するという愛が何処から出てきますか。結局人間には無いんです。どんなに立派なことを言っていますか。結局人間にはありません。けれども、神様が一度その人を愛して捉えて下さったときには、多くの人を愛することが出来るんです。命を捨てて愛することが、あるいは人のために本当に祈ることが出来るようになるんです。

私達が神を愛したのではなくて、神が先ず私たちを愛して下さっていると言うことを心に留め、そのためにキリストを遣わして下さいとと言うことを、「ここに愛がある」と言う御言を心に留めて、一生の旅路を歩いて行きたいですね。お祈りをいたしましょう。



## ②昭和五八年（一九八三年）五月五日 木曜会

「イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、『あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょうか。しかしイエスは言われた、『いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである。』」

（ルカ一・二七〜二八）

これはイエス様が大変大切なことを言われていると思います。『神の言を聞いてそれを守る』という、短いこの言葉の中に深いものがある気がいたします。

これは群衆の中にいた女の人がイエス様の所に来て言った言葉への返答なのですけれど、あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房ですから、あの受胎告知の時、天の使いがマリヤに「めでたし、恵まれたものよ、女の内一番幸せなのがあるたである」と告げた、そのようにイエス様を宿した胎、またイエス様に乳を与えた女は何と幸せな何と恵まれたことでしょうかと、しかも大声でそれを言ったと記している。ですから、非常に感激して、イエス様に向かってそのことを申し上げたに違いないと思います。ところがイエス様のご返事は二八節に記しているように、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである。」

私共は、あの人は恵まれたとか、これは大変恵まれたとか言います。恵まれたと言うことはどういうことか。もちろん祈りに答えられて主が恵んで下さっているのですから恵まれたことに相違ありません。病気が癒されたことも恵まれた事実でございます。十字架の救いのゆえに私共は祈りに答えられているのでありますから、これは恵みに違いはありません。ですから、イエス様を宿したマリアがいかに恵まれていたかと言うことは申し上げるまでもありません。天の使いがそのことを言っただけではありません。実際に主イエス様を宿す母親であるということは、例えようの無い恵みであり祝福であると思います。

ところがイエス様は、何か事が解決したとか、問題が良くなったとか、苦しい立場が逆転して大変良くなったとか、それは勿論幸せなことでありますけれど、しかしそれよりもっと恵まれているのは「神の言を聞いてそれを守る人たちである」とおっしゃっています。このように、イエス様は比較なさっておっしゃる例が多くございます。一つ読んでみましょう。

「あなたがたに言うておく。女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない。しかし、神の国で最も小さい者も、彼よりは大きい。」（ルカ七・二八）

これも比較なさっているところですね。ここでも、女の産

んだ者のうちでヨハネよりすばらしい人物はいないとおっしゃった。それはそうでしょう。イエス様の先備えとして、イエス様のバプテスマをほどこし、神の国のことを教え多くの人に悔い改めを伝えたのですから、これは真に神の証言であり預言者であり人物であったのでしよう。だからイエス様はそうおっしゃった。イエス様も保証していらつしやったのです。しかしそんな立派な人物だけど、神の国で最も小さい人物でも彼よりも大きいとおっしゃったのです。神の国にいる人は、小さくても、こんな人かと言う人でも、このヨハネよりもっと大きいとおっしゃった。

ちよつと横道にそれましたけど、この女の人が大声で叫んだときもイエス様がおっしゃったことは、恵まれたと言うことはすなわち物が与えられた、問題が解決した、痛みがとれた、あるいは病気が治った、…それらのことは皆恵まれたに違いないけれど、…それらよりも神の言葉を聞いてこれを守る人こそが本当に恵まれたと言うことです。

私も今頃つくづく教えられて感じるのですが、小さくても神の言葉に従ってこれを守ってついていく者が偉大なる人物ヨハネより大きいと言うのでございますから、私も本当に何処にいるか分からないような何の値打ちも無い者ですけれど、ともかくにも神の国におらせてもらって、イエス様を信じさせてもらって、御言に寄り頼んでここまで生かしてい



ただいたことを思いました。この偉大なる恵みをいただいていることを思うわけでございます。

ですからもう一度、一一章の方に戻りまして二八節に、神の言葉を聞いて守っていく人には驚くべき恵みがあると言う。ヨハネの黙示録一章にも「これを聞いて守る人は幸せである」とヨハネが言っている。

ヨハネによる福音書一四章二一節から二三節をお読みしましょう。

ここにもイエス様は言葉を聞いてこれを守ることの意味をおっしゃっています。そしてその幸せがどんなに大きいかというところをおっしゃっています。わたしを愛する者はわたしの言葉を守る人である。その人にわたし自身を表現しただけでなくて、私達と一緒に来てその人と共に住むと、父なる神、子なる神、ご聖霊なる方が、その人と住んで下さると言う驚くべき恵み、それはもう最高の恵みです。物があるとか、肩書きがあるとか、丈夫になったとかいうものではないのです。神様のご臨在、神様ご自身が常に私と住んで下さる。この恵み、この喜び、この幸いを得るということは、すなわち本来の意味の恵まれた人達であります。また、裏を返すと本当に恵まれた人でなければ御言には従えないと思います。

御言に従う人が本当に恵まれた人であるとおっしゃるのですが、私は本当はこれは両方ともつながっていると 생각합니다。

本当に恵まれたらイエス様の言葉に従える。弟子たちが一晩中網を打って漁をしたけれど何も獲れなかった。へとへとに疲れ果てて帰ったところ、イエス様が「もう一度船の右に網を下ろせ」とおっしゃった。本来ならば、「私共はこうして一晩中網を下ろして一匹も獲れなかったのですから今回はもうダメです、潮の流れでも変わったら魚が来るかも知れませんが、もう止めときます」と言いたいのでしょうけれども、弟子たちは主のお言葉ですからお従いいたしますと言って網を下ろしました。そうしてお言葉に従ったら沢山の獲物があつたと言います。

イエス様のお言葉に従うと言うことは、なかなか人間的な知恵を働かすと出来ません。恵まれた人はそこを潔くさつと従います。そうしますと獲物が多いのですね。また、水を汲めと言われたしもべは、何のことも分からないけれど、今この水がめに水を汲んで何の役にたつのだろうと思つたけれど、言われた通り水が一杯に水を満たした。沢山あるかめにこんなアホらしいことをして何の役にも立たないと思つたけれど、人間的に考えればそうなのですが、主が言われることは全部これをしなさい、とマリアに言いつけられていたので、それに従つたのです。そうしたら、それが全部すばらしいぶどう酒になつて婚礼の席を喜ばせたと、ヨハネによる福音書第二章にございます。

従うと言うことは、恵まれていないとなかなか従えません。私は今しみじみ思いますことは、イエス様のお言葉に従っていく生活の本当に幸せであると言うことを、沢山の中を通してもらって、今味わって感謝しているところであります。

この前も皆さんにお証しさせていただきましたけれど、私が貰われていった先の家がありまして、その家の娘から「娘と言つても六九歳位になると思いますが一、電話が掛かってきました、母親の三十三年の記念をするので是非来てくれと言つてきました。五十年来音沙汰が無い人達で、私も追い出されて以来全然往来も無く何の付き合ひも無い、もう私は捨てられた人間ですからあの家とは用事は無いと思つていました。空襲にあつてどうなつてゐるだろうとは思つたのですが、私も空襲にあつたし天涯孤独になつたのですから、そんなものは関係無いと思つて綺麗さっぱりしていたのです。そうしたらひよっこり電話が掛かつてきました、私に是非来てくれと言つたのです。「急に言われても、私にも他に約束があるから行くわけにはいかん」と言つたら、泣くようにして「すまんけれど来てくれ」、と言つたのです。本当は嫌でしたから断つたのですけど、あまりしきりに言うものですから私もどうどう折れて、それなら行くこうと言つたわけです。

どんな風になつてゐるのか？ある一面では私が祈つてゐる魂であり何とか救われなければならぬ魂ですし、顔は見

ませんが祈つてゐた人達ですから、この際行つてイエス様の証しをしてこなければ、と言つ意味もありまして行つたわけです。どちらも年をとつて爺さん婆さんになつてゐるので分らないかな？と思ひながら、博多駅で会つたのですけど、偶然分かりまして、法事に行き色々話しを聞きました。

三十三年と言つたのですが、まあ私も全然知らんことは無いのです。私を学校に行かせてやると言つたのでその家へ養子の形で行つたのですけど、何にしても他人なものですから、お父さん、お母さんと言つてはいるもののしっくりこない。小さい時からなら抵抗無く言えますけれども、中学になつて今さら父、母と言つてもそこには隔てがあるものです。どうせこの家の子供ではない人間だし、下手をすれば捨てられるかも知れない。いろんな意味で大変冷たい仕打ちを、冷たいかどうか分かんのですが、男手が無かつたものですから、私に掃除をさせたり庭掃きから風呂の水汲みや沸かしなどをさせたのです。その時も娘が「あんたがよくお風呂のところ座つて沸かしてたの覚えてるよ」と言つていました。寒い冬の朝でも水で掃除しないといけませんし、なぜこんなことまでと、私も何となくすつきりしない。他人の家に居る不自由といひますか、そんな淋しさを感じていたので。そんな中であつて、父も母も私を番外にしているのだから可愛がつてくれてないと思つていた。ところが表面はそうすけど、

実際の心の中では私を愛して面倒を見てくれていたんです。勿論そうですよ。だって誰が他人を学校にやってくれますか？考えてみればそうなんですな。

私に育ての母親がいて、女手一つで裁縫をしながら私を学校にやっていたわけですが、もう生活が出来なくなりました。ですから、それを見るに見かねた私の従兄弟の父親が「末義を育てられんことになってるのだから養子にやっつて学校にやっつてもらってはどうか」と言うことになって、養子先の家が古物商で、そんな物が好きでたまらなかつた従兄弟の父親がその家に親しく出入りしていたものですから、また育ての母と養子先の母とが姉妹であったこともあって、その家に養子に入り、私を商業学校にやってくれたのです。

ところが私が病気になるたのです。だから、これはもう家の跡取りにはなれない！と思つたに違いありません。それで私は追い出された格好になったのです。しかし、病気になるって手術をするときに、母親は私のベッドの下のリノリウムを張つた冷たい床に布団を敷いて、私が痛い痛いと言ひ苦しいと言つたら、起き上がつていろいろと世話をし、夜通し面倒をみてくれました。私が十九歳の時ですから、それは忘れようとしても忘れられません。本当に世話になったのです。だから私にとっては母親であり、命の恩人でもあるのです。

法事に行つて初めて聞いたのですけれども、私が手術をして輸血をしなくてはならないのですが、家の者が誰も提供しきれなかつたのです。そのとき母が、ちょうど血液型が同じで私に血をくれたのです。ですから血のつながりは無いと言つても私は血をもらつているわけです。そして手術をしたわけですが、「その時、母の手がコブのように腫れ上がつて紫色になつて病んでいる様子を見て、私はたまらなかつた」と娘が言つておりました。母は「末義が治るなら、助かるなら自分は構わない」と言つて平気で居たそうです。

私は全然気がつきません、知らなかつたのです。そしてかえつて文句を言つたかもしれませんが。夏の七月終わり頃で暑い盛りに手術をしたのですが、暑いやらきついやらで、私は夜通し大声で叫ぶのですから、「男のくせに我慢せなつたらんよ」と怒られたのです。そんな怒られたことは覚えておるのですけれど、母がそんな痛い目にあつても私を治してやるうとして、その心を私は知らなかつたのです。その娘から初めて聞いたのですが、母は黙つて、自分の手が腫れ上がつても平気で、末義が治るなら、治つてくれさえするのならそれでいいと言つたそうです。それを聞いて本当に申し訳ないことをしたと、今になつて私は後悔しているわけです。本当に、知らないで冷たい人だと思つていた。しかし、私が知らないところでそんな恩恵を受けていたのです。

イエス様が私の為に、私の罪の為に十字架にかかって死んで下さったのに、私は知らん顔をして「神様があるのならもう少し私を幸せにしてくれたらよかるうに、あの人はすごく幸せに生活しているのに、私だけがこんな不幸な生涯を、人の家に貰われておまけにこんな生きるか死ぬかのところまで来て」と、私は不平不満でたまりません。

娘からその話を聞いたとき、私はふと思ひ出しました。

インドで一人の青年が賭博で捕まって大変な刑罰を受けた話です。

五百ルピーでしたか、忘れましたが、インドのお金で莫大なお金、それを払えば許して貰えるというので、その刑務所に入っている息子のために、母親はなんとしてでもお金を作ろう、そうして息子を助けようと、働き口を捜し一生懸命働いたそうです。なるだけ高いお金を貰わねばと探した仕事、山に行つて石を切り出す仕事でした。その仕事は沢山の賃金を貰うのですが大変な仕事で、石の下敷きになったり、顔や手を打ったり、身体中傷だらけになつても、自分を忘れ労働したそうです。そして身体も心も疲れ果てたけれど、ついに五百ルピーを作つて息子の刑務所に行き、お金を差し出して息子を返して貰った。息子はそんなことは知りませんから、久しぶりにお母さんに逢い、お母さんと抱きついたのは良かったのですが、その母の顔も手も全身傷だらけ、どうし

てこんなになつたのかと息子は聞いたのですが、母親は何も聞かんでいい、お前が帰つて来さえすればいいと息子をその場で抱きしめたそうです。ところが後から人に聞いてみて、あんたのお母さんはあんたの保釈金をつくるため毎日毎日山に行つて働いてあのようになつたのだ、あんたはそれをよく見ときなさい、と言われたわけです。それを聞いた息子は、母親の愛を初めてひしひしと感じ、神様と母に大変感謝したという話を思ひ出しました。

人でさえもそんなにしてくれて感謝がつかないのに、イエス様は両手両足をクギで打たれ、最後の一滴まで私達の罪のために血を流して死んで下さつた。そのイエス様のことを何で忘れていたのでしょうか。私はそのことがもう一度新しく思い起こされました。今私が救いにあるために、神様は本当に私の願いもしないところから、事をなして下さいます。

実は、私を養子に連れて行つた従兄弟の父親が親しくしていた一人の友達がいて、それがまた骨董が好きで私の店によく来ていたのです。従兄弟の父親と非常に親しかったのですが、その人は博多ではちよつと有名なブルジョアの人でいろんな事業の社長をしております、商才にだけ金儲けもなかなか上手でお金も沢山持つていて、今は有りませんが呉服町にアイスクリーム場なども作つていたのであります。従兄弟の父親は、その人に私を会わせたのです。私が弱い身体で先

が望めそうに無いという状態の時でした。その人は「わしの所に遊びに来い」と言うので、私も時々父親から言われて刀剣や掛け軸を担いでそこに行ったりもしました。そして商売の話が終ったら「この頃はどうかやつとります」。こうしてか？」と、私も「とにかく何とかやつとります」。こうして私の将来のことや何かを考えて心配してくれていたのです。

そしてもう一人を紹介してくれ、「六本松にこういう人がいるから行って来い」と言うのです。そこに行くところでしたがまた末永さんの会社の重役さんでして、これまたビックリするほど広い家で、そこでいろんな骨董の話などしたりお茶をいただいたりして、大変気に入ってもらえたのです。その時のその奥様が私を教会へと導いて下さったのです。

ややこしい繋がりがずつとあつて遠回りをしていますけれど、そんな繋がりで導かれて、昭和七年一月十日に初めて教会に行ったのです。そこでイエス様の話し聞いた、それが私の救いの一歩のスタートです。じつと考えています時に、本当に神様のご摂理、導きということを教えられました。振り返ってみますとあまりにも不思議で、そして永遠の計画の中にある私、ちっぽけな私が、神様の中にある大きな何といたしますか、ご支配の手の中に導かれている様、それを新しく考え直したのです。

昨日も私は海老津の集会でお証しをしたのですけれど、神

様は善なることをなさる方であつて、決して悪いことはなさらない。病気になるって親に捨てられ天涯孤独になったことは私にとつてこの上ない不幸と思つていたのですが、そうでなくて神様はちゃんと私のために善なることをして下さる。

ナホム書第一章に「エホバは善なる者にして、悩める時の要害なり」とあります。ところが「エホバは善なる者にして」というのは、元訳にはあるのですが今の口語訳には全然出ていないのです。それから、詩篇第一〇〇篇にも「エホバは善なる者にしてそのいつくしみとあわれみはとこしえに絶える事が無い」と、それが今の訳では「主は恵みふかく、そのいつくしみはかぎりなく、そのまことはよろず代に及ぶからである」とあります。エレミヤ書第三三章にも、歴代志上第一六章にも「エホバは善なる者にして」と書いてある所が四カ所あるのです。

神様は必ず善なることをなさる。私が悪いと思つていることもみんないいことで、こんな不幸な、こんな嫌な、こんな惨めな、どうしてかと思つた時も、エホバは善なる方であるということをもう一度振り返つて感謝しました。このイエス様がいらつしやつたことによつて、私は、滅びるところから、滅びないで永遠の命に与るように神様が不思議な摂理をもつて導いて下さつた。私が病気になることも、天涯孤独になったことも、あるいは惨めな生涯になったことも、み

んな良かった、善なるかたが一番いいことをして下さったという感じがしみじみ分かりました。

ですから私の生涯のものを綴っていきますとおもしろいものが出来るんだろうと思うのです。私は文学的才能がありませんから小説など書けませんけれど、書いたらさぞかしおもしろいと思うんです。

そんなことで五十二年ぶりにその娘に会いまして、母のそんな話を聞きました。私はその時に証しました。娘は、「どうしてあなたが教会に行くようになったのか、私は不思議でたまらん」と言うのです。その宗教があんたの職業ではなかったのか、とそんなことまで言うのです。私は「いやそいうじゃない、職業的に選んだのではなく、私は行き詰まって死ぬべきところからイエス様を信じて罪許され、この救いにあずかった。私はこの他に生きる道は無いんだ」と、もうこれより他に生きられない、イエス様に従う以外に、イエス様を信じる以外に生きる道は無いんだからこれにかけた、これがなければ私は生きられない、だからこの道を選んだ、間違った道をとったのではないと、はっきりと皆の前で言いましたが、どうも皆は納得いったようないかなような顔をしていました。また、私が貰われていった先の親戚の子ですけれど、四十八歳になったと言っていました、その人が、やっぱり信仰する人の生涯は確かに違うと言っていました。

そして、その娘に頼まれていましたから字を二枚書いて持って行きました。皆が喜んでくれたのですけれど、しかしそこで私が思ったことは、皆の前でイエス様の救いの証しが出来たこと、私が今日あることの証しが出来たこと、神様が私にその良い機会を与えて下さったことに感謝を大きくしたわけでありました。同時にイエス様が大きな莫大な犠牲を払って下さって今日この場に自分が置かれているということの恵みを、そして今日もイエス様に従って行くことの幸いがどんなに大切なものであるかを味わわせていただいたわけでありました。

私は、三日の日に娘の美紀子の所に行ったわけでありましたが、古賀に帰ってきた娘が是非遊びに来いというので行ってみました。海岸に近い空気の良いところに集まった私共一族、仰一のところがきておりませんでしたけど、十五人が集まってワイワイしているところを見ると、それこそヤコブじやありませんけれど、杖一つ携えて出て来た者が、帰るときには大勢の者となつて帰って来たと言いますように、私もたった一人で北九州に来まして、北九州に来るときも自分から来ようとは思わなかったのですが、神様の不思議な摂理で、見えない手がずっと繋がっていて、今日このように一人出て来た者が、十八人もの一つの家庭を持つことが出来るようになりました。

海岸に遊びに行くにも孫達をそろそろと連れて行っています

から、まるで幼稚園の遠足みたいです。

こんなことを考えると、私も病弱で棺桶に片足つつこんでいるような者がここまで生かされ、家族まで与えられ生活してきたことを本当に今は感謝してやまないのではありません。そして今、イエス様と共におらせていただける、私には何も物はありませんが、実際は何のとりたてるものもないけれど、イエス様が私にあるということ、イエス様のおことばに毎日毎日近づけていただいているということ、そしてたえずこのご臨在に近づけていただいているということ、これは私の素晴らしい恵みだと思っております。

今、南明さんが喜んでいることは、失業して何もないのですけど、毎日毎日午前中図書館に行つて聖書を読み、お祈りをしていくということです。その時を与えられていること、そしてこの恵みは他に例えようがないと感謝して喜んでおります。本当にそのような生活を私共は歩ませていただけるのです。

だから今日の私達の生活は神様の恵みで保たれている。神様の恵みで始まって朝に感謝し夕べにまた恵みを感謝し、こうして繰り返し繰り返し私共の生活は導かれてまいります。

ルカによる福音書二一章の続き、二九節から三二節までを読みましょう。

イエス様は大変大切なことをおっしゃいました。

あなたがたはしるしを求めている。何か恵みのしるしを求めて、ああなつたらこうなつたら、ああして欲しいこうやって欲しい、そういうことばかりを求めている。そして私の言葉を聞くことはしない、私の言葉を守ろうとしない。何かどかつと神様の賜物をもらうことばかり考えている。そうじゃないんだと神様は言っている。ニネベの人々は、ヨナの宣教によつて王様から家来に至るまで一人残らず悔い改めて灰をかぶつたから救われた。けれど、その預言者ヨナに勝る者がここに立っているのだよ、とおっしゃった。それはすなわちイエス様ご自身をさしています。「私がここにいるんだ」とおっしゃらないで、「ヨナに勝る者がここにいる」とおっしゃる。だから早く悔い改めなさいと、柔らかく言われているのです。

またソロモンのところに遙か地の果てからやつて来たシバの女王は、世界一の学者であり、世界一の金持ちであり、世界一の優れた王で、どんな難問でも一つとして答えられないものは無いという位素晴らしい知恵者である王様ソロモンの話しを聞こうと、遠路を厭わず莫大な贈り物を持ってやつて来たのです。自分が持つてきた物は素晴らしい財宝だと思つて彼の所へ来たのですけれど、ソロモンの所へ来たらそんな物は掃き捨てるほどあつたのです。彼の所で話しを聞いてい

たら、何もかも言ってくれないものは一つも無い、そんな学者の話しを聞いてシバの女王はビックリ仰天し、これは驚くべき王様だと感嘆の声を出して、帰りにはソロモンから逆に莫大なおみやげを貰って帰ったのです。そんな素晴らしい知恵者であり、かつ富の人ソロモン王であつたけれど、そのソロモンにも勝る者がここに居る。どんなにお金を費やしても、遠路からわざわざ訪ねて来ても、莫大な犠牲を払ってきても、それに勝る者がここに居るんだとおっしゃつたのです。

このお方を私共はいつの間にか外に向けて、くだらん所に一生懸命お金を費やし労力を払って苦勞する、そういうことをここでイエス様は警告していらつしやる。

今は恵みのとき救いの日、今ここに提供されている時に、神様のお言葉を守つてこれにお従いしていくならば、確かに恵みの生活、すべてのことが私に対してよかつたと言える。私も、救いに与かつてからも五十一年、失敗や出来損ないはありましたけど、ここまで守られてまいりました。古希の年を過ぎてしまいましたけど、私は何も言うことはありません。神様の恵みのうちにここまで守られてきたのだから。

エホバは善なる者にして、悩みの時の要害なり、神は彼により頼む者をよく知りたもう。

神様は本当に私自身を良く知っていて下さつて、ここまで導いていただきました。そのことを覚えて、私は今日も皆さ

んの前に感謝をささげ神様の名をあがめるわけであります。

イエス様がおっしゃつたように、恵まれたということとは「神の言葉を聞いてこれを守つていく人が本当に恵まれた人である」ということ、私もその端っこを少しばかり味わわせていただきました。まだまだ完璧ではありません、十分味わつたというわけではありませんけど、その神様の大きな恵みの中のものちよびりを出して貰つて今その少しばかりを味わつているところであります。けれども、イエス様のみもとに行つた時に、私がイエス様に知られているように私もイエス様を知り、私を愛して下さいているイエス様と一緒におられる、そのイエス様を本当に愛することができるならば、どんなにかこの上ない幸いであろうかと思ひます。今ここにもう一度お読みいたしました、一章二八節を皆さんと一緒に味わつて神様をあげようございます。

「しかしイエスは言われた、『いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである。』」

どんな御言でも、皆さんに与えられました御言がごなたにもあると思ひます。私も色々な御言を与えられております。その都度与えられる御言は集会でいただくこともありましよう。またお祈りをしてるとき突然いただくこともありましよう。その御言の声に私達が耳を傾け従つていくとき、本当の幸いを味わうことが出来るのではないでしようか。



「主の恵み深きことを味わい知れ」とあります。味わって、これから知っていききたいと思えます。やはりウィンドーの中で見えているご馳走だけでは美味しくありません。あれは作り物ですから、中に入ってあれこれと食べて初めて美味しいものとなるように、恵みのお方がどんな方であるか、そして御言に従って行くときどんなに恵まれるのであるかを本当に噛み締めて味わいたいと思えます。噛み締めれば噛み締めるほど、本当に味わいが尽きないだろうと思えます。

これからもこの御言に従って、今までの恵みをもう一度感謝すると共に、今後もソロモンに優るお方のもとに私は走って行き、ヨナに優る預言者が立つていらつしやるのだからそのお方の声に従い、悔い改めるところは悔い改め、従うところは従って、そして神様の恵みに与かりたいと、そう願っております。

それではお祈りいたしましたしよう。ご一緒にお祈りください。



### ③平成三年（一九九一年）二月三日 聖日礼拝

— エレミヤ書 三一章一節から一四節を朗読 —

「わたしは限りなき愛をもつてあなたを愛している。

それゆえ、わたしは絶えずあなたに

真実をつくしてきた。」（エレミヤ 三二・三）

このところは私にとっては忘れられない箇所であり、私が今日に至るまで導かれたところであります。ある方によりますと、エレミヤ書の最高の所であり旧約聖書の最高峰と言われるほど大切なところであるそうです。

私は、昭和七年だったと思いますが、藤村壮七先生のご集会に出させていただいたとき、この所を読んで教えられました。まだ神様を知らなかったんですけれど、もうどうでも神様に帰らなければならぬように導かれたことを思い出します。それほど私にとって、また私共にとって大切なところであると思えます。

なぜならイスラエルの神は、ここに書かれてありますように四百五十年の間、エジプトの地で言うことも出来ない苦しみ、悲しみの奴隷の生活の中であえいでいたイスラエルの民の呻き声を聞いたとあります。

人が声にならない声で呻くとはどんな時でしょうか。もうどうにもならない極限の苦しみ悩みの中で理性も失ったようなとき、また肉体も高熱にうなされるようなとき、声も言葉も出ないその苦痛の呻き声を主はお聞きくださいました。

もう一度、二節を読みます。

「主はこう言われる、つるぎをのがれて生き残った民は、荒野で恵みを得た」

イスラエルの民は神様のお取り扱いの中で現実には荒野を通ったのです。そこは平地ではなく緑も無く生活するには非常に厳しいところです。そんな所で人々は恵みを得てきました。

紅海を二つに分け、道無き所に神様は道を造って、民を敵の手から救って下さいました。水が無いとつぶやけば水を出して飲ませて下さいました。また食べ物が無いと言えばマナを降らせてお養い下さいました。こうして神様は、エジプトを出てこの方、常に民と共に居て全ての必要を満たし、常に目を留めて数々の恵みを得させて下さり、いつも「主がこう言われた」と、主の方から恵みを注いで下さっております。

私もこのところを学びながら思います。私の生涯も荒野の道だったかも知れませんが、しかし主は常にご愛のメッセージをもつてみ声を聞かせ、導いて下さいました。

実は私には母親が四人あります。産みの母と私に乳を飲ませてくれた母、育てた母と私が養子に行ったところの母。ところ

がこの四人の母親が全て私を愛してくれていたことを今もはっきり思い起こします

乳を飲ませて下さった母は、短い間のことですが実の母と変わらないほどの愛をもって育ててくれたのだと悟りました。私が福岡の伝道館にいたころ、突然一人の婦人が尋ねて来て「あなたが野村末義さんですか」と言うのです。「そうです」と答えたらその婦人は突然泣き出したのです。何か訳があるのだろうと思って「取り敢えずお上がり下さいませんか」と、上がっていただきました。

その方が、何も知らなかった私の生い立ちの全てを色々と教えて下さいました。その方は私に乳を飲ませて下さった母であったのです。「あなたが叔母さんと言っている人があなたの母親であり、あなたを育てている方が叔母さんである」等々、涙しながら話は夜通し続きました。

「私はあなたが黒崎の駅から汽車で博多に向かった時、汽車にすがりついて一緒に走りかけて、駅長さんに危ないからやめなさい、と叱られました。そんな思いで別れたんです。あれ以来何十年、逢ったことは無かったけれど、今こうして久しぶりに成長したあなたに逢って、私は嬉しくてたまらない」、と言うのです。私が叔母さんと呼んでいた実母は、割合近くに住んでいたのでよく遊びに行っていました。盆、正月にはそこにも子供がいるので一緒に遊ぶのが楽しみでした。帰りにはその母

が、皆に内緒で必ずお小遣いくれるもので、私は良い叔母さんだなと思っておりました。仰一がまだ二才位の頃でしたか、連れて行ったことがあります。その母は非常に喜んで世話をしてくれていました。私の子供の頃のことでも思い出していたのでしょうか。そして帰りにはやはり、いい年の私に変わらさず過分の小遣いをポケットに押し込んで下さる。何時までたっても子供は子供なんですね。何時までも何とかしてやりたいと思う母親の愛を感じます。

もう一人の育ててくれている母は、何一つ教えてくれることはありませんので疑う余地は全くありません。普通にお母さんと呼んでいたのですが、私が中学になりましてから学校に行かないという事態になりました。父が亡くなってからずっと一人で私を育ててくれたのですが、ここに来てやはり女手一つでどうにもならなくなつたようです。でも何としても私を学校だけは出してやりたい一心から、ちやうど私を養子に欲しいという方が現れ、遂に養子になって無事中学は卒業させていただきました。当時は婦人が職業を持つ時代ではなく、仕事と言つてもせいぜい針仕事で生活の足しにするくらいでした。父は私が小学校に入って間もなく、脳卒中で突然の死に襲われました。父の生前はそこそこ贅沢な暮らしをしていた母ですから、女手一つでそれからの子育てはどんなに大変だったかと思えます。養子に出してでも中学は出してやらなければと頑張つた母が

「お父さんが、あなたの為にと残してくれた家も全部処分した」と言つた時、もう言葉はありませんでした。

そして四番目の母のもとに行つた私ですが、この母が私にとって実母にも勝つて私の面倒を見て下さつたのです。

私が病氣になつて倒れた時も、この母は真剣になつて私の面倒を見てくれました。養父の方は、もう病氣になつてしまつて役には立たないと思つたかも知れません。とうとうクリスマス夜の夜、私が教会から帰つたとき鍵を掛けて開けてくれなかつたのです。その夜は致し方なく軒先で寒い一夜を明かしました。そういうことがありましたが、母は何とか私を助けたいと思つていたと思います。

後に聞いたことですが、母の法事をするからは是非来て欲しいと連絡がありました。私はもう縁を切つていたので行かないと断りましたが、どうしても言いますので参りました。そのとき、その娘が言いますには、「うちのお母さんはあなたをとても愛していたんです。実の子供の私よりもあなたを愛して「たんです」と言いました。私はその愛は信じます。私が病氣の時、私のベッドの床に布団を敷いて終日看護に尽くしてくれたのですから。どうしてこんなによくしてくれたのかと思つほど心をこめて一生懸命看護にあたつてくれたことを今も忘れることは出来ません。

私を支えて下さつたこの四人の母の素晴らしい愛情に包まれ

て、波乱万丈の私の人生を守られました。

母の愛は神の愛とも言われますが、生まれて青年期を迎えるまで、この小さな魂を四人の母に託して愛して下さった主の憐み深いご計画を感謝せずにはおれません。

人間の愛には限りがあります。しかし主は「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している」、と言われております。

イスラエルの民はエジプトを出て遂にカナンに入ったのですが、度々神様にそむいてバビロンにやられ、民は散らされました。しかし神様は民を捨てられたのではなかったのです。もう一度、なんとしてもこの民を祝福の道に導き入りたいと願っていらつしやったのですね。

私もこの様々な試練の中を通されましたが、それは愛なる主の、この限りなき愛をもっともっと知って欲しいとの神様の思いだったと思います。私はこの主のご真実の前に何度そむいてきたか知れません。もう情けないほど自分の弱さをさらけ出してきたのですけれど、未だに神様は私をお捨てになりませんでした。

八幡に生まれ、四人の母達の背後にあって私を守り、限りなきご愛に包まれて、また八幡に帰らせて下さったばかりか、私に家族まで与えて下さった。こんな生涯が開かれるとは、あの若い日の病床生活の中で夢にも思いませんでした。

#### ④平成三年（一九九一年）二月十日 聖日礼拝

—ヘブル 七章二節から二八節を朗読—

今朝はヘブル書七章二四節から二五節を、もう一度お読みいたしましょう。

「しかし彼は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務めを持ちつづけておられるのである。そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によつて神に来る人々を、いつも救うことができるのである。」

祭司のことが書かれています。祭司と言うのは、神様と民の間であつて、神の代弁者として、神様に近づくことの出来ない人の為に神様に近づいて、神様の深いみ旨を聞いて民に伝える人、聖書には仲保者と書いてありますが、神様と民との中間に立つてとりなして下さる人のことです。

この二四節、二五節に書いてある「彼」と言うのは、イエス・キリストのことです。そして「彼」は永遠にいます方です。

人間が立てた祭司は限りなくある者ではありません。役目が終れば誰か代わりを立てなければなりません。そして、また次々と代わらなくてはなりません。イエス様は永遠から永遠まで代わることの無いお方です。私達人間の罪のあがないと

なつて、十字架にかけられ死んで下さった。そして墓に葬られたイエス様は、今は甦つていつも私達と共に居て下さるのです。そして私達の為に祭司となつて、永遠に変わること無く、父なる神様にとりなしをして下さるのです。

もう一度二五節に戻りましょう。

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らの為にとりなしておられるので、彼によつて神に来る人々を、いつも救うことができるのである。」

こんな素晴らしい約束が与えられているのですね。

これは私にとつて最高の喜びでありました。彼によつて神に来る人とは、主キリスト・イエスを信じる人は誰でも救われると言ふことです。

この前も、エレミヤ書三二章の三節で学びましたように、主イエス様は「限らない愛をもつてあなたを愛している。それゆえ、私は絶えずあなたに真実をつくしてきた」と、私達の祈る祈りを聞いて神様の前にとりなしして下さいます。だから私にとつて大きな力の原動力となるのです。

特に、弱い私にとつて信仰に立とうとするとき、自分の力なさを見せつけられます。年を重ねて参りますと、肉体的なことでも勿論ですが、すべての機能の衰えが加速して現れると言いますか、頭の働きもいよいよボケてきたのかと思うような感じさえ持つときがあります。昨日も家内とそんなことを話しながら

笑つておりましたけれど、「八十歳とはこんなものかな」と思つてみたり、ほんとうにどうにもならない老いと言ふことを考えますと、もうこんなことではとても皆さんと一緒に歩くことは出来ない、自分の弱さだけが大きく頭をもたげて不信仰を起すこともちよつとだけ出てくるときもあります。

しかし、いつも生きていて彼らの為にとりなして下さる祭司とあります。そのお方によつて、私がどんなにつまらなくても失望することはありません。神様は、お前はもうつまらないから、役に立たないからと、捨て給うことはありません。

何やかやとつぶやきながら神様の前を退こうとするような者をいつも主は顧みて神様にとりなして下さっているのです、わたしがその先々まで心配することはいらぬのです。

へブル書の四章の方を読みましょう。

「さて、わたしたちには、もろもろの天をとおつて行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかつたが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試験に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかつて時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。」（へブル 四・一四―一六）

一年に一度だけ至聖所に入つて神様に近づき神様のみ旨を受けた大祭司は、祭司の頭です。今は主イエス様が祭司となつて、神様が契約によつて立て給いましたこのお方によつてとりなしをいただき、私達の弱きところ、足りないところを全て思ひやつて下さるので、思い煩うことはいらないのです。何事も思い煩うな、ただことごとくに祈れと主は言われます。

ピレモン書を開きましょう。

短い章ですが、ここではパウロがオネシモと言う自分の奴隷を迎えて、燃えるような愛の心で弱さを思ひやつている、またとりなしをしているところが書かれています。オネシモはピレモンの奴隷だったので。奴隷は主人の命令に絶対に従わなければなりません。そして当時の奴隷は労働の仕事ばかりではなく、ローマとギリシャの関係でギリシャの知識を持っていた学問のある奴隷が沢山あつたそうです。オネシモもそういう人だつたようです。

パウロのこの細やかな心をこめた愛のとりなしを覚えつつ、私は、計り知ることの出来ない神様のご愛の中におかれ、イエス様のとりなしの中で今日まで一切の罪が許され、守られ、生かされて参りましたことを思い、大きな感謝で一杯でございます。

これからどうなるか私自身何も分かりません。しかし、ヨシユアが年をとつてもう天国が近づいた頃だつたと思ひますが、

神様は「あなたは大変年を取つた。今までよくイスラエルの民を導いてくれた。ご苦労であつた。ゆつくり休みなさい」、とは言われませんでした。何とおっしゃつたかと言うと、「あなたは年を取つたが、まだまだあなたが取るべき地が沢山ある」、とおっしゃつています。「まだまだあなたの取る所はいくらでもある、あなたの足の裏で踏む所はいくらでもあると言つたではないか」と、これを聞けば私はまだまだ祈つて行かねばならない。

こういう意味で神様がご期待なさるとすれば、私はここでもういっぺん、私達のためにいつもとりなして下さるこのお方の声に耳を傾けていかなければと思つています。

やはり肉体が弱れば心も沈んでくるのです。私も現実弱つて参りました。そのことは認めても、大祭司なる主イエス様がついで今もとりなし下さつています。み心のままにお従ひして参りましょう。



お祈り

⑤一九九一年（平成三）三月二四日 聖日礼拝

— コリント第二 一二章五節から一〇節を朗読 —

今朝は、八節九節をもう一度お読みします。

「このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。』」

聖徒パウロの証しであります。実に無学な私でありますけれど、同時に私もこの通りのお証しをしないとならないと思います。神様は、パウロの上に不思議な力あるみ業をなさったけれど、私はパウロどころではありません。それこそ何の役にも立たない者ですから問題にもならないのですが、それでも主が働いていることには変わりないと思うのです。パウロも、これはいろんな説がありますが、病気で弱い身体をもっていたらしい、同時に彼は十二使徒のうちにありませんでしたから、キリストの直接の弟子として働いていたわけではなかったのです。直弟子でないということが彼の一つの引け目と言いましょか、みんなから批判される場合にそういったものが出てきたわけですね。

また、彼は病気を持っていたものですから、これでは自分

が主に仕えていくにはどうしても困るので、こういう中から抜けなければならぬと、これは誰しも思うことですね。やはり病気より健康の方が、あるいは貧しい中に苦しんでいるより豊かな生活が出来たほうが、誰しもそうありたいと願うことは当たり前でありますから、やはりパウロも同じだったのです。彼もやはり人間であります。大聖徒には違いありませんけれど、彼がここに言ってますように、三度これを取り除けて下さるよう主に祈っていると言います。三度と言うのは、多分何度も何度も必死で祈ったということだと思えます。聖書を読んでいますと、パウロは目が悪かったんだらうとも言われています。「あなた達が、私にかわって私の目とかえてくれと言っている程、私のことを思っていることを感謝している」と大きな筆で大きな字で手紙の中に書いています。あるいは、サマリア地方の特別な病気を持っていたのであろうとか、人に言われない嫌な病気を持っていたのではとか、想像して言っているのですけれども、いずれにしてもやはり彼も聖徒として主に仕えていくのにどうもこれでは困ると、それで神に祈ったわけですね。

勿論私共も、さまざまな問題を取り除いてもらう為に必死で祈ることは当然のことです。それを求めよ、と神様はおっしゃっているのですから、それは私達のなすべきこと

であります。とにかくにも、何が何でも癒してもらいたい、清めてもらいたい、どうでもこうでもやってもらわれねばいかん。子供が駄々をこねてですね、これを買ってくれー、あれが欲しいーと親の前でその欲求を満たしてもらおうとします。これも一つの祈りの形であろうと思えますけれど、問題を解決してもらおう為に神に祈ると言うことは大切なことであり、それは誰しもやらなければならないのです。ある意味、そこから信仰というのは入っていきることになるのですから、それはもちろん祈らなければいけません。そんなのはどうでもいい、かまいません、そうはやっぱりいかないのです。

私も色々な問題の中から救われて喜んでいたときに、ある方が私に言いました。「野村さん、あんたもうちよつと元氣になつて、折滝先生みたいに体格もよくなつて何とかならんと、そんなやせ細つてひよろつとした体しとつたんじゃ榮にならんばい。それじゃいかん、もつと元氣にならんと神様はどこにいるかわからんよ。それじゃ困るよ、だから必死で祈りなさい」、そう言われました。勿論必死で祈つてますよ。丈夫で健康で証しが十分出来るようになりたいと思うから、やはり一生懸命祈つてます。けれど、自分が願っている通りにならない場合、それでもどうでも下さいというのなら、ちよつと私はそれを伺った時に困つたんですね。これは、ならなかったら神様の榮にならんのだろうかと、これじゃ困

るなど、私も若い時ですから戸惑いました。でも、そういうことは信仰なんだろうかと思つたんですね。それは言うならばご利益信者ですね。ご利益があつたから、こんなご利益があるから私の神様を信じなさいと言う、世間一般の苦しい時の神頼みではなからうかと。

パウロは、この聖徒でさえも三度も祈つたというのですから、祈りを十分積み上げたものと思うのです。それでもパウロは、サタンの使いが打つ一つのトゲが与えられたと言っているのです。サボテンの小さなトゲでもチクチクと痛いのですから、それは多分大きな傷でたまらなかつただろうと思います。けれどそれを祈つたところ、神様からのご返事は「よっしゃ待つとき、そのうちにしてやるから」ということではなかつたのですね。ここにありますが、「ところが、主が言われた、わたしの恵みはあなたに対して十分である」。

あなたに対して十分である。これは、いわゆるご利益信者とはだいぶ離れています。「もう十分あなたは恵まれてるのだよ」、と神様は言われるのですね。私もそう思うんです。もう十分過ぎるほど恵まれてるんです。絶えず恵まれてるんです。どんな状態であろうと、人から見たら貧弱でこれほどにも役にたたんわいと思つても、それでも、もう十分恵んでとおっしゃるんですね。それならもう後は何も言うことは無い。



ヨブが言いましたように、「主が与え、主が取りたもう」。主が与えなされたから取った、取ったからまた与えることもお出来になるお方、だから私は主をあがめますと云ったのです。そんな勝手な事をされるのなら私は知らん、信仰はしない、と云うのではないのです。

「主が与え、主が取りたもう。主のみ名はほむべきかな」と言っているのです。「主が命を与えなされたけれど、また主が命をとりなされる。主がどうなされるか、主の心のままであります。だから私は主をあがめますと、主に感謝します」と、ここにこなければなりませんね。パウロはここにきて目がさめてるのです。もう私の恵みはあなたに対して十分あるんだから何も言うことは無いはずと、そこでパウロは気がついたのです。そして主がそこにいらっしやるのです。

ですから、祈りというものがそこまで行かなければならないと思うのですね。

私も昨年から病気をいたしましたして、その中で教えられますことは、自分というものは何者であるかということなんです。最近榎本先生がそのことについて創世記をお読みになって教えて下さるんですけれど、創られた者としての被造物である私共が、創り主である方のみ旨に従っていくことが生き方ありますから、私が神様になったのでは立場が違うのであります。神様こうして下さい、ああして下さい、何とかして下さい

さいと、まるで神様を小使いのようにして、つい逆の立場になつてしまうのです。神様は私のしもべではないのです。私に神様のしもべなのです。

私は今、祈ることを教えられております。けれどもやはり最初は、癒していただく為に、あるいは問題を解決していただく為に、悩みを取り除いていただく為に祈りをささげます。そうして祈っているうちに段々神様のみ旨を知ってくるんですね。人と交わりをしている間に、話していることや、その人のなさっていることを見て、なるほどこの方はこういう考えをもっているらっしやるのか、こういうことに重点をおいていらっしやるのだとか、色んなことを知りますね。ですからその方についての見掛けと、深く交わつての見方とは違うのです。

私も榎本先生と八年間、福岡の教会で共に生活をしましたけれど、やはり一ヶ月、二ヶ月、遠目から見とつてもその人となりは全部はわからない。一緒に生活をして交わっていきまますうちに色んなことを知るんですね。榎本先生は私の持っていないところを持っていなさって十分物知りでございませうから、頭の悪い私は先生に色々聞き、教えてもらったことを覚えていきます。そうしていくうちに段々と先生の内にあるものが、こんなことまでご存知だ、こんなお勉強までなさったのだなあとか分かってくるわけですね。そうしますと同じ人

でも人間を知ることにおいてものすごく変わってくるわけですね。知り方が大変違うわけですね。すると少々問題が起こっても、ああこれはこういうところがあんなの性質なんだから、私は別に何の差し支えも無いとなつて、決して不都合が起こることは無いわけです。

そうしますと、やはり神様に対して私共がもつてる知り方というものは非常に貧弱でありまして、まだまだ足りない知り方でございますから、これでは曖昧で知った程も知っていない。ですから、ここでパウロに対して主がおっしゃったことは「もう私の恵みはあなたに対して十分に注いであげているから心配しないで」、そしてその先を読みますと「わたしの恵みはあなたに対して十分である、わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」、弱いところに私の力が完全に顕われるんだよ、とおっしゃいました。パウロが完全であつたとしてもしたら、なるほどあの人はあんなに強いんだから大丈夫だと、それでは神様の力は一つも顕われないわけです。

私もそうですけど、まるで無力といえますか手のつけられない欠陥者でありますから、本当に無茶して走られません。最近では家内も昨年あたりからの喘息の状態がまだ尾を引いてますから、ちよつと冷えますと悪いですね。気管というものには繊細な働きをするもので、ちよつとどうかしたら咳が出て排泄物を出します。単なる風邪をひいてるのかと思

つたらヒーヒーやつてるんですね。私は私でこれまた何も出来ません。二人合わせても一人前にいきません、そんな状態にありますけれども、しかしこれは本当に不思議なものでありまして、神様の力というのは、そんな欠陥だらけのポンコツ車で走られんような私達に対して、「わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」とおっしゃつて下さるんです。これがあるからこそ、本当にすばらしいお恵みだと思えます。私のことを振り返つて思いますことは、今日まで支えられてきたのは、キリストの力がこの弱い何も出来ないところに持つてきて完全に顕われて下さつたと申し上げるしかないのです。ですからこれは、パウロの証しであり私の証しでもあるわけです。

私は最近、士師記を読んでいます。皆さんもご存知のサムソンは非常に力持ちで、特別に彼が何か訓練をしたから強くなったというわけではないのです。そのサムソンが、ペリシテ人が攻めてきて戦いに臨んだ時、彼は手に何も持っていなかったのですが、そこにロバのあご骨と書いてありますから何かちよつとげな物だったのでしよう、それを拾つて武器としてペリシテ人を破つたと書いてあります。だからサムソンの手に握られた、ただの小さなあご骨であっても、敵を負かすことが出来るわけですね。ただの骨ですから多分脆い物だっ

たと思うのですね。そんな物で戦いをしても勝ち目はないのですけど、サムソンが握ったという事で戦いに勝った。

あのところを読んでおりました、ああそうだそうだと、思ったところですね。キリストの力が私に宿っておれば、完全に頭われて下されば、別にジタバタする必要は無いんだ、敵は破れるんだ、と。しかし私達は見るところでジタバタ騒ぎます。何とか手を打たんことには負けてしまったら困る。だから何か武器を持ってこようかとか、戦争前にはちやんと準備をして武器をそろえたりと、いろいろ考えていると思います。多分今度の湾岸戦争でも、そんなことがあったと思いませんね。やはり人間はそうやって準備をして戦いに臨もうとしている。

ところがサムソンはそんな物は使いませんでした。これは、キリストの力が彼のうちに働いて下さったことの形であったと思います。私はそのところを思いまして、ああそうか、そんなら私はポンコツでも、何時倒れるかわからんでも、一榎本先生がよくおっしゃっていたのですが、立ってる間は立ってる、倒れる時は倒れるんですから、そこまで行けば神様が何とかして下さる、私も覚悟していけばいいんだなと思いました。

そこでもう一度、九節に「ところが主がいわれた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いと

ころに完全にあらわれる』。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう」

キリストの力が私をすっぽり包んでしまうように、そしてこの方の手の中に握られてしまえばもう何もいらぬ、キリストの力がどんどんと働いて下さる、そういうことを私はしみじみと思えます。

自分の健康状態も勿論そうですが、魂の状態はもっと酷いんですね。ちよっとした言葉でもって直ぐ崩れちゃうんです。そんな状態ではつまらん、もっとしつかり祈って、もっと頑丈な身体にならねばつまらんと言われたら、シヨボンとなつてしまふ。あの時はもう弱りました。本当に直ぐにぶつ倒れてしまふような魂の弱い、そういう私でありますけれど、しかしパウロが言ってますように「キリストの力がわたしに宿るようにむしろ喜んで：」、弱いからキリストの力が働く、強かったら働かなくていいんですね。

子供が元気で強い子であれば手をかけずにほっといていいんです。弱い子はいきません。親の方から手を出して、いろいろ気を配ってやらねばなりません。弱いからこそ力の強い手が出てくるんですね。私共も、靈的にも肉的にも本当に弱くて欠乏を感じるところに、キリストの力が働いて下さるのです。

パウロはそんな状態だから、今まではそれを苦にして、心

に引つかかっていたのでしようね。だから祈ったのでしよう。そして彼はそこを脱出しているのです。

キリストの力が私を覆って包んでしまうように、神様のカバンの中に入ったので、後はもうジタバタせんでもいいわけです。だから喜んで自分の弱さを誇りながら甘んじて耐えていく。「甘んじて」と言うとは何か厭々ながらと言う感じですが、そうではなくて弱い中でも喜んでいるのです。これは素晴らしいことですね。それこそ星野さんのように、人間的にはもう行き詰まって何の望みも持てないような中にあつても、そんな中で喜んで大きな素晴らしい働きをされているんですね。だからまだまだ我々は出来ないことは無い、神様の力に信頼しておれば、本当に出来ないことは無いと思います。

この前私の孫が来まして、高校受験をしたんですが、したら県立に受からなくて、私立は決まっていたんですが、孫が、私立より県立の方が良かったと言うんですね。もつとも親がそんなことを言ったと思うんですね。「お前、私立に行ったからお金がかかるから、県立頑張れ、頑張れ」と、尻をたたいたと思うのです。だからしょんぼりしてる。

「いいじゃないの、自分が希望してる学校に行けるなら」と言うのと、

「どうもあの学校は好かん」

「好かんなら何故受けたの？受かつとるんなら行けばいいじゃないか」

「いや、あの学校は好かん、あんまり良くない」

「良くなかろうと良かろうと、あんた自身がそこで頑張つていきさえすれば人は関係ない。めったなこと言わんと頑張りなさい」、そう言ったんですけど、やはりちよつと変なのがいて苛々するんでしょうね。恐れとるのかも、と思つたものですから、

「あんた日曜学校に来て何を習つとつたの、金言を見て、いつも主が共にいて支えて下さつとるのに、今日までイエス様のお守りのうちに来たじゃないか、しかもちゃんと出来るんだから心配いらんじゃないか」

そしたら「いや県立に行った方がいいかもわからん」

やはり何か恐れてるんですね。自分の状態を見てると不安でしょうがない、心配してるんです。だから私のところに来て、どうしようか、どうしようかと言うんです。「お祈りしてここまで道を開いて下さつているのだから、思い切つて主に従つていきなさい。先ず教会に来て聖書のことばを聞いて、あんたが強くなるとダメだ」、そう言ったんですけど、どうも悩み苦しみを受けることを恐れているんです。

ちよつとヨハネの福音書を開けてみましょう

「見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰

り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにきている。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである。これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」

(ヨハネ 一六・三二―三三)

ここですね、これを読んで話して聞かせたんです。

「日曜学校でも聞いたろう。イエス様は父なる神と何時も一緒にいらつしやつた。あの十字架まで、神様のもとから捨てられて十字架の刑を受けるあのさなかにも決してうろたえていらつしやらない。神様との交わりはいつでもイエス様のうちにあつた。だから自分のことを考えるよりも、父なる神のことを考えられた。主イエス様はいつでも父なる神と共に歩いていかれたんだ。あの十字架の苦しみを負うて命を捨てて下さったお方が私達と共にいらつしやるんだから、このお方が、『勇気を出しなさい、そんなにしよぼんとせんでもいいよ』、と言われるんだから、あんた何をそんなにしよぼんとしているね」。

男らしくないねと言いたいところですけども、おとなしく優しくて人当たりが良いのですが、何か気合がぬけてしまっているんです。イエス様が勇気を出しなさいと書いてるの

だから勇気を出して、イエス様は十字架にかかつて死んだだけでなく蘇って今も一緒にいて下さる。世の中では悩みというものが必ずある。けどあつてもいいじゃない。それを乗り越えさせて下さる方が一緒にいて下さるんだから心配しないで行きなさい、と励ましてやつたんです。

私自身、靈的にも肉的にもそういう弱い者です。それでも神様は憐れんでここまで支えて下さった。私も感謝してるわけです。このキリストの力がここまで私を覆って守っていて下さる。もし悪魔が攻めてきても、――ヨブの時もそうですけど、神はそれを許してサタンを使いとして送られた訳です、必要とあれば取ってしまうことも出来るわけです。だから決して恐れずに頑張つていきなさいと、頑張ると言うのは一生懸命主に信頼することよ、と言ひ聞かせたわけです。小さいなりに頭を痛めとるんでしようが、私達もそれと同じことで、パウロが言つてますように、神様の力が私を覆って下さっているんだから、全部カバーして下さっているから外敵にあたらないうです。

寒さがきますと私のところのサボテン類や月下美人等は家に入れなければならぬのですが、大きいものですから入らないですね。それでビニールの大きいのをかぶせて冷たい外気があたらないようにしてベランダに置いてるんです。そうしますと少々霜が降っても越冬出来るんです。そして花

が咲いてくれるんです。そういう意味で、私共の弱さを神様が知っていて下さって私共を覆って下さり、ここはこうだよとちゃんと教えて下さるんですね。ちゃんと教えられた通りにやっていけばいいんです。

先程から申し上げたように、私は子供達や友人、知人の為に名をあげて祈るけれども、その人達が単なる癒しを受け問題が解決して、ああ良かっただけでは困るんです。もう一つ中に入って、主を信じ、主の覆いのうちにあることですね。

ルツ記にありますルツがボアズに思われていく、あのくだりを読みますと、あれはまさに神様の愛の思いをもってルツがボアズと一体になっていくところですね。ボアズの贖いがルツの上に行われるあのところは私は非常に感銘深く読みます。また、そうなるようにナオミが教え、ルツがその通りにして、ついにボアズの奥さんになって、彼がダビデの子孫となり聖徒となっていくところを読みますと、本当に大事なことは、私共がいつでもキリストのうちに覆われキリストの力のうちに守られて、そして信仰によって神の力に守られているということなんです。私達自身が努力して自分を清めようとしても、それが私には出来ない。そんな私みたいな者の為に十字架にかかって贖って下さった主イエス様を受け入れて、その方の中に私が包まれてしまうと、コリントで読みましたようにキリストの力が覆って下さってそして包まれてしまえば、

痛くも痒くもないんです。もうキリストのものですから、キリストが良いようになさるのでしよう。そうすれば神のなさることは素晴らしいことでぬかりはありません。

もう一つ読みましょう。

「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。」

(エペソ 三・一六―一九)

パウロの祈りであります。本当にキリストの愛の中に包まれてしまった、そしてその力で覆われてしまったなら、満たされていくことは当然です。

私も最近の生活はそうなのです。まるっきり家内に助けてもらわないと出来ないようなことばかりになってきているんですね。ですけれども、いよいよとなれば神様がそこまですと力を添えて支えて下さるのを体験させてもらっています。とてもポロな身体でダメですけど、弱いなら弱いなりに神様は用いなさるんですね。弱くていいんです、神様に従ってい

けば、神様は素晴らしいことをちゃんとなさると思えます。

私は福岡におります時に、土曜日には、榎本先生と私ともう一人鷹取さんの三人で、東と西と真中とに分けて皆さんの家を訪問しました。ところが訪問というのはなかなか難しく、自分の気に入った所、受け入れて下さる所には入りやすいのですが、「また来たか」、と思われるのもです。玄関を開けて「お変わりありませんか、明日礼拝にどうぞおいで下さい」と言つて帰るんです。それが気のおけない所に行つたら腰掛けて色んな話しをして帰ります。これが玄関で話すのと上り込んで話すのはだいぶ違いますね。

だからよく牧師館のお茶を飲んだら皆さん恵まれるとおっしゃいますね。上り込んで先生とお茶を飲んだり食事をしたりしながらお話しを共にするということは最高です。

そのように私共は、イエス様の力の覆いの中に、あるいは愛の中に育まれていくなら、少々の事が起こっても動きません。何故皆ガタガタ動くのかと言うと、そこから飛び出してしまふからです。イエス様に包まれ共にいるということは、たとえ少々の問題があつても、たとえ人から何か言われたとしても、自分は神様と直結しておけばいいんですから大丈夫なんです。そして人知を遥かに超えたキリストの愛を知つて、愛に根ざし、愛を基いとして行かなければならないということを知るわけです。

コリント第二の手紙第一二章に戻りましょう。

「それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。…なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。」

わたしは弱い時にこそ強い、弱いからこそ強いと、信仰を持つていきたいですね。そしてこの一週間、特に主が十字架におかかりになった記念の週ですから、私達は、なおあなたの主をあがめていきたいと思ひます。ではお祈りいたしましょう。

(※編者注：これが集会での最後の証しとなりました。)



### (3) 教会誌「ぶどうの木」の証しから

#### ① 福岡浜の町基督伝道館の思い出

昭和七年頃から二十年頃まで

福岡浜の町基督伝道館は、私が救われた昭和七年一月頃は、浜の町通りの魚の町寄りの路地を入った突き当たり、普通の平屋建ての家が会堂でした。畳で座布団が敷かれて集会が行われていました。昭和八年から教会堂は、同じ浜の町の末永さんの会社の（たしか丸五運輸の会社と聞きました。）二階事務所の跡に移転しました。二十畳以上の大広間で、北側と南側とが硝子窓になっていて、明るく広い会堂で夏には浜風が北から吹きぬけてとても涼しい会堂でしたが、さすがに冬場は、寒い風や雪が強く当たりました。座布団を五列か六列くらいに縦長く敷いて集会を致しました。

集会は日曜日、朝八時半より日曜学校、十時から聖日礼拝、午後二時リバイバル祈禱会、夜七時半伝道集会、水曜日は夜七時半祈禱会、金曜日夜七時半から路傍伝道、火く土曜は毎朝五時半から早天祈禱会と、これが一週間の定例集会で、折瀧先生のご用で行われました。また、他に家庭集会が、たしか第三木曜日に久留米の西さん宅で、第一木曜日が吉井町（筑後）にと出張されました。

伝道集会では、初めの頃、田島兄や松田兄が司会のご用に当たり、日曜学校のように、模造紙にリバイバル唱歌や靈感賦を書いて歌いました。講壇は会堂南側の窓の方にあり、二段ほど畳より高くなっていました。向かって左側には、オルガンがあり、殆ど鷹取姉（献身者）が担当で早天祈禱会をはじめ、伝道会も祈禱会も全て讚美歌や靈感賦などを弾いていました。右側には、床にリノリウムを張ったスペースに、グランド・ピアノが置かれていて、末永の実枝子さんが礼拝の讚美歌を弾かれ、また時には宮内昌子さんが弾かれたこともありました。

日曜日の午後二時からリバイバル祈禱会でしたが、この時は会堂中央に座布団を円形に並べて、十数名が集まりました。集まる人は、大体、末永雪姉、鷹取姉、榎本師、花田兄、平岡兄姉、西弘道兄に私などで、聖言を与えられてから、各自が重荷を負う事柄や問題を持ち出して、ある人は病人のために、または青少年問題とか、大きく国のため政治のため、偶像信仰の人々のためとか、様々の事で次々と回りながら祈り続けました。そして靈感賦や、リバイバル唱歌などを歌って非常に燃やされたものでした。

講壇については、一寸書き忘れましたが、上等の木を使って造られていましたので、ペンキやニスをぬらないで、豆腐のおからで磨きあげました。毎朝、早天祈禱会が終わって、



おからを買に行きまして、半分は食料で、半分を布袋に入れて、丁寧に磨いてきれいにしました。

お説教の時、先生の立たれる卓の足元に座布団を、また卓の左側にも一枚の座布団を置きました。それは集会が始まり、先生が先ずお祈りをなさるときに、また説教の後の祈りの時にその座布団に坐つて祈られました。また折瀧先生は、話される時に、時々喉を潤しなざることがありましたので（多分扁桃腺で喉が悪いためでした）、必ず水とコップを盆にのせて卓上に置いていました。これはずつと最後まで続けました。

日曜日の朝八時半、日曜学校の前に、二階の講壇のある方の窓硝子を開けて、大太鼓を叩いて（主として榎本師）、トランペット（野村）他に小太鼓やタンバリンなどで、チャイムの代わりに近所の人々に案内しました。後にこの音を聞いて、一人の病氣の方が信仰を求めておられたということを書きました。

この太鼓やトランペット、小太鼓にタンバリンと、もう一つ、赤い十字架のついた提灯を加えて、金曜日の夜は路傍伝道に行きました。魚の町や箕子町、六本松、柳原、港町方面にと、あちらこちらの町角で行いました。メンバーは、榎本師、鷹取姉、野村、初めの頃には、鹿子木姉や中野兄、田島兄、松田兄、後には、平岡兄姉、花田勇兄、城戸兄等が参加しました。誰かが立って証しをした後、折瀧師や榎本師が説

教をされました。聞く人が一人でもあればその人に向かって、誰も聞く人が無ければ家のなかにむかつて、大声を張り上げて伝道しました讚美をなし、喜んで感謝して帰りました。祈りをもつて出発、帰ってまた祈りました。

トランペットは、昭和九年頃だったと思いますが、折瀧先生が買い求められ、私に吹くように言われ、さっそく本を買った。全然分らないもので一から練習を始めました。ちょうどその頃、佐伯憲治さんがおられました（末永弘海先生の弟で、元海軍軍楽隊で吹奏楽をやっておられた専門の方でした）ので、色々と教えていただいて何とかリバイバル唱歌も讚美歌も吹くようになれました。後には市で催された講習会にも出たりして、本格的に習って吹いておりました。本当に感謝でした。

もう一つ、路傍伝道には警察の許可を要しましたので、その前日までに派出所に行き、許可願の書類を出して許可を得ました。特別集会は、記録も説教ノートも空襲で焼けました。確かではありませんが、大体、末永ご主人の召天記念日頃に、毎年三月か四月頃だったと思いますが、藤村壮七先生がお出でになられ、エペソ書などのお説教をしてくださいましたのを覚えています。時折、末永弘海先生や宣教師イエーツ先生、沢村先生など来られて特別集会をして下さいました。聖会は、四日も五日も続き、いつも盛会で恵まれて来りました。

伝道館に於いては、集会は勿論のこと、全てのことには常に祈りが捧げられて、主の全能のみ手を動かす働きをしていたことをはつきりと言うことが出来ます。そこに力と祝福があり、今日もそれが続いているのだと信じます。これは先に私が「伝道館の思い出」に書きましたが、朝に夕にとよく祈りました。

幸いに、教会及び牧師館の裏には末永さんの庭があり、そこは広い立派な庭で、宗像方面の海岸の松だという、素晴らしい松が何本もあり、芝生が綺麗でした。大小の岩や植木も花もあつて相当なものでした。そこに祈りの場を貸していただいて、折瀧先生や榎本先生、鷹取姉など、各々良き場所を得て、朝まだ暗い中、夜も夜露にぬれて、寒い冬は毛布や丹前をかぶつて、夏の夜は蚊にさされながら団扇を使って祈りました。教会のため、集会のため、多くの魂のため、ご病人のためにと、次々に祈りました。今日は誰もいなくて一番に來たと思つてみると、もう既に誰かの祈りの声が聞こえているようなことでした。

献身修養生の部屋は二階会堂の隣りにあり、四畳半に押し入れつきでした。或る時、私共の部屋に泥棒が入ったことがあります。多分玄関の鍵をかけるの忘れて寝たのか、或いはこじ開けて入ったのか、二階の部屋に寝ていたのに全然気付かずに眠っていたのに、主は目覚めて守ってくださいました。

その翌朝、早天祈祷会が終わつた時、玄関に尋ねて來られた人が私のオーバーコートを抱えておられ、「お宅ののではないかと持つて來ました」とのことに驚きました。全然知らぬ間に自分のオーバーコートが人の手にあるとは、うかつなことです。無くなつておれば、その冬はオーバーなしで震えていたはずの所でした。その方の話によれば、朝起きて見ると、その方の門扉の上にチョンと引つ掛けてあつたそうで、多分ポケットの中に現金でもと思つて急いで取つてみたら何も無かつたので、面倒だと捨てて行つたものでしょう。助かりました。それ以來、この方が教会に來られるようになりました。この方こそ城戸高吉兄です。

太平洋戦争が始まつて少し経つた頃、時期は定かではありませんが、珍しく熱心に各集会に來る人がありました。昼の集会も夜の集会も真剣に渴いて來る人だと思つていました。ところが、しばらく後に本人の正体を知つて驚きました。この人は特高警察の刑事だったので。キリスト教は敵国の宗教であり、スパイの行動でもありはしないかと、何か不都合なことでもあれば、早速手を入れる考えだったのでしよう。しかし、主のお守りの内に何の出來事も無く守られ安全でした。戦時中は、スパイやその他の疑いで捕えられた牧師先生方も多く、大変な時代でした。

戦争も激しくなり、どこも物質的に乏しい時代でした。教

会が大きな屋敷の中にあることから、毎日のように物乞いのお客さんがやって来ました。当時の言葉で「ルンペン」と称していました。「何か食物を恵んでくれ」とか、「郷里に帰る旅費を貸してくれ」とか、時には「刑務所を出て来たばかりのものだ」と、すごんで無心するものもありました。この応対にはいつでも榎本師が上手に話をして伝道されました。霊も肉も餓えて乏しい時代でありました。

早天祈祷会の出席者は、名前を忘れて思い出せませんが、一寸覚えています方々は、末永雪老姉の他は、松田兄、田島兄、中野兄、鹿子木のご家族、平岡兄姉、花田勇兄ご一家、大谷姉、宮内姉、城戸兄姉、大橋兄姉、岩崎姉、長島兄姉。

なお、これだけは忘れられない方があります。私が救われて間もない昭和七年頃、私は地行西町に住んでいました。その当時、早天祈祷会に出るには、今川橋からの一番電車に乗って五時半の集会に出たのですが、次の電停、地行東町から必ず乗ってくる若い娘さんがありました。この方が、秦梅子さんでした。長年の病床生活から、イエス様を信じて、信仰により立ち上がって喜んで集会に出られていました。やせ細った病後の体でしたが、主にあつて強められておられました。この方がクリスマス感謝会で、小さな声でしたが、力をこめて、心からの喜びと感謝で主をさんびされた時の記憶は、今も心に残っていて消えることはありません。それは旧明治

版さんびか六八番でした。一節三節は省略しますが、

二 あやめもわかぬ夜

あらしはたけりて

しずむは今かと

死を待ちしときに

のぞみとなりしは

ベツレヘムの星

この讚美歌は梅子姉のお証しそのものでありまして、心をつたれました。榎本先生が、姉妹の最後の時にお祈り下さつて、平安と勝利で召天なさいました。

榎本先生が八幡に遣わされて行かれた後は、早天祈祷会の準備が大変でした。それまでは、どんなに夜が遅くても、必ず朝は早く目覚めて準備して下さいました。ついでながら書きますと、夜の集会后、折瀧先生と私たちの祈りの時が終わりますと、先生とご一緒にお茶と交わりの時でした。その時は色々といふご指導をいただき、また、先生の落合時代の柘植先生のお話や山陰の時代のことなど、時の過ぎるのを忘れて、十二時を過ぎ一時近くなつてしまふことがよくありました。そして朝五時には起きませんと、早天祈祷会に来られる皆さんのために門を開け、玄関を開けねばなりません。寝坊の私は、榎本先生のように早く目が覚めませんので切に主に祈りましたが、うっかり寝すぎたら大変、皆さんを外に立

たせてしまいます。暖かい時ならよいとしても、冬の寒いときは大失敗です。冷汗をかくことがありました。よほど私の胸中に強く残っているのか、五十年以上も経っている今でも、時々この失敗の夢を見ることがあります。

夢で思い出すことがもう一つあります。毎月一回（明確ではありませんが第三木曜日）筑後の吉井に、夜七時半からの家庭集会に行きました（名前は立山さんでした?）。折瀬先生、榎本先生と私が順番に交替で遣わされて行きました。午後から出発して、夜の集会の帰りは遅くなり、久大線で久留米で乗り換えて帰る終列車は、旅慣れぬ私には、うかつに居眠りもできず緊張と祈りでした。このときに駅で乗り換えの時間に切符も買えずに取り残された夢を、今ごろも時々見ている、やれやれと胸をなでおろします。

昭和十年か十一年頃と思います。折瀬先生の新年聖会のお説教を、私がノートから書き出して一冊の本をつくりました。題名は「十字架の福音」でした。現物は残念ながら空襲の時に焼かれました。しかし、今もはっきりと「十字架の福音」が心に浮かびます。これこそ折瀬先生が柘植不知人先生以来受け継いで信じ、また標榜してこられたものであり、今に至るも変わらざる純福音の基として残っているものだと思います。

またはじめに戻りますが、昭和七年から八年頃にかけて、

私がまだ地行西町に居ました頃、平岡さんが鳥飼におられて、近所の子供達を集めて火曜学校が行われました。平岡さん夫妻に花田勇さんや平岡さんの姪でよしの姉など、それに私もお手伝いをさせてもらいました。なにしろ珍しく近所の子供達が大勢集まり、ひところは百人くらいが集まってなかなかの盛況でしたので、收拾するのが大変でした。ことに下駄の整理には困りました。間違えたり紛失したりでひたすら祈るばかりでしたが、これらは私も大いに恵まれることで感謝でした。

教会は末永さんの屋敷に続いていましたので、末永さんのご一家の方が集会に出られていました。浜の町周辺や魚の町には、大谷冬子さんのご一家、高橋さん、花田勇さんご一家（以上は魚の町）、玄関の門の傍らの家には、はじめの頃は築山さんのご家庭が、次は積山さん、その次は城戸さんの家庭と次々におられました。門の内側のすぐ傍には伊熊さん一家が、そのまた奥には、鹿子木さん一家が住んでおられました。門を出て浜の町の通りには住宅が並んでいて、有名な黒田家別邸などの大屋敷もありました。すぐ近くに中野さんがおられ、人形を造っておられた出西さんの一家、向かい側にはマッサージの大橋さんなどおられて、集会に出ておられました。簀子町では岩崎姉、長島兄姉、後には吉留さんもおられました。その他では、黒門に花田さん、お兄さんの新一郎

兄は唐人町、鳥飼・六本松には、中尾くに姉がおられました。この奥さんは私を伝道館に導いて下さった方です。都島春來兄は箕島だったと思います。平岡兄妹は博多駅の前で果物屋さんでした。また古い下駄屋さんのお店をされた小林はる姉などの方々が集会に出られていました。あとはあまり記憶に残っておりません。

折瀧先生が野菜や花の種を買ってこられましたのを、私共がそれを蒔いて苗を造り育てました。胡瓜や茄子、南瓜なども苗から育てて造りました。畑は牧師館の裏に庭があり、元末永さんのテニスコートだった所を耕して造らせてもらいました。神様の祝福で皆良く出来ましたので食卓に上りました。南瓜などは、長いや丸いのが石垣の上に沢山転がっていました。キャベツも大きな玉が沢山できました。玉葱も収穫したのを竹竿につるしてしまっていました。畑の縁にはバラの木を植えて、肥料を入れたモミ殻を置いたり、時には町で馬糞を見たら拾って来て根元に置いてやりましたが、沢山の花が咲いていました。丁度蕾がふくらむ頃、一夜のうちに蕾の根元が虫にやられて被害をうけましたので、それを防ぐために紙のテープで巻いてやった大変なこともありました。

モミ殻で思い出すのは、折瀧先生がアスパラガスがお好きでしたので、畑の隅に植えて、モミ殻を深く高く積み上げて新芽の柔らかいの出させて収穫しました。

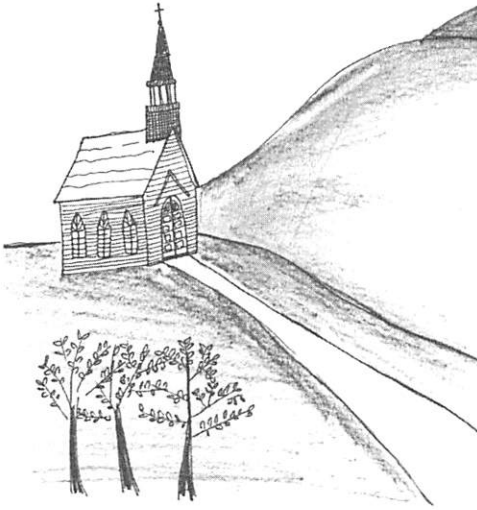
牧師館の中庭には大きな無花果の樹が二・三本井戸端の近くにあり、これに時期になるとつぎつぎに大きな美味しい実がなつて、お子さん達の何よりのおやつでした。日当たりのよい南側でしたから珍しい草花も咲きました。薫り高い西洋すみれの小さい紫色の花が咲く春先には、沢山咲くと廊下まで匂いました。折瀧先生の好きな花でした。

畑の一隅には伝書鳩を飼っていて、遠方に行くときにケースで持つて出て、行き先から家に状況や連絡を足につけて放すと、無事に帰って来ました。また、鶏舎を作り数羽の鶏を飼っていましたが、卵もよく生んでいました。一時はひばりを飼いました。また鷹も飼っていました。これは城戸さんが山に行ったときに捕えたものですが、みな子供さんたちの勉強の参考にしました。ひばりは、すり餌で、鷹は鯛や鯖の頭を魚屋でもらいました。何も無いときは大きな蛙をそのままやりました。中々賑やかでした。

昭和二十年六月十九日は、福岡市に、アメリカ空軍機B29やグラマン等の沢山の編隊がやってきた大空襲の日でした。夜八時過ぎから空襲警報が出て西の方から爆撃が始まり、ついに福岡上空に至り、物凄い爆音と光と火とが市街に広がって、特に浜の町も、すぐ近くの上の橋には二十四師団司令部及び兵舎がありましたので集中して焼夷弾に見舞われ、伝道館も末永邸から浜の町一帯は火炎に包まれてしまい、さなが

ら最後の審判の様相を見せられました。一夜明けた朝は、焼け爛れた木々や灰の山でした。

万物はやがて消え失せるとき、主の命の聖言だけが限りなく永遠に立ち続けることでしょう。このあとからが、福岡大濠公園教会へと時代は移って行きます。(完)



## ② 悪 夢 ？

S · N · 生

鬱陶しい暑い夜、十時過ぎ。

「ブウツ、ブウツ」と嫌な音だが、近頃はもう慣れっこになったサイレンの音。

「空襲警報発令！空襲警報発令！」

三度四度連呼する声を聞いたと思つたとたんに、頭上に異様な金属音に似た音が、激しく「バリバリ、バリツ」と鳴つた。

遂にわが町に敵機襲来が現実となつた。今まで何回となく警報だけは繰り返していたけれど、実際にはその来襲はなかっただけに、覚悟はしていてもスワツ一大事とばかり、防空訓練の時の服装にゲートル巻きで二階から飛び降りるようにして階下に降り立つと、おばさんや娘達がワイワイ騒いでいる。

「今度は本当に来た。海岸の埋め立てに避難した方が良くも分らんよ。家の中の壕では危ないかも知れん」と言うので、「じゃあ、僕が皆を連れて待避しよう」と表に出たら、またもや頭上で、「バリバリバリツ、ドーン」と激しい爆発音がした。

「さあ、みんな僕と一緒に走るよ」と皆を連れ出して逃げ出した。僕は途中で考えた。みんなが埋立地まで着いたらもう一度帰って大事なものを持ち出せばよいと軽く考えていたから必死に走った。大勢の人達がワウツワウツと叫びながら走

つて行く。どの姿も必死である。ふと上を見れば、飛行機から落される焼夷弾が花火のように広がりながら光を出して落ちてくるのが見えた。すぐ近くにある二十四師団の衛所から数頭の軍馬が勢いよく兵隊と共に走ってくる。周囲の町並みの家からは早くも火の手が上がっていた。たちまち、またたく間に火事である。しかしもう消防車は来ない。

「ワーツ、逃げろ！危ないぞ！」。様々な怒号ともわめきともつかぬ叫び声が聞こえるが、今はもう自分だけでも精一杯の状態だった。

やつこのことで、火の中を海岸の埋立地まで皆を連れて来たが、次々と花火のように飛行機から落とされる焼夷弾で、すっかり火の海になってしまった。火災が起ると風も起るのか、避難した埋立地に向って火の流れが迫ってきた。

イスラエルの民がエジプトから出てきて、後ろからエジプトの軍隊に追われ、前には紅海があつて進退極まった時のように、僕達の前は海であり、後ろには迫ってくる大きな炎の海に挟まれてしまった。初めから神に祈ればよいのに、ここに至つてやつと主に向かい、「イスラエルの神よ、モーセの神よ、何卒お助け下さい」と祈るのであった。

主は堤防の下にある海の水を見せられた。そこに一本の丸太の棒が鉄の鎖で結ばれているのを見つけた。その時、「これだ」とばかりに堤防を乗り越えて丸太の上に飛び乗った。もう

この状態では、もう一度家に帰ることなどとても考えられぬことになっていた。

「さあみんな、水に濡れても焼けん方がよい。早くここに降りておいで」と、皆を水の中に下ろした。材木は波に浮いたり沈んだりで、もう女や子供達も生きた心地はなく、やつこのことで炎と熱風から逃れることができた。

一息ついてやれやれと思つたら、今度は湾の中に待機した船に向つて焼夷弾が落とされて海が火になった。今まで風が陸から海に吹いていたのが、たちまち海から陸の方に吹き出した。それでまた皆は元の埋立地に這い上がった。

その時、燃え上がる火により大きな邸宅も小さい長屋も、何もかも皆容赦なく炎の中に吞まれて行つた。手のつけようもなく、燃え崩れる建物をただ呆然と見ているだけでなす術もない。日頃、隣組でやってきた訓練も消火作業とても、この猛火では全くのままごとにしか過ぎない。誰も彼も無言で堤防に寄りかかつて、まんじりとも眠りもできずに一夜を過した。

敵機は去つていた。夜が白みかけて東の空に陽が昇ると、まるで一晚の悪夢でも見た者の目覚めようであった。

太陽が昇るとまた驚いた。兵隊さんがゴロゴロと地上に転がっている。眠っているのではない。馬が死んでいる。瓦礫と灰の中に、死の臭気が鼻をつく。年寄りか若い人かも見分

けのつかぬ女の人が、髪はチリチリに焼けて胸も体もあらわに焼けただれた姿で、半死人のようになってうめいている。さながら、ソドムとゴモラの町に神の怒りの火が天から降って焼かれた時もかくの如きかと想像するほどであった。

それでもまだ命のある人は幸いだ。僕はふと自分の足元に目をやると、ゲートルに十円硬貨ほどの穴があるのに気がついた。焼夷弾の破片か火の粉によつて焼かれたものである。もしズボンをはいただけなら足を焼かっていたであろうが、守られて足はどうもならなかった。海水に濡れた膝から下のズボンや靴もブカブカになっていたけれど、全く、見えない神のみに守られていたのだと知り、心から神に感謝を捧げたのである。

わが家に戻って見たら全てはきれいに灰になっていた。何の形もないが、ただそれだと思われたのは、安全かみそりが曲がつて無残な姿で転がっていた。持物は一切合切、悉く灰になってしまった。本当に、見ゆるところの物はすべて暫くであり、永遠に続くものは見えない神であり生命の言葉であることをしみじみと教えられた。

「では、わたしたちはなんと言おうか。神の側に不正があるのか。断じてそうではない。神はモーセに言われた、『わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者をいつくしむ』。ゆえに、それは人間の意志や努力に

よるのではなく、ただ神のあわれみによるのである」

(ローマ九・一四〜一六)

神の一方的な憐れみによる支えにより、弱い僕は守られてきた。そして今日があった。

ソドムとゴモラの町が天からの火で焼かれたとき、ロトはアブラハムの祈りと執り成しで救われた。主イエスの十字架による執り成しもしなければ、今日の自分はありません。こととであった。また、聖徒の篤き祈りが背後に捧げられていたことも見逃すことはできない。

着の身着のままの裸同然の姿で、焼け落ちる大火の中から、また魂の滅びから脱出して、主イエスにお逢いできた。ただ、恵むところの神のご意志が憐れみとなって僕の上に注がれていた。

かくして、迷い出でんとした魂も立ち返ることができたのである。そして、今日もまた同じように憐れまれて……

— 今から三十八年前の六月十九日 — だ。

小学校一年の孫娘が、空襲のことについて、みんなのお爺ちゃんやお婆ちゃんが体験したことについて話を聞いてくるようにと先生から言われて、わざわざやってきたので、早速話して聞かせたが、この幼い子にそれが理解できたかどうか？ピンと来ない話だろうなと思った。



数日後、先生から、よく話しをしてくれましたと礼を言われたとのこと。その先生のお母様もやはり博多(奈良屋校出身、私もまた奈良屋校出身)で、空襲に遭って箱崎の海岸に逃げて助かったとか。「よく似ていましたね」、であった。

(ぶどうの木第十四号 一九八四年四月発行)



### ③ 死んだ犬

野村末義

少年ダビデは、イスラエルの国王であるサウルの気分が悪いつきにいつでも琴を弾いて王様を慰めておりました。その少年ダビデは、一羊飼いの息子として育ったんですけれども、絶えず王のそばにあつて、そしてその病気のときには琴を弾いて王様を慰め、励ましてきました。

このサウル王様に、息子であるヨナタンという少年がおりました、このヨナタンがダビデを非常に愛し、またダビデもヨナタンを愛していたという、そういう仲でありました。

かたや王の息子であり、かたや羊飼いの息子であるという身分の違い、家柄の違い、地位の違いがありましたにもかかわらず、彼らは二人とも本当に親友として深く愛し合った仲でありました。

だんだん王様の病気が激しくなり、やがてダビデはその王様から自分の命を狙われるような羽目になるわけですけど、これは皆さんご存知の通りであります。ところが、ヨナタンが「私の父が亡くなった後にあなたは必ず王の位につく人だから、あなたが王になった場合は、私と私の家族と一同の者の面倒を見て欲しい」という、そうした依頼をダビデに申しませす。

やがてペリシテ人との大激戦が起り、サウルもその息子ヨナタンと共に戦いに敗れて死んでしまいます。

そして、戦いが終わってダビデは、サウルとヨナタンが亡くなったことを聞いて、かつてヨナタンと約束したサウルの家を顧みるということを思い出し、しもべたちに命じてサウル王様に関わりのある者が誰かいないかと捜したところ、メピボセテというヨナタンの息子がいたのであります。そこで彼はこのメピボセテというヨナタンの子供をしもべに命じて彼の前に呼び出したのであります。

これが、サムエル記下九章五節から九節にありますメピボセテの伝記であります。

ここに、標題として「死んだ犬」と書きました。元気で生きている犬でしたら、主人に飼われてあるいは愛されあるいは恵まれ、主人の膳から落ちるパンくずで豊かに養われて、生き生きと生きることができたに違いありません。しかし、ここにあります「死んだ犬」といえば、もはやその価値はありません。死んだ犬ですから、皆だれでも嫌います。これは共通の考えであります。死んだものは葬ってしまいます。泥に埋めてしまうか、あるいは溝の中に捨てるかでしょう。こういう末路になるのが「死んだ犬」でございます。

ところで、ここでメピボセテが王の前に呼び出された時に言った言葉を読んで見ましよう。

彼は、「王様、なぜ私を、この死んだ犬のような私をどうしてお呼びになったのですか」と言っております。しかしダビデは、「ヨナタンとの約束があるから、これを覚えてお前を呼んだのである」と言い、そして彼はそのメピボセテを自分の家に召し寄せ、自分の家の食物をもって養うという、そういういきさつになるのでございます。

ところが、このメピボセテという人は、幼い時に乳母の手から転げ落ちて足を痛めたために小さい時から生涯足が悪くて自分で立つて生活ができなかったという、そういう惨めな人生であったのです。

使徒行伝にもそのようなことが書かれています。美しの門に毎日連れて来られる足の動かない人が施しを人に乞うて生活をしていたということが書いてありますが、そのような人生を彼もやはり送らねばならなかったのだと思います。

ですから、このような醜い自分をどうして王様が王の家に迎えてこれを愛してくれるのですかと訝ったのは当然だと思います。

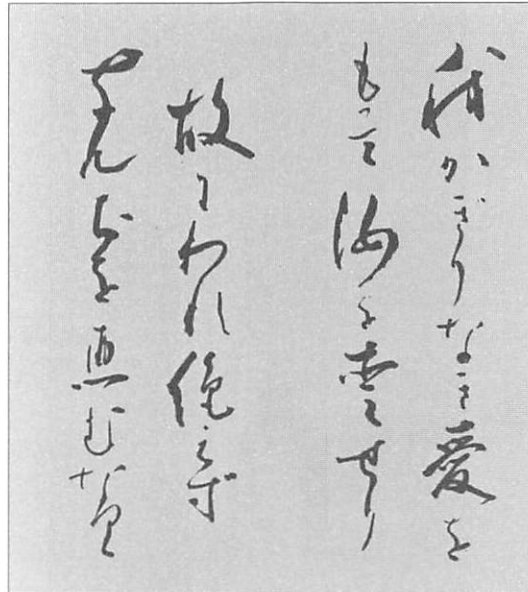
私たちはどうでしょうか。この死んだ犬のような、メピボセテが自らを言ったその犬と同じように、神様に逆らいキリストが何だと蹴飛ばしてきた、そしてまともな人生を歩くことができない惨めな人生を送ってきた私どもを神様の方が憐れんで下さった。こんな仕方のない、汚い、見るも無惨な姿

の、まるで泥まみれの死んだ犬のような者を清めて、そして立派な生きた犬として育てるために、罪のない方が罪人となつて、きれいな方が汚い者となつて、罪人のあの醜い姿になつて十字架について下さった。この尊い十字架の贖いのゆえに、今私どもは拾われて、彼と同じく王の席に連なり、毎日毎日王の宮殿に住んで、王様の生活と同じような生活をしているのです。こんな死んだ犬のごとき者が、主イエス・キリストの契約のもとに贖われ、癒され、新しくされて、そして今日、天国市民として日々、主の主、王の王のそばで安んじておられる生活に入らしていただきました。十字架を崇めて心から感謝でいっぱいであります。

八十歳の今日、信じて救われてもう六十年、その生涯の重みをしみじみと味わうこの毎日であります。いやいや、これだけではいけません。これからもさらに、置かれた立場で、今は病床生活にありますけれども、なおここから、あなた方は世の光だとおっしゃいます。また、地の塩だと言われます。この世の光としての使命を、また地の塩としての味わいを豊かに持ち、いま置かれている一日一日のこれからの生活を、主の前に歩みたいと心から願つておる次第であります。これで私の証しを終わります。

(一九九一年六月 入院中の病床にて口述)

(ぶどうの木第十八号一九九二年二月発行)



三 野村末義の証し

(教会誌「ぶどうの木」から)

(1) 「みぎわ」騒動記 (誕生とあゆみ)

X Y 生

主はわたしの牧者であつて

わたしには乏しいことがない

主はわたしを緑の牧場に伏させ

いこいのみぎわに伴われる

(詩篇三・一〜二)

思えば、前田教会週報の歴史も、教会の歴史と共に歳を取つたものである。そもそも週報の誕生は、教会堂献堂の年であつた。それは河本実兄の発案によるものである。

当時、まだ物資の乏しい時代だったから、よくもこんなに始められたものだと言ふながら感心する。最初は、河本商店の古い謄写機を借りて作ることにした。だが折角の発案も用紙がないので、はたと行き詰まつた。ところが不思議！神の憐みにより、主のご用のためとあらば全ての必要を満たし給うお方で、更紙だけ少しづつ与えていただいた。さらにもう一つ、すばらしい葉書型の謄写機一式が与えられた。当時九百円だから、乏しい中で全く思いもよらぬ高価な尊い物が捧げられた。この時の喜びは、本当に忘れられないものとして今も思い出となっている。二人は言うことのできない感謝

に溢れて毎週作つたことである。実兄がきれいな文字で原紙切りをして下さつたので、小生がこれを印刷した。最近まで初の第一号があつたが、迷子子になつたのか、見当たらないのが残念でならない。

一年も経つてからだと思ふ(余り当てにならぬ記憶だが)。

実兄が突然言い出された。

「週報に名前を付けて書いたらどんなものですかね」

言われて成る程それはよいな、

「何と付けますかね？」

二人であれやこれやと、勝手なのや面白いのを並べてみた。ある日、ふと心に浮かんだ名前は……。早速、実兄に話してみた。それが詩篇三篇二節である。「エホバは我をみどりの野に伏させ、いこいのみぎわに伴い給う」。

「『みぎわ』とは、本当にピツタリで相応しい。これに決ましようや」と言うことで名前は生まれた。そして今日も現存しているのである。

土曜日ともなれば、夕食後「みぎわ」の印刷にかかる。一人がガリ版切り、一人が印刷、と交代でやる。かくして「みぎわ」は誕生したが、皆様のためにどんな働きをしたのか、甚だ寂しい。ある時は沢山余つたり、ある時は不足したり、集會中に追加印刷したこともあつた。現在の「報告」の欄が、当時「おしらせ」と書いて、何か二、三あつたと思ふ。

ある時には、用紙不十分と見て応援の差し入れがあり、如何に励まされたことか。井上兄(現在井上ガラス店主)が、総理庁統計局価格調査現在支出記入票という、長々しくいかめしい代物?を持参してくれた。紙は黒いが、裏を返せば立派な週報用紙となった。これを無料提供していただいたので、用紙については補われた。まことに感謝感激であった。この紙で作られた「みぎわ」は今も残っていて、小生には全く懐かしい物となっている。

何しろ素人と言ってもずぶの素人がやる仕事だし、おまけに仕事の合間にやるその働きは、全く内容も出来上がりも甚だまずくて、見られたものではなかった(今でもそれは言えるのだが)。下手な字をカムフラージュするためにカットを入れてはどうかと、柄にもない花や様々なカット集を見つけて、自分ながら何とか美しく楽しく見ていただくようと努めてみた。不本意な出来でも、おかしなものでも、神が祝福して下されば、これこそ生命の水の「みぎわ」となるだろうと信仰を持った。皆さんもそう信じて受け取って下さったと思う。さて、すばらしいことが起った。真っ白な用紙が与えられるときが来たのである。ドス黒い更紙が真っ白い紙になったときの嬉しさ!下手な字でも何だか一段と美しく見えてきた。当時、一枚一円用の紙だから大したものである。これを六等分したら、週報の一枚原価は十六銭強であった。

クリスマスやイースターには、今なら印刷した聖画入りのプログラム用紙が得られるが、その時は十六銭何某では寂しいので、何かきれいなものと探したら、丁度良いものが見つかった。それは病院で使用されるレントゲン写真の印画紙包装に使われた黄色い紙と青色のかなり広い紙が入った。家内の妹が病院に勤めていたので、事情を話して特別に分けてもらった。これも無料で、エホバ・エレで備えられた。これを用紙半切り大にし、二つ折りにして表紙はそれにふさわしい絵を書いてみた。

もうその頃、「みぎわ」もティーン・エイジになっていた。河本兄も東京に転出されていて、小生一人ぼっちになっていた。とにかく十分ではなかったが、一生懸命走ってきたのである。

さて、昭和二九年の夏だったと記憶しているが、市教育委員会主催のガリ版講習会が戸畑で開かれることになったので、これぞとばかりに申し込んだ。しかも何と会費がただの五十円。喜んで、仕事が終わってから飛ぶようにして出席、受講した。何とか少しでも「みぎわ」の字が見られるようになるならばとの願いからである。いろいろな技術的なことに手も頭もついて行けなかったが、とにかく全力で勤めた。速成だから大したことでもないが、「みぎわ」の書体は一変した。十分とは行かぬまでも、どうにか曲がりなりにも今日に至っている。

る。それは甚だ不完全なものだが、神は祝して下さったと信じている。初めの内は、書いては破り、また破り、家内が横から小言を飛ばしたものである。

その後、手製の葉書型の謄写版一式を作るなどしたが、これは今では思い出の品となって押入れに鎮座している。オンボロになってはいるが、まことに懐かしく愛着限りないものである。

ゴチック字体に変えたのが、昭和二九年の秋(?)と覚えているが、その暮のクリスマス、また一つ何かと願っていたら、バプテスト教会のバザーで買ったクリスマスカードの絵を表紙にした。一枚ずつ色を塗るのに、家内が応援してくれた。ある時には、黒い紙の表紙に、黄色のインクでヒイラギを刷って、赤いリボンをつけたこともある。

昭和三七年には、エッチングを利用した小さい物も作ってみた。これも家内が応援してくれた。随分懐かしい思い出となった。主はここまで我を助け給うたのです。

寒い冬の夜、コタツの中で夜の更けるのも知らず、ただ「みぎわ」作りにいそしみ過ぎた。夏の夜は、汗みどろな顔や手にインクの化粧をして、何と楽しかったか分らない。今ではクリスマスも、イースターも、写真版の週報用紙で、これまた有難いことではある。

遂に昭和四二年八月二七日をもって、「みぎわ」の小型ガリ

版刷りは最後となった。何だかチョッピリ別離の寂しさに似た気もした。九月三日三八号から、用紙半切り版と大型に生まれ変わった。内容の字を大きく、見易くするためである。今振り返ってみれば、豆みたいな週報だが、よくも二十年間続いて、皆さんの礼拝に列席したものである。小さいさやかな週報が、あるいは皆さんの聖書の中で、神の細く小さなみ声を語ってくれたかもしれない。報告の欄を見ていると、教会史の一コマ一コマが、次々と今も新しく甦ってくることだけは事実である。

今年三月三日十号から更に内容が変わり、集案案内や祈りの課題等が報告のほかにできて、三段に分けた。今後、また内容は次々と充実するであろう。ともあれ、小さな「みぎわ」よ、もつともつと大きく成長してくれよ。

諸兄弟方、応援してください。引き続き可愛がって、倍旧のご支援とお祈りを切に願ひ筆を置きます。

なお、折角書いた週報を持参することを忘れて、大変ご迷惑をおかけしたこと数度、また折角書いた報告がミスであったり、眠りながら原紙を切って、妙な字や誤字を並べたり、まことに赤面冷や汗のことばかり、末筆ながらご容赦のほど、ひとえに重ねてお願い申し上げます。

限りない主の恵みを深く感謝します。

(ぶどうの木第三号 一九六八年十月発行)

## (2) 日記断片

### 小羊道人

わがたましいよ、主をほめよ。

わがうちなるすべてのものよ、

その聖なるみ名をほめよ。

わがたましいよ、主をほめよ。

そのすべてのめぐみを心にとめよ。

(詩篇一〇三・一〜二)

一月一日 いろいろな出来事が相次いで起った昭和四三年は、神の豊かな恵みとその義しき右のみ手に支えられて、弱い者を助けていただき、新しい年を迎えることができた。霊にも肉にも、今日あるはただ神の恵みによりてなり。かくして、主によって輝く希望に満ちた新春を迎え、何と感謝であろうか。

◎主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは  
尽きることがない。  
(哀歌三・二二)

◎わたしは初めであり、わたしは終りである。わたしの  
ほかに神はない。  
(イザヤ四四・六)

◎来て、神のみわざを見よ。  
(詩篇六六・五)

昭和四四年のためにこの標語が与えられ、元旦礼拝には

イザヤ四四・六の御言で、活ける主がアルパとなり、オメガとなつて全責任を負い、本年を導いてくださることをはつきり宣言されたので、もはや勝利である。

ゆつくり三日間の新年聖会で恵まれて、本当に感謝である。主にあつて前進だ。

今年、福岡の花田勇兄弟が揃つて聖会に初めから終りまで出席され、恵まれた。

〇月〇日 この世のわずらわしい全ての働きや境遇や人や物事一切から離れて、ただ一人神と交わることは、実にこよなき幸いな生涯である。耳に入る雑音から遠ざかり、静まつて主のみ声を聞くために俟ち望むことは、我々信者にとつて最も大切な、貴重な成すべきことである。我々人間は余りにも忙しく働き過ぎて戦いに疲れ果て、肉体も魂も力が抜けてしまつてゐる。そこには、弱り果てた自分の姿を見ることが出来る。多忙なことは我々にとつて良いことではない。主は人々のために働かれた後は、山に野に父なる神に祈つて交わつておられたことを想い出すことである。主との交わりの時こそ、我々にとつて全ての原動力となる。しみじみと味わいたいと思う。

〇月〇日 教会にタイプライターが購入された。説教プリン



トも週報も、タイプに変わった。時代と共に老兵は去る。

ガリ版は姿を消す。やはり新鋭機械には追いつかない。かつてガリ版に取り組んで印刷したときの事が思い浮かんできて、遠い楽しい思い出となつてしまった。

思えば、随分「みぎわ」も移り変わつて来たものである。そこで、「ぶどうの木」第三号に書かれた「みぎわ騒動記」にも、さらに新しい一ページを書き付け加えねばなるまい。別れは寂しいが、もう一つ大きく成長することなら、喜ぶべきだ。本当に感謝、感謝。「みぎわ」は昨年十一月十日号から、説教プリントは黙示録から変貌した。

二月十三日 林正二郎兄弟宅に、男児が与えられた。無事安産でなにより。感謝。

二月二十三日 山口信愛教会牧師林健三郎師の司式にて、榎本俵雄兄と邦子姉の結婚式が行われた。カナの婚宴を祝福なし給うた主の臨在のもと、参列者も教会関係は勿論、会社関係や同窓生多数で、天候も祝され、披露宴もにぎやかで、主の祝福に満たされた二人の姿は、幸福そのものであった。榎本先生ご夫妻もお疲れであったにしろ、お顔にはお喜びがこぼれていた。心から二人の前途いよいよ恵み豊かにと祈る。

四月四日 主の記念すべき十字架、受難の日である。今一度、新しく主の苦しみを思う。

今日から、福岡大濠公園教会で聖会が持たれ、松岡忠次郎先生がご用に当たられる。八幡からも志岐兄、高木兄、正野員子姉、調悠子姉、下松洋子姉、野村夫妻など大勢で出席して恵まれた。ガラテヤ書四章で、神の子の身分について、四回も同じ箇所が語られた。

#### 五月〇日

- 露しげき 道を登りて 今日もまた  
祈れば恵み いよいよこぼるる
- 雑音を 独り逃れて み声聞く  
静けき朝の 美はしく光る
- 静まりて 我の神たる 主を知れと  
のたまう君の み手に包まれ
- 今日あるは 神のあわれみ 賜物ぞ  
げに我になし 我にあらざり

六月五日 毎週続いた黙示録(木曜会)も、今日で終わる。来週からヨハネ福音書である。

六月二二日 西原文江姉が主の導きにより、カナダ・バンク

ーバーに留学されることになり、礼拝後に歓送会が行われた。お茶とお菓子で幸いな時を与えられた。文江姉のために一切の留学費用を主が備え給い、さらに真理について勉学を進め深められることは、本当に感謝である。また神は姉妹のために結婚の相手(李牧師)も備えられ、ともに留学(トロント)され、将来は故国の伝道という使命に立つて行かれるようにまでなし給うたことは、何たる神の愛のみ業であろうか。本当に主を崇めずにはおられない。いよいよ二人の前途に、溢るる恵みと祝福とを心よりお祈りする。二三日、小倉発「つばめで」出発された。お母さんも一緒に……。

六月三十日 今年も半年の旅路、随分と出来事があり、巷には恐ろしいことばかりある中を、靈肉共に弱い者が今日まで念頭のメッセージのとおり憐みと慈しみの主に助けられてきた。「エホバ(主)まで我らを助け給えり」としみじみ実感として覚える。夜遅く、家族と共に感謝を捧げた。

信徒会に出て、また新たにこの貴い福音に与かり、選ばれ召された身分の幸いを痛切に感じた。福音にあらざるものが福音であるかの如く多くの人々の中に伝えられ、受け止められていることは悲しむべきだ。心の目が開かれ、十

字架の福音がはっきりと聖霊によって示され、正しく受け入れられるように祈る。また同時に、この貴い生涯に導かれている前田教会は、大いに感謝を忘れてはなるまい。この後は、「己がためならで、己に代つて死んで甦ったお方のために、世を過すべきである」(第二コリント五・一五)

七月一日 感謝がまた加わることは嬉しい。永らく祈つていた榎本先生ご夫人の足の痛みがすっかり癒されて元気になされたことである。二週間余りの旅行(名古屋の和義兄ご訪問)から帰られ、完全に癒されたことを感謝されていた。「永く忍ぶとも、遂に救われざらんや」の御言を思い、大感謝である。ハレルヤ!

榎本先生は、今年還暦のお歳で、教会創立以来三十三年の間のご用、実際に様々な困難の中に御言だけで勝利をもつて今日を迎えられた。

健康にもすこぶる恵まれて、大濠公園教会の折滝先生ご召天後、同教会の代務者として第三日曜日に礼拝のご用を毎月続けられ、六月からは毎週火曜日の午後一時半と午後六時半の二回の集會を持たれるようになった。なおその集會の間は、朝から信者一般の人々の相談と問題のために一日を祈りとご用に当てられるなど、全く多忙中にある。今日まで祝福の手により用い給うた主が、さらに今後も、

いよいよ栄を現してくださることを信じる。先生ご夫妻の上に豊かに溢るる祝福を…

(ぶどうの木第四号 一九六九年十月発行)



やまぶき

### (3) 随想 二題

小 羊 生

#### 〈その一〉

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしてください」

(マタイ六・一二)

「…わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか」

(マタイ一八・三三)

ある人が家庭と生活問題のために行き詰まり、非常な苦難と戦いの中にあつた。それは、当人にとっては生か死かの大変な問題であつた。彼は日夜、焦りもがき救いを求めていたのである。しかし現実の社会は全く希望も救いもなかった。実情を訴えて助けを求められた私は、気の毒な彼の有様に心を動かされ、キリストの福音による以外に本当の救いの道はないと思ひ、ひたすら十字架の福音と救いとを証し勧めた。彼はまだキリストの福音を知らなかつたからだ。同時に色々と氣を配り力を与えて、何とか立たせてやりたいものと種々尽力して世話もしてやつた。

やがて三日経ち、十日経ち、一ヶ月、二ヶ月と過ぎたけれども、その結果は何の応答もない。骨を折つた結果は無駄であつたのかと落胆した。三ヶ月、半年も経過した今日にも、なお一片の音信もない。あるいはやけを起して変な行動でも？と疑つてみたりしていた。その間、いわゆる人間的な同情や愛の切り売りは、なすべき事ではないとも教えられていた。しかし、あれだけの恩を少しも感じないで、「冷たい仕打ち」と、恨んだり怒つたりした自分の、まことに小さいことを痛切に思い知らされたのである。

愛に報いるに冷たい嘲りをもつて返されたとき、「あれだけ力を尽してやったのに(否、実は神によりさせていただいたもの)…」と思う自分の心に、「ではお前は主から受けた大いな

るご愛に對し、どんな行動であつたのか？お前はどれだけ主から憐れまれてきたのか？」との問い掛けが返つてきた。「何もご愛にお答えしたものは無いではないか？憐れまれ、許されたのに、なぜ他人を裁くのか？」。

ああ、ここに至つて私の心は光に照らされ刺されたのである。神を認め、キリストを信じて救いに与かり、許され、生かされてきた己の眞の姿が示された。

弱い他人を裁くのではなく、「父よ、許し給え」と執り成しの祈りを捧ぐべきであつたことに私は気づいた。もし何か少しでもできたのなら、主の恵みであり、己には何物もないのだ。己が許されたのだから、他を許してやるのは当然である筈だ。また、大いなる裁かるべき神への罪と負債を、主は一言も私に求め給わず、全く十字架のゆえに許され、憐れんでいただいた自分のことを、決して忘れてはならぬと心に定めた。今さら恥ずかしいことである。

見渡す限り広い大洋のような主の愛と、一杯のコップの水にも足りぬ、一滴の水の如き、人の小さく狭き愛であることよ……。

## ＜その二＞

「なぜなら、一つのからだにたくさんの方があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしていないように、わたしたちも

数は多いが、キリストにあつて一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである」 (ローマ二一・四〜五)

「實際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言つても、それで、からだに属さないわけではない。……目は手にむかつて、「おまえはいらない」とは言えず、また頭は足にむかつて、「おまえはいらない」とも言えない。そうではなく、むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえつて必要なものであり、……あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」

### (第一コリント二一・一四〜二七)

先日、ある人からプレゼントの切符をいただいて、ソビエトのモスクワ国立交響管弦楽団の演奏会に行った。

実は、近年ほとんどこのような会に行ったことはなかった。昔、学生時代には時たまあった。テレビやラジオでは少しくらいは見たり聞いたりしてもいたが、実際にこのような世界的レベルの演奏会に行くことは皆無であった。

さて、前の方の席に座り、耳と目を集中してステージを見つめた。百名近い楽団の人たちの生の演奏がすばらしい音楽となつて奏されて来る有様に、グリーンと迫るものに圧倒されるほどであった。

指揮者のタクトに従つて、あるいは強くあるいは弱く、長

く短く、実にきれいに各パートが全く一体となり、すばらしいハーモニーとなつて会場の聴衆を包んだ。チャイコフスキの曲は私には十分に理解はできないが、そのすばらしい音楽は私の心に強く感じられるものがあつた。

私達はあるオーケストラの一つのパートに座つて、一生懸命に自分の受け持つ音符を忠実に守っているメンバーの一人ではないだろうか。皆一人一人受け持つ場所は異なつていても、定められた楽譜に従つて正しく誤りなくきれいなリズムを演奏していくものではないだろうか。私のパートはバイオリンか、チェロか、クラリネットか、トランペットか、またはバスかドラムか。それは一人一人異なるものであつても、互いに心を合わせ思いを一つにして行くところに、すばらしい神の国の天の音楽がハーモニーされてくることだろう。

タクトを振るのは、キリストなる最高の名指揮者ではないか。あるいは楽譜は私達にとつては聖書かもしれない。私もその楽譜に従つて一つのメロディを奏し出す者でありたいと思つた。すばらしい天国の聖交響楽団のパートにいる自分を見出し、各自に与えられた賜物をもつて励んで行きたいと思つた。大いなる力の神は、私のような小さい愚かな者にも力を与えて、何処かのパートで全うさせて下さるであらうと信じて祈つたのである。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、

一つ思いになつて、わたしの喜びを満たしてほしい」

(ピリピ二・一二)

その夜の演奏会は、アンコールの「花のワルツ」(チャイコフスキー作曲)で閉じられた。私もきれいなアンコール曲が主にあつて聴かれるなんて、何と幸いなことであらうと、しみじみ思つた。

それでは、讚美と感謝のワルツを！

主に喜ばれる者となりたい。(一九七二・五・十記)

(ぶどうの木第七号 一九七二年八月発行)

#### (4) 雑 想

小 羊 生

素人に菊造りは無理なことは良く知っていたが、分けてもらつた苗を育ててみようと思つて始めた。自信も経験も全然ないけれど、人から聞いたことを頼りに腐葉土を造り、鉢造りをやつた。菊苗は声を出して語ることはしないが、水が枯れるとその葉は打ち萎れて、私に「渴きを止めてよ」と求めてくる。肥料が切れると栄養失調の淋しい哀れな葉の色をして、私に哀願する。

私は無言の祈りに答えて肥料を与えてやる。するとしばらく

くして元気を回復し、色艶の良い姿でスクスクと伸びてくる。支柱を立てて丈夫に結び付けてやると、真夏も終わる頃には、背丈も大きく幹も丈夫で驚くばかりに成長して私に希望を与える。

「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。だから、植える者も水をそそぐ者も、ともに取るに足りない。大事なものは、成長させて下さる神のみである」  
(第一コリント 三・六〜七)

水は絶対に毎日十分に与えねばならぬ。その管理と世話は欠くべからず。少しずつ朝夕が涼しくなり出した頃に、ふと頭部の葉先に小さなコブが付く。「やあ、蕾がついたぞ!」、苦勞もきつい管理も何のその、いよいよ楽しいものになる。さわやかな秋風が鉢の菊を過ぎて行く時、今この小さな蕾がやがてきれいな花をつけて、淋しい庭先に飾りをつけてくれることと、望みも確実になってくる。

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見えない事実を確認することである。昔の人たちはこの信仰のゆえに賞賛された」  
(ヘブル一・一〜二)

ところが大敵現る。つい油断していた間に、油虫が葉っぱの裏についていた。慌てて、消毒液が足りないことを知った。

一日怠るともう虫は茎にまで、若芽の先まで、果ては蕾のそばまで、遠慮なく胡麻を振ったように付いてしまふのである。消毒薬の散布や、できる所は手で取り除く。なかなか大変なことである。まことに油断大敵であると知った。

「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。この悪魔にむかい、信仰にかたく立つて、抵抗しなさい」  
(第一ペテロ 五・八〜九)

さて、その蕾が太ってくる頃、大事な仕事がもう一つある。茎と葉の脇から芽が出るので、ピンセットで絶えず摘み取ってしまうことである。そうしないと上の花の方に力が行かないからと教わって、丹念に摘み取る。蕾がいくつもつけば、みな咲かせたいと誰しも思う。これも惜しむことなくドンドン摘む。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もつと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいなさるのである」  
(ヨハネ一五・一〜二)

小指の先ぐらいの蕾が親指の先ほどに、だんだんこぶし位

に開いてくる。完成も近い。花台をつけてやると、すっかり見事な花卉の重さを静かに乗せて、なんとも色も香りもすばらしく、眺める者を慰め樂しませてくれる。そして語らず言わず、神の栄光を顕し讚美している。

「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもつて、神の栄光をあらわしなさい」

(第一コリント 六・二〇)

「規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られない。労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである」

(第二テモテ 二・五く六)

真似事ながら一輪の菊を造り上げて、色々教えられることばかりであった。我々も造り主に喜んで頂けるような花を咲かせて頂きたいものと、心から祈り願うのである。

× × × ×

わが家の前に、玄関を上がろうとすると、石垣の間のホンの一隅の余り土もないような所に、狭い花壇からこぼれて生えているのは、スマレである。去年の春から根を下ろしてわざわざ石垣の間に育ったのである。そこで夏は植木鉢に水をやる時き渴いたスマレにもたっぷり飲ませていたが、十二月の終わりに外出から帰ってふと目に付いたのは、紫色のかわいい花をつけて「見てください」とばかりに葉の下から覗いて

いる姿であった。寒い北風に吹き付けられ、アラレのつぶてに打たれながら、戦いものかは、力一杯元氣よく咲いていたのには全く驚いた。およそ春の花であるこのスマレが、生命あるものの強さと言うか余りの力強さに、すばらしいものを感じた。それは弱い自分を励ましてくれているのだ。

少々の戦いや困難に簡単につぶれ倒れるようでは、草花よりも劣るではないか。負けてなるものか！そしてこの小さい花スマレは、色も美しいが、その香りはまた何とも言えないものである。そこらの香水の比ではない。豊かな神の恵みは小さい草花にまで、かくも溢れるばかりである。ああ、これらは如何にして育つかを思え、汝らはこれらよりも優れるものならずやと、主の垂訓を深く思わせられた。いと小さい者ながら、我らもこの小さい草花のように、美しい色と香りを放ち行く者でありたいと心から願うものである。

余りにきれいですばらしかったので、先日、アメリカにおられるHさんに送るカードの中にそっと封じ込めて、日本の香りを送ることにした。栄光、神にあれ！

(ぶどうの木第八号 一九七三年四月発行)



(5) 続・雑想 (花意竹情)

小羊生

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである」

(第二コリント一・三―五)

夜という時は私共にとって暗く寂しい時ですが、しかし人生の旅路において暗黒な夜、すなわち困難や行き詰まり、苦しみの中を通る時は、豊かな神の恵みの注がれる最も幸いな時だと思えます。思わない出来事や問題で必死に戦っている時、病の床に倒れている時、人に捨てられ孤独になった時、欠乏の中であえいでいる時、それは最も良い恵まれるチャンスであると思えます。

草花を育てる時に知ったのですが(それは当然のことですが)、杖にと思って立ててやった竹に茎を結び付けていたら、

一晚して翌朝見たとき、「ホッ」と声を上げるほどでした。それは、昨日の竹に結びつけた紐を目印に測ってみたらグンと花の茎が伸びて、生き生きと緑の葉を美しく輝かせているではありませんか。昼間気がつかない成長の伸びが、夜には一段と激しいことが分りました。草木の成長に大切な時は、暗く寂しい静かな夜でありました。

私共の苦難の夜こそ、真剣に心を注ぎ出して主に祈り求め、そこから豊かな慰めと祝福の露が注がれて、魂は生き生きと成長してまいります。主はそこから大いなるキリストの力を味わい知らせて下さることを知りました。丘の上に咲く小さな名も知れぬ花が、炎天続きで全く萎れて弱っている時、夜の間の露でたっぷり濡れて(朝早く分け入った私の足を濡らすほど)、きれいに生き返っていました。

弱り果て戦いに傷つき枯れるような時の私共にも、夜の間の露の恵みほど大きな生きる力はないことを知らされます。恵みの露は夜のものであります。

「日は花婿がその祝いのへやから出てくるように、また勇士が競い走るように、その道を喜び走る。それは天のはてからのぼって、天のはてにまで、めぐって行く。その暖まりをこうむらないものはない」

(詩篇一九・五―六)

太陽の当る場所は、植物にも動物にも欠くべからざる生命



の条件であります。日陰にある草木はヒヨロヒヨロとして元気がありません。私の小さな庭でも、それが現実にはつきりと分ります。日の当る所の枝は生き生きとして青々と良く伸びて太っています。

主の恵みの暖まりを豊かに受けた信者も生き生きとしてその葉も萎まずに、その為すところみな栄えることでしょう。万物はこの恵みの日の暖まりを受けないでは育ちません。だから私も、日陰の植木鉢は日当りの良い場所に移動してやることにしています。神はこのようなすばらしい恵みの暖まりを、一方的に万物の上に、全人類に注いでいて下さいます。善き者にも悪しき者にも分け隔てなく十分に与えてくださることは、何と感謝分かりません。私共は感謝してただ上を仰ぎ望めばよいではありませんか。

花意竹情という言葉がありますけれども、花や草木の心は無言のうちに語りかけます。

サツキの花を育てて思うことは、沢山の春の花が終わった晩春に静かに咲くことです。緑の葉の繁った中に謙虚に咲くのは本当に慰めを与えてくれます。桜や椿や梅のように赤く高く燃えては咲きませんが、可愛らしく低く咲きながら葉の繁った中から顔をのぞかせて私共を慰めてくれます。私共も謙虚に咲き、人に喜ばれようと喜ばれまいと変らずに主を崇

めながら晩春に遅れて咲いてもよい。この地上の何処かで、チョットでも慰めと喜びを与えていくものになれたらと願います。

竹は清楚で緑が美しいので、花は咲きませんが私共の目に安らぎを与えます。山でも庭園でも、竹の一群を見れば疲れが癒されるようです。実に素直に伸びて立ち、節があつて成長の段階を見せて強い姿勢は快いものです。その枝は次々と伸び、風の吹くままになびきながら従順であります。しかし、やさしいようで決して強風にも折れることはありません。

こうしてみますと、万物はみな神の前に謙遜で従順と忍耐を持つて神の栄光を現しております。そして、私共にいろいろと語りかけています。

「あなたがたは代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもつて、神の栄光をあらわさない」

(第一コリント六・二〇)

小さい私も、信仰薄き者ですが何とかして日ごとに新しく成長の節があり、高く上へと伸び行く者であり、霊の風の吹くままに右にも左にも従い、この花の意、竹の情をもつて主に寄り頼んでまいりたいと願いつつ祈っています。

(ぶどうの木第九号一九七四年四月発行)

(6) われらの会堂(旧会堂の思い出)

小 羊 生

「今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だが、これをとどめることができよう」  
(イザヤ四三・一二)

二十数年の間、我らの会堂として礼拝や各集会のたびに糧をいただき、常に主に近づいて恵みを受けてきた会堂が、八月十五日の礼拝を最後に十六日からいよいよ解体されることになった。その作業の中に加えていただいたが、実感として自分の家を解くような寂しい気持ちがしてならなかった。しかし、神様がすでに牧師館を完成し給うて、次に会堂をも新しくして我らのために与えて下さるといふことであるから、古きは去りて新しくなされることゆえ、大いなる希望と感謝であることに違はないのである。

神様は、丸山さんの心を感動させて、遠い大阪の地から九州八幡まで遣わし給うたのは、旧約聖書エズラ記一・一〜四に、エルサレムを復興しイスラエルを恵むために主がペルシヤ王クロスの心に感動を与えて人々を遣わし、また預言者や祭司エズラ、ネヘミヤなどを用いて再興されたように、まさに聖書的であり神様らしいみ業で始められたことである。こ

れは主が行い給うたことであり、誰も止めることも妨げることもできぬ、貴い大いなる主の行であった。

消そうとしても消されぬ色々な懐かしい思い出は限りないが、いつまでも古い過去にはかり目を向けていてはならない。過去の恵みについて主に感謝することは大切だが、惜しむ心で後を振り向くなら、塩の柱になったロトの妻と同じであるから、深く前に向かって進むことこそ主に従う道であり、主もまたそれを喜んで下さることだと教えられてきたのである。

さて、会堂が解体されたら出来上がるまではいったい何処で集会が開かれるのかと心配していると、神様が「主の山に備えあり」で、教会に最も近い所にある理容会館の二階を備えて下さったのは感謝であった。借家の会堂の不便さはあったが、十分に礼拝に与かり、恵みをいただいた。毎月の各例会をはじめ、伝道会、祈祷会、木曜会、祷告会は新しい牧師館の応接室が開放されて、次々と普段と変わらずに恵まれて来た。

付け加えると、今年の新年聖会も例年と変わらず、理容会館の二階で三日間の集会が持たれ、恵まれることができた。

九月三十日に新会堂の定礎式が行われ、建設作業は日に日に進められてきたが、実に主のみ業が着々と進められ、経費の面も、資材の事も、人材の事でも、あらゆることにおいて主が行い主が建てて下さって、何一つ欠けるものがないようにして下さった。

信者の皆さんが、若いも若きも男子も女子も、心から作業の一端に加えられたことである。何一つ主の業でないものはなかった。もちろん、榎本先生が常に主に従い篤い祈りをもつて日夜願つてこられたことで、偉大なる主のみ手の業と力が働いて下さったから、誰も何物も妨げることができなかったのである。

最も強く感じたことは、理容会館を借りる契約が、不思議に何の妨げも無く毎月更新されて借りることができ、次々と毎週の礼拝が守られたが、三月になって先方から「お気の毒ですが今月いっぱい来月からお貸しできなくなりましたので、他を探してください」と言われてきた。その時を神は前もつてご存知であつたから、大工さんその他の業を祝して、会堂は急ピッチで完成されていた。(そのことは、先方は知る由もなかったことであろう)。丁度、その矢先の申し出なのであつた。そのタイミングがまことにドンピシャリであつたこと、実に申し分のない完璧さで工事が行われてきたのである。ここまで言えば簡単なようであるが、この間の丸山さんのご苦労とご尽力とは言うを待たない。主を崇めざるを得ないことである。

主は、ほむべきかな。

「今より後も、わたしは主である。…わたしがおこなえば、誰がこれをとどめることができよう」。

実にすばらしい会堂が与えられ、三月二日に感謝会が行われた。この席に招かれた地区の教会の牧師さんも、またその他の来賓の方も、余りの出来上がりの美しさと完璧さに見張り、口を揃えて感激賞賛され、祝辞を述べられた。

丸山さんをはじめ、皆さんが主に対する溢れるばかりの感激をもつて心から造られ実を結んだ我らの新会堂には、隅々まで秘められた偉大なる神のみ手の業とセンスとが満ちていた。

新しいきれいな心地よいベンチが大濠公園教会から贈られたが、ゆつたりと腰をかけて集会に出させていただくとき、二十有余年の永きに亘つて親しんだ、古き「我らの会堂」も今は懐かしく思い出されて、心温まるのを覚える。

このようにして、具体的に霊肉ともに満たされて余りある今日この頃である。まことに我らの生涯に忘れられない貴い神様のご恩寵である。

「教会はキリストのからだであつて、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない」  
(エペソ一・二三)

「我らの会堂」は、常に活けるキリスト神の子なるお方の臨在し給うところで、新しくても古くてもいつまでも永久に変わることがない。我らは、大いなる神の贈り物である「我らの会堂」を与えていただいたことを、心から満腔の感謝を捧げ、お

従いして進む決意である。 (一九七五年五月十日記)

(ぶどうの木第十号 (旧会堂特集号))

## (7) 暖かい日・寒い夜

野村 末義

「神のなされることは皆その時になつて美しい」

(伝道の書三・一一)

わが家の狭い庭の真ん中に、一本の木が青々とよく繁っている。余り伸びすぎて日当たりが悪くなるからと、度々枝先を落したりして、ある程度は庭の形もきれいに思っていた。ところが、それがざくろの木だと知つて驚いた。

枝を切り落とそうと思い、ふと一つの枝の中間に親指位の丸い玉のようなものを見つけた。

「これは?」、と思つて高い枝に目を向けて見ると、赤い花が一輪きれいに咲いていた。それは花ざくろで、八重咲きの花卉のふちはチョット白く、波打つた形であつた。長い間少しも咲かなかつたのに、二、三年前から六月頃になると咲くようになった。今年はまだ、今まで以上にたくさん咲いて、きれいで賑やかであつた。

「七重八重 花は咲けども山吹の 実の一つだに なきぞ

悲しき」、との有名な歌があるけれど、実がならぬ花だけの木はどちらも同じことである。せつかく花が咲けば実もあるものだと誰も考える。私も、ざくろは実がなるものとはかり考えていた。その実はなかなか良いものだ。

実がならぬイチジクは、イエス様から呪われて枯れてしまつた。ふと、そんなことを考えていたら、自分の姿がそれではないかと思つて情けなく感じられた。

しかし、もう一度よく考えてみたら、実の成る木は実が成ること、花が咲く木は花だけで、神のみ手により造られたのであれば、実の成る木も花の咲く木も、神様から与えられた命でそれぞれ使命を果たしたのではないかと悟つた。

花ざくろの木に実はないが、もう十分に神の栄光を表して使命を全うしたと言える。

今は全部散つてしまつて、何事もなかつたかのように黙つて緑の葉を繁らせている。花ざくろの花はわずかの間だけ、塀の外を通る人々が、「きれいな花が咲いている……」と、上を仰いで褒めてくれたら本当に感謝である。

自分も、尊い主から受けている使命に一杯咲くことができれば、実のない木でもいつかは神様の栄光を讃美し、感謝していただくときが来るであらうと思つた。

十二月頃のある寒い夜のこと、強い風が吹き荒れたので、

狭い棚の上に置いていた皐月の鉢が、揺られて落ちてしまった。朝になって見つけたが時すでに遅く、鉢も割れて土が流出し、根は丸出しであった。幸いに枝は折れずに助かったが、寒い冷たい冬のこととて、植え替えてやりたいが、とても今頃扱う気にはなれなかった。家内も何とか考えていたに違いないけど、何しろ寒い夜はコタツの中で仕事をするくらいで、連日の寒さでは勇氣も出ない。

「何とか植え替えてやってよー」と、私が口を出したが、なかなか実行にはならない。家内は心の中で、「もうどうでもよいわ。枯れるなら枯れてもよい」、と思っていたそうである。そのまま半月ほど過ぎた。その間、何度か家内に話してみしたが、哀れにも皐月はこの寒空に裸になった根をさらけ出したままで、今にも泣き出しそうであった。これを見た私は放置するに忍びず、「よし、下手でも何とか植え替えてやろうかな」と思い、新しい土を買ってきた。「明日は何とかしてやるぞ」と思って、その夜は休んだ。

翌朝目覚めた時に、立派に植え替えられた皐月の鉢が、廊下でキラキラと新しい土に輝いて、嬉しそうに置かれていた。家内が、寒さも忘れてきれいにしてくれたのであった。

「ヤレヤレ、如峯山(皐月)の名前も、おかげで救われたね」と私が言うと、家内は「いろいろと手をかけたものを枯らしてしまつて……。やつぱり捨てるわけには行かないからね」と言

う。何だか、ルカによる福音書一三章の農夫と主人との会話のような気がしてならない。

この命拾いして救われた皐月は、私ではないか？度々放り出されるようなことしかできない私を、父なる神の前にとりなしてくださる主イエス様のゆえに、滅ぼされる者が滅ぼされないで、今日まで活かされて来たのである。もう一度、新しく主に感謝を捧げることができたことである。

ちなみに、その如峯山(皐月)は、五月末になって、ほかの鉢よりは少々遅れたけれど、可愛いピンクの小花を沢山つけて楽しませてくれた。やはり忍耐をもつて手を入れて得たものは、ほかのものに倍して嬉しいものである。

愛の主は如何であろうか。小さく弱い私のような者、十字架にて注ぎ給える愛のゆえに今日も目を留めて、花咲く時を期待して、執り成して下さるのであろう。

「我らも愛せん、愛なる神を」 (讚美歌八七番)

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さつて、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。……わたしたちも互に愛し合うべきである」

(第一ヨハネ四・一〇〜一一)

(ぶどうの木第十五号 一九八五年九月発行)

(8) 婦人会研修旅行に連れられて詠める

野村末義

五月三十日と三十一日の一泊旅行に、オプザーバーとして参加。皆さんの荷物になるような僕でしたが、主の憐みと皆さんの祈りに支えられて、溢れる恵みをいただき感謝でした。

- 旅立ちを 祝うが如し 新緑の山
- 天の父の 手になる山河 わが庭よ
- 日々是好 親しき友がら 睦まじく
- 音もなし 人声もなし 湖畔宿
- 緑雨好し 曇も樂し 晴れてまた好し
- しじみ採る 舟人早き 宍道湖の朝
- 大観の 富士は良けれど 神の山美はし
- 松や松 黒松ばやし 松江城
- 音に聞く 聖徒の昔 松江の町
- 和紙造り 日本一の 伝統あり  
(安部栄四郎記念館)
- 雑音と 都塵を離れ 主の前に立つ  
(夕と翌朝二回の集会)
- この旅に 深く学びし 主の御愛

― 我は今 汗だくだくの 駄句作り ―

(ぶどうの木第十六号一九八七年三月発行)



1986年(昭和61年)5月 婦人会研修旅行(足立美術館)

(9) 奇跡の神の恵み

野村 末義

「われらの尚ほろびざるは、エホバの仁愛により、その憫みの尽ざるによる。これは朝ごとに新なり、なんぢの誠実はおおいなるかな」 (哀歌三・二二〜二三〔文語訳〕)

昭和七年一月、福岡浜の町伝道館の新年聖会が終わった直後に初めて教会に導かれてから今日までの生涯を顧みて、実に五十六年間、よくもこんな小さい弱い者が、戦中戦後を通り、厳しい社会状況の中を倒れることもなく生きて来られたものだと思つています。

学生時代の十九歳の冬でしたが、風邪をこじらせて学業半ばで病床につき、段々と長びき、結果は胸を悪くして療養生活を強いられ、遂に一年後には胸部大手術を九州大病院の後藤外科で受けました。九州では二人目というテスト的な大手術でしたが、幸いにして手術は成功して生命を与えられて助かりました。しかし、その後の生涯は不安と恐れでした。一日として安心しておれないで、人からも捨てられてしまい、行先に希望がなく、ただ仕方もなく暗黒の生涯でした。

その行き詰まっていた折、一婦人を通して浜の町の伝道館に導かれ、キリストにお目にかかり救いに与らせていただいた

きました。時に満二十一歳の春でした。それから半世紀以上も生かされてきました。

神様の憐みと慈愛と主イエス様の十字架のゆえに、こんな罪人のかしらを、また病みほうけた者をお忘れにならず、捨てることもなさらずに、魂の救いだけでなく、弱い肉体をも強め新しく造り変えて(一時は重労働についたこともありましたが)、ここまで主のみ手に支えられてきました。

「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか。人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」

(詩篇八・四)

実に神のご慈愛により心に留められ顧みていただいたのであることを感謝せずにはおられません。ダビデの如くに主を讚美するのみでございます。

現在は、満七十七歳と四ヶ月と相成りまして、皆様から喜寿のお祝いをしていただき、こんな主の祝福に与かるとは、本当にこの上ない幸福者であります。そして孫も十人となり、総勢二十名を数える大家族となりました。

創世記三二章にあるヤコブのように、彼が故郷を出て兄エサウの顔を恐れて伯父ラバンの所に逃れて後、二十年間働いて主の祝福を受け、故国に帰る時に神様に祈つて、

「父アブラハムの神、父イサクの神よ、かつてわたしに『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵

もう』と言われた主よ、あなたがしもべに施されたすべての恵みとまことをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、つえのほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました……、と言っておりますが、今日のこの小さい私もヤコブと同じ感じを強く覚えています。

終戦後の昭和二年に、空襲で持物全てを失って全く無一物となり、着のみのまま、不思議な神の導きにより北九州に来ましたが、奇しくも榎本先生の牧会される八幡前田教会に帰らせていただいたことは、私にとって大きな恵みでありました。

一度主によって救われた者がイスラエルの民のように主に背いて離れようとしても、高い代価を払われた主の愛は、終わりまで変えることはありませんでした。失われた羊を尋ね出し、みもとに招き入れて下さって、今日までになりました。

実に虫に等しい者が、かかる恵みをいただいて霊も肉も共にここまで来させて下さったことは、主の奇跡のみ業というほかはありません。

パウロがコリントの教会への手紙の中で、

「主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう……わたしが弱い時にこそ、わたしは強い

からである』と言っておりますが、今しみじみと味わっている御言です。

これからも、いよいよこの大いなる神の愛と恵みに感謝して、もう一度、残された日々を感恩讚美で、主のみもとに帰るまで主のみ手にすがって進んで行くことを念願しております。

○ 罪多き この身をさえも 捨てまさず

主の血に許さる しあわせな者

○ 生かされて 思いもよらぬ 半世紀

強きみ腕に いだかれて

○ 十字架の 貴き恵み たたえつつ

従い行かん 今日のひとつあし

○ ああ十字架 ほめたたえよ 主の恵み

歌えど尽きせぬ 神の愛

(小羊山人)

—昭和六三年五月記—  
(ぶどうの木第十七号 一九八八年十二月発行)



四 病床日誌（入院から召天まで）

野村末義 病床日誌（入院から召天まで）

野村美恵子

「主に感謝し、そのみ名を呼び、そのみわざを  
もろもろの民のなかに知らせよ。

主にむかつて歌え、主をほめうたえ、  
そのすべてのくすしきみわざを語れ。」

（詩篇一〇五・一〜二）

十字架の上に流された御血潮のゆえに、罪が許されたばかりでなく、全く清い者とし神の子として受け入れて下さっている。この神のご愛を主人の死を通していよいよ深く教え示されました。私にはとても筆舌に表すことが出来ないのです。

主人が召されて一年目の記念日が近づきましたが、私にとってはまだ昨日今日という感じですが。現実にもう一年間も一人暮らしをしてきたのかと、そして主人は居ないのだという感じがしないのです。とても不思議に思えます。

神の民として受け入れて下さっている主が、全責任を持って私達の生活全てに真実の限りを尽くして、守り導いておられることを味わい知らせて下さる毎日でした。

今この最高の恵みと幸いを与えて下さる主に感謝し、この一年間、主人の病床から召天まで私達の上になして下さった

主のご計画を思い起こしつつ、ありのままに記させていただきます。

《入院への導き》

一九九一年六月二日の礼拝が終った。人前では笑顔をみせているが、最近はず礼拝が終ったら早く帰りたいようです。人々とお交わりするのも大変な様子でした。そしてこの礼拝が主人にとって最後の礼拝となりました。

何時も主人の隣に座って、弱って行く主人を氣遣って下さっていた堤先生が私に「すぐ入院させなさい」と言われた。

私も大分前から祈りながらどの病院がよいか等、導きを待っておりました。四日の火曜日に、主人は自分で堤先生に電話でお願いしました。

「萩原中央病院に病室が取ってあるから、三時くらい迄に行って下さい」と言われた。神様は何時も躊躇している私達によい時を備えて下さいます。感謝して早速踏み出しました。先ず榎本先生にお祈りしていただき、私達も二人でこれからの為に祈って、迎えに来てくれた仰一の車で病院に行きました。

病室は三階の見晴らしの良い涼しい部屋でした。窓際に森田さんという大工のお仕事の方がおられました。この方がとても主人に良くして下さい、初めての入院生活の助けとな

って下さいました。

### 《病院での日々》

◇六月四日（火） この日はまずレントゲンを撮ったり、血液検査があつたり、主人も疲れたと思うが、割合元気だつた。

面会時間が七時半までなので、これからの生活を主のみ手に委ね、祈って別れた。今晚からは私一人で暮らすことになり、けれど心は平安だつた。

◇六月五日（水） 午前中に病院に着いた。酸素吸入で少しは楽になつたようにも見えるが、昼食は沢山残している。主治医の冬野先生に呼ばれた。

「奥さんですね」

「はい」

「ご主人の状態は非常に厳しい状態です。まず血液検査の結果は、酸素と炭酸ガスの量が逆転している。普通なら意識は無いですよ。レントゲンもこんな状態ですからね」

働いていない左肺は真っ白、良かった右肺も残っている所は半分以下位しかないので、率直に言えば絶望ですとおっしゃりたかつたのかも知れませんが、こう言われました、

「お宅の息子さんが産業医大にお勤めですから、病院を替わろうと思われるなら、今替わられても良いですよ。大学

なら設備も整っているし、専門医もいるから……」

私は迷ふことなく主に感謝しながら答えました。

「先生、神様が主人をここに導いてくださったのですから、今さら病院を替わることなど全く思いません。また今後どうあつても、替わっていたら良かったなどそのようなことも考えませんから、今から先生が思われる通りの治療を行ってください。よろしくお願いします」

先生も少し安心なさつた感じで、

「そうですか、分かりました……。それにしても、このお年でこんな状態でよくここまで来られましたね。私だったら、もう意識不明になっていますよ」と。

ご愛と憐みに満ち満ちておられる主が、主人をこよなく愛して下さっている事実です。主人が何時も言っていたように、よくもここまで神様は生かして下さいました。どんな厳しい状態の中からでも、真実を求めてくる者に、家庭での生活もぎりぎりまで守つて過ごさせていただき、礼拝も守らせて下さつた。素晴らしい主のお取り扱ひを思い返しては、ただ感謝するばかりです。

「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ四六・四)

何時までこの病院生活が続くものか分からないけれど、こ

の先生を用いて主が一切をなして下さる。先生、患者、家族が主にあつて信頼関係を持たせていただき、まず感謝と喜びと平安を与えて、ここから厳しいであろう一足を整えて下さいました。榎本先生も、早速見舞つてくださり、お祈りしてくださいました。

◇六月九日(日) 礼拝後、美紀子の車で病院へ急いだ。今日は大変だった。暫らくお話ししているうちに、何となく様がおかしくなった。目は力なく、手足の先が冷たく、心なしか紫色になつていようだった。先生は、「金曜日頃、東京に出張するから留守にしますが、他の先生に頼んであるから」と言われていた。とにかく急いでナースコール。看護婦さんが来て朦朧としている主人のほつぺを叩く。

「野村さん、野村さん」と呼ぶと、やっと「ハイ」と言った。

「ここが何処か分かりますか」

「萩原中央病院」と、ろれつが廻らないけれど答えがあつた。

「先生の名前は？」

「冬野先生」

私はほつとした。こんな主人を私は初めて見たからもう駄目かと思つた。婦長さんが来られ、酸素を上げて、血液検査

のため採血をした。私達には寄り頼むお方がある。主が私の心を治めて下さる。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい」

(ヨハネ一四・一)

皆が部屋を出た後、そつと「お父さん、私に分かるね」と問うと、「分かるさ、私の愛する人じゃないね」と、まだ少し廻りかねる口調で言つた。全くすましたものである。入院して数日間色々な事が起り事情が変わる。こんな事が家庭に居て起つたらどんなだつたらうか。いつでも善にして善を行われる神様のみ業を褒め称えるばかりです。門限までに状態がすっかり戻り、帰つてよいと言うので、二人で祈つて私は帰りました。

◇六月十日(月) 出張からお帰りになつた冬野先生が来られて早速呼ばれた。

「昨日の検査結果は、入院の時より悪かったですよ。今が最悪だ。酸素を調節しながら、抗生物質を変えてみましょう。酸素も増やせば良いというものではない。増えすぎると炭酸ガスが沈んでしまうので悪い結果になる」、と言われた。

私達には難しい事は分からないけれど、全能者なる主が共

に居てくださるからそれでよいのだ。主人はもう帰って良いよと言うので、お祈りして帰らせていただいた。夕食もそこそこに、ただひたすら祈り続けておりました。祈る以外に何が出来るとでしょうか。その時、六月六日木曜会のメッセージを思い起こさせていただきました。

「あなたの願いは何か。国の半ばでもあなたに与えよう」

(エステル五・三)

イエス様、何も要りません。ただ主人をお助け下さい、癒してください、今晚安らかに睡眠をお与え下さい…そのとき主は御言を下さいました。

「人にはできないが、神にはできる。」

神はなんでもできるからである」

(マルコ一〇・二七)

主よ、誠に有難うございます。信じます。私は安心して眠りにつかせていただきました。

◇六月十一日(火) 今日早く病院へ行った。昨日の様子

とは変わって随分調子が良さそう。朝食がおいしかったそう。主が祈りに答えてくださる素晴らしさ、切なる祈りに真実をもって報いてくださる主のみ顔を拝するようです。

「お父さん、よかったね。昨晩はもう必死の思いで祈ったから…。でもこんなに元気になっているとは思ってなかつ

た。感謝しよう」

「皆が祈って下さっていることがとてもよく分かる。そして今あなたがそつと手で触れたように、イエス様が僕の肩の所をそつと触れて清めて下さるんだよ」

朝は看護婦さん達が忙しく出入りも多い。二人で感謝する。榎本先生ご夫妻がお見舞い下さって、お祈りして下さいました。夕方、主治医の先生が来られた。

「野村さん、今日は爽やかな顔をしていますね。今日は今まで一番良い結果が出ましたよ。酸素がうまくいっているようです」。先生も安心されたようでした。

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る」

(イザヤ四三・一九)

主のお約束のすごいことを目で見、手で触って、いよいよ讚美するばかりです。以後、日ごとに食欲が増し、美味しく食べられるまでになしていただきました。

少し病氣のことに触れます。

『慢性呼吸不全』。平成元年を迎え、その夏から急に体力が衰えてきました。咳がひどいため血管が破れ度々血痰が出るので、やはりこうした見るところに驚かされたり心が沈んだり弱ったり、そのうえ肝臓も大分弱っていたそうです。でも私達には、寄り頼むべき主がどんな中からでも助けて下さる。秋になると少しづつ回復し、再び海老津集会にも、礼拝

司会のご用にも立たせて下さいました。

しかし、体力は急降下して行くのが私には分かります。Jはなるべく避け、バスを利用したり車にしたり、とにかくご臨在に近づきたい願いを主は支えて下さいました。

平成二年の夏も同じ状態が起り、段階的に弱まってまいりましたが、もう寝たきりになっても当然の中をその年も守られ、遂に十二月二日に肋骨を骨折、主人にとってこれは大変な苦しみだったと思います。何しろ、繋がろうとする骨を揺さぶり離すような咳、痰が出てしまうまで続く咳に、私の方が涙が出そうになるようでした。でもそんな状態からも主は祈りに答えて癒しを与えて下さいました。年だからと言って長くはかかりませんでした。

そして、平成三年も数回講壇に立たせていただいた主人を思うとき、私は目を見張り驚きをもつて心に讚美と感謝が溢れます。主が立たせて下さらなければ、どうして立っていることが出来るでしょうか。この二年ほどは、もう何時倒れるだろうかと思われるような日常でしたから、あの司会のとときの讚美はどうして呼吸が続くのだろうか？不可能を可能として下さる神様のみ力そのものだったと知らされます。

何の力も無い、かえって神様のお邪魔になるような者と自分でも言っていたように、取り立ててお褒めに与かるようなものは何一つ無い者でした。しかし、生ける主の証人として

主がお用い下さった、また全うして下さったことを深く感謝致します。

「このイエスを、神はよみがえらせた。

そして、わたしたちは皆その証人なのである」

(使徒行伝二・三二)



ムラサキツエク

#### ◇六月十五日(土)

—入院中の手記より—

昨日、看護婦さんに洗髪をしてもらい、たらいで足も洗って、とても気持ちよくなった。感謝した。そして主が弟子達の足を洗われたことを思い出し、今は全身主の清めに与かり、主の宮に住まわせ、主の家族の一員としてこんな者を受け入れて下さいました。毎日、尊い高い身分とされ、天国市民です。十字架を崇め感謝讚美です。八十歳の今日、信じて救われ六十年の生涯の重みをしみじみ味わう毎日です。

◇八月五日（月）

―入院中の手記より―

「あなたの荷を主にゆだねよ。主はあなたをささえられる。主は正しい人の動かされるのを決してゆるされない」

（詩篇五五・二二）

この御言を今度の病氣と入院に際して与えて下さった。今後の病状が特別な状態にあるだけに、回復に向かっても仮にそうでなくても、とにかく全部を、身も魂も心も思いも行動も全て主に委ねよと主が仰るのだから、御言には従います。教会でも榎本先生をはじめ、信徒の方々、子供から、特に家内には大変な重荷をかけるが、何事もお任せしたからには御言の通りに歩くのだと、自分に言い聞かせておるのである。

主治医の冬野先生が言われたのは「ようこんな状態で生きておられたね。僕だったらとうに死んでいるよ」とのこと。

そんな者が今日まで生かされたことが神の栄光であり、能力である。三浦綾子さんがガンと戦いながら執筆されているとか、神様はえこひいきされてることだが、僕もその類であろう。手が震えて十分に書けない。

六月の手記より随分読める。

主人が言った、「僕は全部主にお委ねした。『あなたの荷を委ねよ』と言われるから、今からどんなことが起ろうと、

また僕に不様なことがあろうと、栄光を現して下さるのは主だからね。今から僕の上にされるのが全て主の栄光だからそれで良い。」

これから主人を天の召しに入れて下さるまで、全く主に委ねることについて、主人が死をもって強烈に私に教えてくれました。一年を迎えた今日まで、主が主人を通して私に下さったこのプレゼントに日々支えられ、喜びに変えられた毎日をも感謝したらよいでしょうか。

一晩をもつて手の平を返すように快方に向けて下さった主の癒しは、ずっと進んで、ご飯も普通食にしていただけ、お膳のものも殆ど残らないほど食欲を与えて下さいました。もう家からなるべく何も持って行かないようにしました。栄養もカロリーも考えて作って下さるので、なるべく病院食をいただくようにしよう。主人も承知して頑張りました。

七月、いや八月初旬まで良い状態が続いて、廊下を歩く足取りも力強く歩けるようになり、この分なら九月頃には帰れるかも知れないと思えました。お風呂（シャワー）も、私がついてですが入れるようになり、今まで起こしていたベッドも夜寝る時は二十度位迄倒して寝るようにしました。「お父さん、家に帰ったら平らなベッドしかないから、ベッドを下げたよ」寝る練習をしておかねばね」と、自分もそのつもりだったようです。

主はこうして一時的であれ癒しを与えて下さいました。ここ数年見ないような食欲を与えて下さり、毎日美味しく食事が食べられました。でもお盆過ぎから、また少しずつ食べられなくなり、色々な症状が出てまいりました。

◇八月十一日(日) 「目覚めと同時に呼吸が困難な状態になって苦しかった。ひたすら主の助けを求めて、やっと点滴の頃とまった。感謝した。一日中どうも体のきつい一日だった」(主人の入院中の手記より)

お盆の間は外泊の患者さんが多く病院も淋しい。こうして一日と弱って行き、また苦しい戦いの日々が見えてきたけれど、主人は苦しい顔をしなかった。あまり話すことは出来ないけど、見舞って下さる方にも子供達にも笑顔で接していた。夕食の時、「イランの国が来た」と言うので、なにを言っているのかと思うと、「イランの国」と口を閉じてしまう。「何だ、もういらぬの。まだ残っているよ、イランの国は困りものだね」と言って笑ってしまう。痰も次第に出にくくなって来る。それだけ出す力がなくなったのだろうか。でも吸引器を使うことはしませんでした。できるだけ自然な状態でお願ひしていたので、先生もなんとか自力で出すようにと手段を尽くして下さいました。バイブレーターで軽く叩いてへ

ばりついた物はずすことから始め、吸入、点滴と、何と言っても痰を出すのが先決問題ですから、あの手この手と本当に良くして下さいました。

◇八月十八日(日) 主人の食欲は日に日に落ちてゆく。目に見えて衰弱し、トイレに行くにも支えが要る。今晩は私に泊まってくれないかと言うので、看護婦さんに許可を貰い、伝道集会を欠席し、急いで仰一宅で食事を取り、一旦帰宅して泊まる準備、戸締りなどをして病院へ急いだ。色々な症状に伴い、手も震えるし、尿器をこぼしたり、大変な迷惑をかけたたりしたようだ。こんなことを思うと夜の不安は病人にとっては大変なことだと分かる。

今夜はやはり安心した様子で眠っていた。でも私は寂しい思いがした。いよいよ主人と別れの時が近づいたような、時の迫るのを覚える。確実にやってくる惜別の時が、実感として目の前に見える。悲しいものをこらえ、初めから結婚などしなかったら、また一人になったら毎日泣き暮らすかもしれない。どんなに悲しいことだろうかと、一瞬の思いでしたが頭の中がこんな思いでグルグルと回っていました。

「何事も思煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ四・六)



◇八月二日(水) 今日から私は病院に泊まって、全面的に看護に当たらせていただくことになった。母さんが倒れたら大変だからたまには家で休んだらと言う者もあるけれど、倒れるなら一緒に倒れたら良いのだと思いました。こんな時、どうして家で安閑と眠れるでしょうか。側に居れるから、例え一、二時間でも眠れるのだと思いました。

ある夜、主人が呼びました。

「お母さん、来てごらん」

私はベッドの側に寄りました、「何ですか」。

主人はしみじみ心を込めて言いました、

「ここまで二人で一つ信仰を持ってこられて良かったね、

有り難う。僕はあんたに何もかも負ぶさって来たみたいだ

ったね」

「そんなこと言わないで、あなたが私のためにどんなに祈

り続けてくれたか。並々ならぬ祈りがあったから私がここ

まで来ることが出来たんじやないの。同じですよ。私達は

何時も二人で一人前だったと思ってた。だから私達は二人

でいなければならなかったのよ。お祈りしましょう」

信仰については、いつでも主人にぶら下がっているような

私でしたが、一人の人が絶対動かないで立っているから、本

当に幾多の問題の中、困難の中を四十一年間も落ちないで、

ぶら下がらせてもらったと感謝を新たにしつつ、結婚前に初

めて主人がくれた二通の手紙に込められた切なる願いと信仰に對し、このように主がみ旨を成就して下さったことを、このいまわの際に二人で心を合わせ感謝の塚を立てて祈らせていただくことが出来た。これが、主人が「良かったね」と言った最大の喜びであったと思いました。

この時、主は私に別れの備えを与えて下さったようです。

心が主にあつて定まった。何時何が来ても恐れない……。

◇八月二日(木) 朝食後の点滴が終つて私はちよつと帰宅し、暑いのでシャワーで一汗流し、何か好物でも食べさせたかと思ひ、やつと帰り着いた途端、病院の看護婦さんから「きついですぐ来るようにと、本人からの言い付けです」と電話があり、大急ぎで昼食を取り、刺身を買つて行つた。夕食を喜んで食べることが出来た。

◇八月二日(木) 榎本先生が訪問して下さい。度々見舞つて下さる先生に色々お話ししたかと思ひ、きついで自分からあまり話しも出来なかつた。でも一番嬉しい安らぎの時だったようです。ある時など、今お帰りになつたのに、「先生に電話して来てもらつて」と言つた。

今日はイザヤ四一・一〇の御言をいただき、讚美歌五三一番(主人の愛歌)を讚美した。

◇八月三十一日(土) 隣のベッドの方が四人部屋に移られた。

婦長さんが「一人部屋にしましょう」と言われた。もう気兼ねなく看られるので良い環境になりました。讚美も祈りも遠慮なく出来るのが最高でした。この頃は尿の出も少なく足にむくみも出てきたので、管で取るようになりました。ちょっと嫌がっていたけれど、その方が楽に出るからと言われると、もう子供のよう素直に…

◇九月一日(日) 昨晩は珍しく良く眠っていました。近頃は息子の仰一も九時まで居て、何かと世話をしている。今晚も讚美歌四九四番を讚美し、主人と三人で祈って、消灯したので仰一は帰宅した。この事を主人はどんなに喜んでいたりか。たった数時間一緒に過ごし、背中をさすってやったりしているだけのことなのに。

子供は大学入学と同時に親元を離れ、卒業しても最早帰ることはなく結婚してしまう。今はこんな時代かも知れないけれど、たったこれくらいのことを父はどれだけ喜んでいたりしようか。「仰ちゃんは優しくしてくれるね。背中をそつとさすってくれるのがとても上手だ」と。

私は思いました。主が十字架のご愛を下さっているそのご愛に対し、私たちがの一握りも無い小さな親孝行めいた心と思いを主もまた喜んで受け入れて下さるのだと。

◇九月二日(月) 朝、目覚めが悪い。もう目が開けられないかも知れないなあとと思う。食事が来ても、

「もう食べないでも良い。イエス様だけで良いよ。食べても一緒だから…」

「でも主が与えて下さる食事だから、少しでも食べよう。食べないといよいよ目も開けられなくなるよ」

お昼頃、榎本先生が来て下さいました。讚美歌五一五番を讚美し、祈っていただいた。

◇九月五日(木) 主人が私に、たまらなくきついと初めて言った。衰弱しきつた身体で呼吸が出来づらいつた。衰弱しきつた身体で呼吸が出来づらいつた。

「お父さん、あなたが今どんなに大変なのか、私にはよく分かります。でも私は何もしてあげられないものね。ただ祈ることと背中をさすってあげるくらいしかできないものね。お父さん、十字架を見上げましょう。十字架で主が苦しんで下さっている。これ以上の苦しみは無いと言われるから…」

この時、主人は涙を流さんばかりに、

「ああ主よ、そうでした。申し訳ありません。悔い改めます」と、絞り出すような声で祈り、平安を得ました。

夕方、冬野先生が来られ、明日どうしても東京に行かねば

ならないけど、なるべく急いで帰るようにしますと、心配そうに言われた。午後九時、消灯時間が来て仰一もお祈りをして帰った。

主人が急に、「お母さん、僕はもう天国に行くが、あんたはどう思つかね」と。急にどう思つかと言われて私も一瞬ドキッとしたけれど、慌てることは無かった。主人のそばに行つて言いました。

「お父さん、もうお迎えが来られたの？」

「うん、もう来られたよ」。

「それなら私はどうすることも出来ないね。少しでも長く、まだ一ヶ月でも三ヶ月でも一緒に居たいけど……。でもあなたが先に行ったら、私の場所も用意しておいて下さいね」

「場所の用意をして下さるのは主だよ」

「そうでしたね。でも主にお願ひして、あなたのそばに居れるように、私も後から行くのだから」

ちよつぱり悲しかったけれど、なんとも言い難い静かな安らぎを味わい、その晩も平安な眠りが与えられました。後で、主人は何故私にどう思つかと聞いたのだろうか？また主がどんなにしてお迎えに来られたのか聞いてみればよかった、なと思いましたが、聞かないで良かった。主のなさるみ業は一人一人違つているのだから、主は私の口を封じ、また語らせて下さる。主人も安心したと思います。

◇九月六日(金) 朝はパン一切れをやつと食べた。何となくぼんやりしている。もう気力も次第に衰えて行くのが分かる日々です。祷告会の前に榎本先生が来て下さった。お祈りしていただき、四九四番を讚美し、主人も讚美とお祈りが出来たけれど、はつきりしなかった。

午後、美紀子さんが来てくれたので、帰つて少し休んできなさいと言う。風呂を使つたり何か食べさせたいと思うと、休む時間は全く無い。今は常時誰かそばに居るようにしています。

◇九月七日(土) 冬野先生が出張中なので、看護婦さん方がとても注意して下さい。どうしたことか今日は急にお尻が痛くなった。朝から何回も看護婦さんと呼んで身体の位置を変えていただくがその時だけで、痛くてたまらない。売店で円座を買つて当てたけれど効果が無かった。四六時中座つたままで、ベッドから降りることも無いので褥創が出来たのだろう。横になれるなら温めたりマッサージも出来るのだけれど、私は祈りながらベッドに上がつて、三十数キロの体を抱え、少し位置を変えてあげたら、暫らく良かった。夜はずごく痰が出て、疲れきつて何も食べられなかった。こうして、主人にとつても大変な一日でしたが、今晚は静かな眠

りを下さいました。

◇九月八日(日) 小さなパン一個をやつと食べ終わり、九時に点滴が始まり看護婦さんが何回も出入りされるけれど、主人が礼拝しようと言った。讚美歌四九四番を讚美し、聖書は申命記八章を読みなさいと言うので、私が一節から二〇節までを読ませていただき、つたない祈りに心を合わせてくれて、二人での礼拝を持つことが出来ました。主がさせて下さったこの礼拝が、本当に最後になるとは……。 (今、申命記八章を読むたびに心新たに身の引き締まる思いで、これは主人が私と子供達に心から願った遺言であつたと、私も心に銘記しました。)

今日は、昨日のお尻の痛さも主が取り除いて下さつて、本当に安らかです。とろとろ眠っていたり、多く語ることはありませんが、実に清められた顔をしています。

午後、恵三・美紀子、仰一が家族で来たので、恵三さんの車で私は一時帰った。その後、榎本先生と岩隈姉が来て下さつたとのこと。昼間はたいがい私が居ないので失礼ばかりして申し訳なく、残念ですが……

### 《天国に帰る日》

◇九月九日(月) この二、三日は気力も無く、食事も必要としないようだ。朝は看護婦さん達が忙しく出入りが多いので、短くお祈りして一口か二口食べた。私も何となく無理強いはしたくなかつたので言う通りにし、朝の色々な用事を済ませた。

「点滴が済んだら下のレストランで食事をしてくるからね」  
「ああ、行つておいで」と言ってくれたけれど、アイスボックスにヨーグルトがあつたのを思い出し、「ヨーグルトがあるけど、食べてみない？」と聞くと、主人は食べると言つたので、私は嬉しくなつて自分の食事などどうでもと、いそいそと食べさせてあげた。それが気管の方へ行くとは思ひもしないことでした。

「お父さん、お父さん！」と呼びながら枕もとのベルを押した。

看護婦さんが、かねて置いてあつた吸引器(痰を取るためには一度も使わなかつた)を準備、冬野先生を呼んでと連絡をとる。出張中だつた先生も帰つておられ、すぐ来られた。私は、自分がとんだ失敗をした、私が主人を追い込んだと、その時はたまらない思いで、「イエス様この状態から必ず蘇生させて下さい」と、夢中で祈りました。

吸引で大分白いものが出たけれど、先生は家族の方に連絡

して下さいと言われた。心は騒ぎ、やはり慌てふためいている自分に「落ち着いて」と言い聞かせながら、まず榎本先生に電話しようと急いだ。「先生、すぐ来て下さい」。たったそれだけ言ったようです。

小さなポケット電話帳をバッグにいれているはずなのに見当たらないのです。私が電話しなくて良いのだとやっと気付かせていただき、恵子に連絡が取れたので全ての連絡を任せることが出来ました。

榎本先生はすぐ来て下さったので、私が主人を追い込んだと言ったら、そんなことは無いと言って下さった。でも私は、もう一度意識が戻るように祈るしかなかったのです。吸引と人口呼吸を繰り返して、主治医の先生と看護婦さんが力を尽くして下さい。

冬野先生が「声をかけて下さい」と言われた。「お父さん!」、と何度も呼んだけれど返事は無かった。榎本先生も「野村さん!」と何度も呼んで下さった。「讚美歌を歌いましょう」と先生が言われた。主人の愛歌五三二番を讚美するとき、主人もかすかに口を動かし一緒に讚美しているように見えた。確かに一緒に歌っていました。主は私のわがままな祈りを聞いて下さった。私が失敗したのでも追い込んだのでもない。主が全てを導いて最善をなして下さいたことを心の底から感謝します。

お昼頃から子供達が順次着いた。吸引している姿を見て、孫の恵ちゃんの声が上がって泣き出した。午後三時ごろ集中治療室に移された。主人の周りに全員集まり見守る中で、逍遙として死に臨んで、勝利をもって主のみもとに召していただいた。

命の灯が消える時、何という静かさ、その平安な顔、細かい身体で信仰の勝利を皆の前で見せてくれた。また語ってくれた。そのときの私の心は喜びをさえ感じたような気がした。

榎本先生が「天寿を全うされましたね」とおっしゃったとき、本当にこれこそ天寿を全うするということだと教えられ、また、全く荷を委ねた者に対する神様のお取り扱いのなんと素晴らしいことだったかと感謝に溢れました。

自分の上で起ることは全て主の栄光だよと、信じる者を恥ずかしめ給わない主の約束を固く信じ通した彼。

かつて肋骨を折ったとき、「神様は僕に良い奥さんを下さった」と、突然こんなことを言ったことがあります。私ほとても褒められたような処は何一つありませんが、こんな者を受け入れて神様に感謝してくれた彼、そして私もまた、「神様はまことに、私に素晴らしい信仰の人を下さっていた」と深く感謝いたしました。

見えなくなった今こそ、二人の者が一体となったことの幸

を味わっております。

「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、

人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、

人の目から涙を全くぬぐいとって下さる」

(ヨハネ黙示録二一・三〜四)

主の手に守られ、榎本先生ご夫妻、また多くの聖徒方の篤き祈りに支えられてここまで来させていただきましたこと、心から感謝とお礼を申し上げます。



五 前夜式（平成三年九月十日）

野村末義 前夜式（平成三年九月十日）

司式 榎本利三郎 牧師

讚美歌 三二〇番

祈り 榎本牧師（略）

讚美歌 四九四番 四八六番

聖書 コリント人への第一の手紙

一五章五〇節・五八節

「死は勝利にのまれてしまった。

死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。」

わたしたちは、この世に生きている限り必ず死ぬと言うことは、頭では分かっているけれど、わたしはまだ先のことだ、当分は関係ないことだと思っっています。しかしこれは先送りすることは出来ません。健康であつても弱くあつても関係無く必ず来る。だから誰でも恐れています。

けれども愛する野村さんは、昨日わたしがお目にかかった時は非常に穏やかでした。それでも大分呼吸困難の中におられるので大変なのですが、長い入院生活の中で、いつも何の不安も恐れもなく最期まで穏やかにしておられた。現実、酸素吸入をしたり色々な手当てを受けるとき、それだけでも気

が小さくなったり、いつ死ぬだろうかなどと不安や心配が襲ってくるのですが、野村さんは主の恵みにあつていつ何が起こつても大丈夫だと信頼していらつしやつたので、いつもにこやかな顔で私達を迎えて下さつた。

昨日も信徒会が終つてからお訪ねしました。その時は静かにベッドに座つていらつしやつた。皆さんが側に行つたとき、もう体力もないのであまりお話しも出来ませんが、その顔は平安そのもので本当に嬉しそつでした。一緒に野村さんの愛歌五三一番を讚美しました。その後野村さんが心をこめて神様の前にお祈りされました。

「ほんとに私のような罪人が、神様の前に立たされたら何べん滅ぼされても足りないような私ですが、イエス様の尊い十字架の御血によつてあがなわれている、そしてイエス様により神様が目を止めて下さつて、今こうして平安の中におらせていただいています。主よ感謝致します。」

言葉に表現できない真心を注ぎ出すように祈られた感謝の祈り、丁度岩隈さんが車で一緒に来てくれましたのでその帰りに私に「先生、野村先生のあのお祈り、小さな声でされたお祈りは先生の耳に入らなかつたと思います。ほんとにねんごろに神様に感謝して感謝して、いつでも神様が帰れとおつしやつたら帰ります、と言うようなお祈りでした」そう言うことを聞かされました。そしてこれが野村さんと一緒



にお祈りした最後でした。

けれども野村さんは絶えず、人は神様によつて造られた者であり神様によつて生かされている、イエス様の救いによつて平安が与えられ神の子として身分を変えられている、そして神様が帰れとおっしゃっている。あそこに行けばもう神様の家があるんだと、言うことの出来ない平安を持つてこの世を歩いて来られた。

振り返つて見ると私も六十年以上もお付き合いしてきました。ある時は手の届く所で一緒に生活をしました。

野村さんが六月初めに入院なさつた頃、私も主治医の冬野先生に様子を聞かせてもらいました。その時先生は「あの昭和初期の荒っぽい外科手術では大変な手術だつたでしょうね。今のように麻酔も効かない時代にあんな大変な手術をするとは、よほどのことがあつたんでしょね。追い詰められていらつしやつたー」

当時は、結核と言えば絶対死ぬ不治の病であり、そのうえ安静と栄養を取ることしか方法が無い、その療養生活には財産を食い尽くすとさえ言われた時代ですから考えただけでも大変な病気だつたに違いありません。

そんなとき野村さんは、九大病院で試験的にこの手術があることを聞き、やつてみないかと言われて、「どうせこのままでも死ぬ、手術して死んでもともと、万一成功すればも

うけもの、それならば一か八か賭けてみよう」と決心したそうです。当時四、五人の人がこの手術を受け、多分生かされたのは自分一人ではないでしょうか、ということでした。

その野村さんが最初に教会に来られた時は、もう生きる望みも無く死んでもおかしくない、そんな失意の中で、そうつと足音も無く入つて来られ、つい「野村さん、足があるのかね！」と冗談を言うほどでした。しかし、神様がこんな自分に命を与えて生かして下さつたと、イエス様のご愛にふれたとき、今まで信じようとしなかつたことこそが罪であつたと悟りを得、主によつてもう死も恐れることは無くなつた。「死は勝利にのまれてしまつた。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか……主にあつては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである」

(五五・五八節)

かつて、私も五、六年前から何べんも肺炎を繰り返し、もう何時死ぬのか分からないような中におかれましたが、神様が使命を与えておられる間は死なないのだという主の平安を教えられました。死ということは、何か遠くて怖いようですが、私にとつてはつい隣に行くようです。あそこに行けば先に行つておられる河本さん方にお会いできる、と楽しい気持ちも起つて参ります。イエス様によつて罪が許されたこと

が確信でき、主によって天国に望みを持つことができるとき、むしろ喜ばしいことになります。

野村さんの愛歌五三一番「心の緒琴に」の折り返しに

「ああ平和よ くしき平和よ、

み神のたまえる くしき平和よ」、

とありますが、神様が与えてくださる平和、全く恐れを除かれた神の平安に、大手術のあとの身体の弱さを恐れ、壊れそうな身体を庇いながら行動していた野村さんが、すっかり変えられ、集会の前に近所の皆さんに集会を告げるトランペットを吹けるようになったのです。

福岡の教会のすぐ近くの私の叔父であった方が、「野村さんのトランペットを聞いて、教会には行けないけれど、その讃美歌を聞いて本当に喜んでいた」、と私は聞いたことがある。もう野村さんの中にトランペットを吹いて肺が悪くなるのではなど、そんな恐れは何も無くなりました。そのうえ、戦後、河本さんの職場で働くようになってからは、漬物を漬ける四斗樽、あの大きな樽を担いだり、そんなとき野村さんの身体もすっかり変えられ、聖書に「死ぬ者が死なないものを着る」とあるように、あの弱々しかった方が丈夫で、力強く、健康で見る目も生き生きとして、喜びにあふれていらっしやる姿に私も教えられました。

今日こうして野村さんは私の前から姿は消えるかもしれ

ませんが、野村さんがひたすら主に信頼しつくして歩いて来られた道、また「わたしの愛のうちになさい」、とおっしゃる主のご愛の中に常に自らを置いて、言い表すことのできない主の平安をもって歩いて来られた。このことを覚えて、私達も同じ平安をいただいて歩かせていただきたい。

野村さんが私達に対して願っておられるのではないでしょうか。

愛する兄弟が生涯をかけて歩いた信仰の足跡を踏んで行くようにと願っています。



六 野村末義の思い出

(1) 記念会の記録

平成三年（一九九一年）十一月二四日

讚美歌 五二三

食前の感謝（正野 兄）

讚美歌 五一四

お祈り（高木 兄）

聖書 ヤコブ 四・六〜八

（榎本 牧師）

「しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、

『神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを

賜う』とある。」

（ヤコブ四・六）

神様の私どもに対しての恵みの法則、原理、それは私どもがへりくだりさえすれば、神様はどんなにでも恵んで下さるといふことなんです。私は、野村さんのご生涯を振り返って見て、野村さんがこの御言どおり、神様の前に自分というものがどんなに小さいものか、そんなものに神様が目を留め恵んで下さった。いつも恵みに感じて自らを低くしておられた。だからどんな中であつても感謝の絶えない方だった。そのことが私の中に非常に印象深く残っています。

だから、野村さんは神様から恵まれた生涯をお送りになつた方だと思えます。どのように野村さんが神様に従つて恵まれたか、そのへりくだりに対して神様はどんな恵みを与えて下さったかを、これから皆さんのお証しの中から伺いたいと思います。「彼死ぬれども信仰によつてなお生きる」。野村さんを、私どもはこの地上でその姿を目で見ることはできません。けれども、野村さんが神様との交わりの中で受けた恵みは、やはり今も私どもに与えられるんだということをご記憶して、野村さんと同じように神様の前にへりくだることによつて、同じ恵みに与ることができる。こういうことが野村さんを記念することであり、野村さんを野村さんたらしめた神様を崇める時、これが私どもも記念会というものです。

だから、これから野村さんの主に従つて歩みなさつたその足跡を辿り、またそれに対して神様がどんなに応えて下さったか、神様のさかえをほめたたえるひと時をもたせていただきたいと思ひます。

一言お祈りいたしましょう。（祈り 略）

ではこれから、野村さんについての皆さんの感じたことをお伺いしたいと思います。

ここに、広田さんから、今日はやむをえない用事で関西

の方に行かれて、申し訳ないですけど気持ちを書いておきますからと、手紙をいただいていますので、読ませていただきます。

(広田 寿兄)

野村さんが九月九日に召されまして二ヶ月半、今も一緒に礼拝を守らせていただいているような身近さを覚ええます。

野村さんは模範とも言うべき信仰生涯を全うされました。このことは皆さんご承知のとおりで、ここで申し上げるまでもありません。主のご用のために色々と大きな働きをなされたこととございます。私は今日、その中から一つだけ申し述べて聖徒を偲び、その足跡を学びたいものと思いません。

それは、野村さんが祈りの人であつたということですが、いつも教えられておりますように、祈りは信者の原動力であり、信仰の基本であります。教会のため、ご集会のため、そして兄弟姉妹のため、よく祈っていただきました。その祈りの中によく引用された聖書の御言があります。今日もう一度その御言を拝読して味わいたいと思います。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あな

たの真実は大きい」

(哀歌三・二二―二三)

野村さんは、主の絶えることのないいつくしみと尽きることのないあわれみを来る朝ごとに新しく覚えて、今日も主にあつて生かされている、あなたの真実は大きいと、感謝讃美されたのであります。

野村さんがお召されになつて、ご遺族のうえに主の慰めがありますようお祈りしてまいりました。奥様はじめ、ご遺族の皆さんが寂しさの中にも甦りの信仰に立つて慰めと平安を与えられておられることを目の当たりにし、聖名を崇めるものであります。ご遺族のうえに豊かなお守りがありますようにお祈りいたします。

(野村美恵子)

今日は皆さんが大勢集まつて下さつて、こんな感謝のときを与えていただいたことを嬉しく思います。詩篇の一〇五篇を読んでおりましたら、「主に感謝し、そのみ名を呼び、そのみわざをもちもろの民のなかに知らせよ。主にむかつて歌え、主をほめうたえ、そのすべてのくすしきみわざを語れ。」とございました。主人になして下さつた神様のみわざを簡単に述べさせていただきます。

主人は平成元年頃から段々弱つてきましたが、この六月に入院するときは、堤先生のお計らいで良い所に入れてい

いただきました。これも神様の導きと主人に対するご愛のあらわれだったと思います。今日教えられましたように、神様の時が与えられ、そこで主人が喜んで最期のときを迎えさせていただき、どんなに感謝してよいかわかりません。六月四日に入院して、九日の礼拝後に私が行ったときはすごく悪い状態で、手も足も紫色になって話すことも何を言っているかよくわからないようになっていました。日曜日で先生もおられないし、看護婦さんが来られて酸素を上げたり色々して下さって、私が帰るときにはほとんど戻っておりましたが、入院したばかりで私が病院に泊まるなど考えつかなかったし、帰って一生懸命祈っておりましたら、マルコー〇章二七節の「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」という御言をいただきました。翌日病院に行つたときには、神様は掌を返すように癒しを与えて下さいました。冬野先生が「昨日は最悪でしたが、今日は入院してから一番調子が良いです」と言われ、血液中の酸素と炭酸ガスの量が逆転して普通なら意識がなくなつて当たり前という中から立ち上がらせていただきました。この三年くらい食欲があまりありませんでしたけど、それからの病院生活ではよく食べられて中から力が出たような状態で、これなら帰れるなと思つておりましたけど、お盆頃からまた食欲が落ちました。でも、神様は一度癒し

を与えて下さり、主人も癒されるという希望を持つたと思えます。それから段々下り坂で、私も今度は立ち上がれないなど感じておりましたが、八月一八日頃でしたか、私に泊まってくれと言いますから泊まるようにしました。次第に心細くなつて気が小さくなつてきたのだと思います。

それから私も病院に泊まることにしてずっと一緒に過ごしたんですけど、その期間というのは私にとつて、結婚して四十一年になりましたけど、その凝縮したような生活を送らせてもらつて本当に良かった、嬉しかったなど感謝で一杯です。主人が召される前は、一緒に病院にいる間はいいが、もし天国に行つて私ひとりになつたらどんなに寂しかろうかと、思い出しては泣いているようではいけないなという感じがしていましたが、神様がこんなに豊かに恵んで下さつて、主人が亡くなつてからも悲しくないというのはどういふことだろうかと思うほどです。皆さんが、寂しかろうとおっしゃつて下さるけど、私にとつて涙が出るときは神様に感謝が溢れる涙です。そういう風で、これは考えられないような神様の平安だと思つております。

「何事も思い煩つてはならない。ただ、事ごとに感謝を持って祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」とおっしゃいます。この御言は、私は主人が入院してからも全く思い出していなかったので

すが、「そうすれば、人知ではどうかい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとをキリスト・イエスにあって守るであろう」と、これだなと思いました。そのときに思い出していかなかったと言いましたが、それは四十一年間この御言によって何度強められ励まされ力を与えられてきたか、私たちの生活の中に密着した御言でありました。それを神様がこうして私たち残されたものにも平安を与えて下さっている、神様が真実をもって守って下さっているということをしみじみと覚えております。

亡くなるちよつと前でしたけど、「お母さん、きてごらん」と言うので行きましたら、「僕は天国に行くよ。あんたはどう思うね」と、急にそんなことを言われて、私は戸惑いました。しかし、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」と、これは入院のときに与えられました御言でしたけど、それによって、そういうことがあっても心騒がすことなく、「あなた、もうお迎えが来たのね」と問うと、「来た」と言うから、「それなら私の手の届かないことだから私はどうすることもできないけど、先に行つて私の行くところも用意しておいて」「用意して下さるのはイエス様だから」「そうでしたかね」と、本当に自然な会話ができました。そうして私の気持ち確かめたのかもしれないませんが、それで安心したのだと思

います。そして、やはり主人がそのために一生懸命祈ってくれたんだなと思えます。いろんなことをおして、二人で同じ信仰をもってここまで来られて良かった、私が未信者で結婚してから四十数年間、それを守り通してこられた感謝を神様に申し上げる心だったと思えます。

主人が亡くなるとき、朝から私がヨーグルトを食べさせそれを気管に詰めたけれど、これも神様の手の内だったと思えます。息が切れるまで同じ状態でしたけど、先生も看護婦さんも一体になって一生懸命、人工呼吸をしたり吸引をしたり、息を引き取るまでして下さった。もうここまできたし、皆さんも大変だからもういいですよ、そんな気持ちにもなりましたけど、神様が愛して下さって皆さんが一生懸命して下さい。入院のときに冬野先生から産業医大に移つたらと言われましたけど、私は、ここに導かれたのも全て主の導きだから先生の思われるとおりに治療して下さいとお願ひしておりましたので、皆さんが一生懸命して下さいのを目にして、他の病院ではこんな時は持てなかつただろうと思えました。一つ一つ全てのことを神様が主人の上になして下さっているということ、ロウソクの灯が燃え尽きて、あとに残った蠟がポツポツと燃えて消える、そんな感じの静かな死を見て、何ともいえない平安を感じました。

息をひきとる最後まで、私はこの目ではつきり見たのに、主人が死んだという感じがしないで、エノクが死を見ないで天に召されたのと一緒だなあという思い、「嬉しい」というのが私にとって当たっている、そんな感じがしています。本当にありがとうございます。

(榎本師)

すばらしい主のお恵みだと思えます。  
では、次をどなたか。

(野村仰一)

父の思い出と言いましても、男同士であまり話しをすることもありませんでしたし、これといったことは全然ないんですけど、二つだけ、今でもはつきり覚えていることがあります。

一つは、私がまだ小学校の二、三年の頃だったと思いますが、普段あまり怒られることのなかった父から一度だけひどく叱られたことがあります。多分きょうだい喧嘩か何かの原因だったと思いますが、縁側から外の庭に追い出されたことを覚えています。

もう一つは、私は学生時代には遊んでばかりであまり勉強もせず、おかげで大学に進学するまで二年間もフラフラ

過ごしていたわけですが、その頃すでに父は仕事を辞めて家にいましたし、私も高校を卒業していますから、大抵は父と二人で家にいるわけです。そんなことですから、私が友人に誘われては遊んで回っているのをいつも目にし、普通なら雷の一つでも見舞ってやろうというところなのでしょうが、何も言われることはありませんでした。そして、受験の日が近づいて明日にも上京するというその晩に、祈りとともにただ一言「これを持って行きなさい」、と手渡されたものがありました。何だろうかと思いつつ上京する列車の中で開けてみますと鉛筆が三本と消しゴムのセットになったものでした。鉛筆といっても、当時一本が百円する、その頃としては高い品物でした。そのとき私は、一年間父とともに過ごす中で、父は、私の姿にいつでも怒鳴りたいような怒りたいような気持ちだったと思いますが、それを忍耐し、ただ祈り続けてくれていたのだなあということがよくわかり、胸に熱いものがこみ上げてくる思いをしたものです。

そんな父に対して何一つ孝行らしいこともしてあげられなかったし、むしろ心配ばかりかけていましたけど、入院してからは、病院も良い所にあり毎日見舞いに行くことができましたし、これは後で母から聞いたことですが、「お父さんは、あんたがよくしてくれると言って喜んでるよ」



という話を聞いて、孝行らしいことの少しでもできたのかなと少し安心したわけです。

何も言わないけれど陰でいつも祈ってくれていた父に、今頃になって気づくのは遅いのでしょうか、心から「ありがとう」という感謝の気持ちでいっぱいです。そんな父がこうして多くの皆さんに愛され、神様から愛されて、実に平安な最後を迎えることができて感謝でした。本当にありがとうございました。

(榎本 師)

対話というのは、なかなか面と向かってはできないんですけど、色々なことをとおしてそういう交わりができるんだと思います。お父さんの愛を、今度は自分が違う立場に立って始めてよく味わうことができるのではないかと思えます。お父さんの歩まれたとおりに主に信頼して歩まれていることが、何よりも大きなお父さんを喜ばせることではないでしょうか。どうぞそのように、お父さんのご期待、神様のご期待に応える生活を送っていただきたいですね。

(飯田美紀子)

父の思い出は色々あるんですけど、一つだけ父に教えられている父の歩みを自分たちも受け継いでいけないと思う

ことがあります。若い頃は、父といろんな話をし、またいろんな問題を話していて、決して大きな声で怒られるということがありますでした。最後まで黙って聞いてくれて、そして「お祈りしよう」というその一言でした。こちらとしては答えを求める気持ちで「お父さん、何か言ってくればいいのに」ということが沢山ありましたが、すべて主により頼むものは幸いであると、いつも心から祈ってくれたことを思い出します。何をすることもまず神様に祈ってことを行っているということが一番強く思い出します。

父が書道をしておりましたので、私もすっかり習っておけば良かったなと思いますが、そんなことよりも、父が遺産として残してくれたことは、父の生き様というかそういう歩き方をしなさいということを残してくれたんじゃないかと思っています。

また、入院しましてから母と交代でお昼に来ておりましたが、父を見えていますと、一つ一つ天国に近づく準備をしているんだなと思えて、最後に息をひきとるまでの一日は、迷わずに神様のもとに行ったという気持ちで、感謝して父を見送ることができました。神と人とに愛される生涯だったなあということをおもっています。皆さんに色々祈っていただいて、本当にありがとうございました。

もう一つ、これは誰も知らないことと思えますが、父は

うどんを作るのがとても上手でした。私は、うどんの出汁をとるのが下手で、うどんは外で食べるものと思っておりますが、父の家に行くと、うどんを作ったあげようと言って、すごく美味しい出汁をとって、色々な具を入れて作ってくれるんです。どうして作るのか聞いても絶対に教えてくれません。台所に見に行くと「来たらダメ」と言っていて作って、でき上がったものを器にもって「ハイ、食べなさい」と、私や子どもたちに食べさせてくれました。最後までうどんの味を伝授してもらえなかったのが残念です。

(上島恵子)

父のことを思い出すと、讚美している姿と祈っている姿を思い出します。私も父に怒られた記憶は一度も無いんです。私も遊ぶことが好きで、日曜日など友達と遊ぶ約束を先にしてしまうんですね。そして、父に「教会に行けない」と言うのと、一言も怒りはしないんですけど、「約束しても明日の生命はわからない。神様は教会に行くことを喜ばれるんだから」と言うんです。でも、どうしても約束しているものから、とりなした母に頼んで遊びに行っていました。しかし、結局一日がむなしく思えて、そんなことを考えると、父がそのために祈ってくれていたのかなと思います。病院で色々話す時間が与えられ、弱ってきて聖書を

読む力もなくなったとき、イザヤ書の五五章を読んでくれたというので私が読んでみると、うなずきながら聞いて最後に「ありがとう」と言って、私たちのために祈ってくれました。父が残してくれた信仰の歩みというものを、少しでも父に近づけるように歩んで行くことが父に対する親孝行ではないかと思えます。このように記念会を開いていただいて、父は天国でどんなにか喜んでいてはないかと思えます。ありがとうございました。

(榎本師)

では次に、真理子さん。

(笹木真理子)

父の思い出としては兄や姉が話したとおりです。私も同じように思うのは、父から厳しく叱られたという思いは無く、何かあったときは「お祈りするから、座りなさい」と言われたことです。怒られると言えば、むしろ母からガミガミ言われたくらいで、父は穏やかな人だったと思います。色々思い出すと辛いんですけど、今の心境としては、この前田教会に来ると父がいつも座っていた場所を見てしまふし、讚美歌を歌うと父の声がするような気がして涙が出そうになるので、来るのも辛いんです。父からは、入院

しているときにも信仰のことははっきり言われまして、頑張らなければいけないと思うのですが、ただそれだけが今のところ辛いんです。母からもういつも「来なさい」とよく言われます。わかっているんですが、自分もそこまで信仰ができていないし、つい遠ざかってしまい、家で一日、日曜日がなんとなく物足りない、そんな感じがしています。父が多分見守ってくれていると思いますから、少しづつ近づいていこうと思っています。ありがとうございます。

(榎本師)

お父さんから一度も激しい言葉で叱られたことの無い真理子さん、今本当に、お父さんが亡くなって寂しい思いでいらつしやると思いますが、決してお父さんは生前と変わらないで、責めていらつしやるのではなく、真理子さんがお父さんと同じような気持ちで主に信頼できるのを待っていて下さる。どうぞ安心して、今が結論ではない、これからを望んで、お父さんの前に立ったときには「お父さん、帰りましたよ」と言えるように、先を望んで生きていただきたい。それがお父さんに対する一番大きな餞けになりますね。

では次に、入院するときのことを堤先生に一言。

(堤 善弘兄)

優しい信仰の先輩であった野村さんのことを最近常に思っております。野村さんは、私から見ますと、とても弱々しくて、何時呼吸困難が来てもおかしくないような状態がずっと続いていたと思います。私も心配でしたので、その度に「大丈夫ですか」と聞くと、「はあ、大丈夫です」と言われるものですから、「ああ、そうですか」と言いながら何回か様子を見ておりました。そして奥様に「どうですか、ご主人の状態はあまりよくないから、何かあったらすぐ言ってくださいよ」、と言っておりました。ああいう風にして一番前の席に座られて、本当に静かにして神様に従っておられる姿を見ると、これ以上言うことも無いなど思いつながりを見えておりました。

しかし、入院される日は自分から電話をかけてこられました。「さあ来たぞ」と思ってた私は、それならこれは私の出番ということで、直ぐ連絡を取りました。そして私が何時もお世話になっている冬野先生に話しましたら「良いですよ」と言うことだったので、もたもたして「行かない」と言ったら困るので、「先生が待っておられるから直ぐ行って下さいよ」と、時間を待たないよう、催促するようにして入院していただきました。

後で病院に行ってみたら本当に苦しそうでした。医者と

いうものは妙なもので、悪い時に行ってみるのが本当でしょうけど、良くなってる時には何度でも行きたいですが、あまり悪い時に行くのは辛くて足が進みません。この次に行こう、今度休みがあるのでその時にしようと思つたようにならしてしまつて、とうとうお別れになつてしまつたような格好で、そのことが心残りでございます。

先輩に教えていただきました信仰の歩み。私も、ああいう風に祈りながら神様に従う敬虔な姿を私の手本とし、また励ましていただきたいと思つていきます。

野村さん、永遠に神様のそばでお過ごし下さい。

(榎本師)

私も、野村さんが一番前のベンチに座つていらつしやるのを講壇から見ている、お気の毒だな、これで良いのかしらと思つんですけど、神様に良い時を与えてくださいと祈つておりました。

そしたら丁度良いときに神様は素晴らしいことをして下さいました。今振り返つてみて、私共は先のこととは分かりませんが、あとで振り返ると神様は信頼に応えて一番良いことをして下さい方だということをしみじみと思ひました。

またもう一つは、野村さんの声の素晴らしさと言いますか響きのある声で、司会をしていただいても讚美歌を歌うと

き、あの体力でよくあんな声が出るなあと思つていました。最後に、私が福岡に行つて礼拝のご用ができなくて野村さんにしていただいたときも、大丈夫かなと内心心配しながらも、主が支えて下さるからと信じてお願いしました。

あとでテープを聞かせていただいたときも、あの体力から素晴しいひびきのある声で本当に良いご用をして下さつたなと思ひました。そこに、神様らしい、人間ではとても不可能なことを神様がやつて下さつたんだなということもいつも思ひ出しては感謝しています。今でも讚美歌を歌つていて、野村さんのあの声が耳に響いてくる思ひがします。その点については、皆さんも同じ印象深い思ひがいらつしやると思ひます。

野村さんは最後の最後まで主に信頼しておられた。あらゆる点で微塵も動かされないで、折り深く主に信頼しておられた野村さんの歩みは本当に素晴らしいものだったと思ひますね。

(榎本百合子師)

ひとこと野村さんについて感謝したいことは、福岡時代からもう六十年くらいになるでしょうか、野村さんには本當にお世話になりました。そのときを思ひ出しますと、日曜学校の先生をしておられた野村さんと、私もそのお手伝

いをしていました。そのときの野村さんのメッセージは今も私の心の中に、野村さんというとそのメッセージが思い出されてならないのです。

それは、列王紀下六章一六節の「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから」でした。

エリシャ先生のところに仕えていたゲハジが山の上から下を見たところ、沢山のペリシテ人が押し寄せて来ていた。ゲハジが、エリシャ先生と私の二人だけでどうしたらいいでしょうと慌て恐れていたとき、エリシャ先生がゲハジに言った言葉でした。

「われらと共にいる者は彼らと共にいる者より多い」。この御言が、野村さんのご用のときに私の心にひびいた御言でした。

もう五十数年になりますけれども、今もこの御言が何かのときになりますと思ひ出させていただいて「ああ、そうだ イエス様がついていらっしやるから大丈夫だ」と、このことを思わせていただいております。ひとことですが、本当に野村さんがこうした信仰をもって私共のお手本となつて下さったことを深く感謝しております。

有難うございました。

(河本 信生 兄)

私は昭和三十年代の後半から昭和四十年にかけての数年でしょうか、野村先生とご一緒に仕事をさせていただきました。当時、漬物の原料の切断機、圧搾機、攪拌機のとメンテナンスなどの責任を持って下さったのでありますけれど、ちょうど日本の経済が高度成長期に入る前だったのででしょうか、非常に過酷な環境のなかで長い時間仕事をしていました。私はまだ若かつたんですけれど、それでも一日の疲れが一晚で取れないくらい疲れ、段々疲労が重なつていくような毎日でありました。

今日の榎本先生のお話しにもありましたように、若い頃の実験的など言われる大きな手術をなさつてハンディを持つておられた野村先生でありますけれど、そういう身体的な条件であるにもかかわらず、決して弱音を吐くというようなことはなさらなかった。非常に責任感の強いと言いますか、強い生き方をなさつたことが印象に残っております。そういう中にありながら、柔和で温厚で誠実な姿というものがちつとも変わることがなく、何時も微笑をたたえておられました。

そういう生活の中にあつて各集会を守り、長い間、教会の週報である「みぎわ」の印刷、鉄筆でガリ版刷りをするというご奉仕を続けておられました。また、お好きであつ

た書道の研鑽を怠ることがなかったですね。それによって前田教会、我々は、新年のメッセージから、結婚式の案内から、告別式、各集案内、そういうものでどんなにお世話になったか分かりません。そういうことをとおして、環境に負けない、めげない、積極的に四つに取り組んでいく強靱な精神を持つておられたということを教えられました。それと同時に思うのですけれど、野村先生と親しくしていただいていた私の長兄、野村先生を福岡からお迎えした本人ですけれど、その環境の辛さですね、両親も職場もみんなな放り出して逃げ出してしまいましたですね。それほど厳しい環境の中にあつたけれど、先ほどお話し致しましたように、絶えず柔和なそして穏やかな姿勢というものは変わらなかつた。これは本当に驚くべき恵みであり、主にあつて天に希望をおく人の素晴らしさというものを野村先生を通して教えられました。

私のところの座敷に、メグワの額に御言を書いていただいて掲げてありますけれど、これは母の記念誌を読んでおられますと、野村先生が寄稿して下さった中に「河本のおばあちゃんが非常に望んで、たつて書いてくれるように言われたので、一生懸命に祈つて書かせていただいた」と言うことがありました。

それは、ローマ書五章三節、四節の、

「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである」という御言であります。

主によって与えられた命と使命を全うして天に凱旋なさつた野村先生のご生涯にふさわしい御言と申します。私も彼のことは終生忘れることはないと思います。



(榎本師)

続いて、今度は野村さんのお手紙を読ませていただきました。「平成三年七月十四日 信徒会」同様」とあります。一度読んだことがあると思えますけど、もう一度読ませていただきます。

「『恐れとおののきがわたしに臨み、  
はなはだしい恐れがわたしをおおいました』

(詩篇五五・五)

尊き主の聖名を崇めます。いつも主のご愛のゆえに、この小さきしもべのために祈りをいただき、ありがたく御礼申し上げます。去る六月四日、堤先生のご紹介により萩原中央病院に入院して一ヶ月あまりになります。『あなたの荷を主に委ねなさい、主が支えられる』、とのおことばにより、一切を主に委ねてしまいましたところが、主は確かに支えて下さいました。

様々な状態の中を通りました。しつかり食べねば元氣になれないよ、と毎日言われました。また食事かと思いません。

『主の創られたものは皆良いもので、感謝して受けるなら何一つ捨てるべきものは無い』。み声が私のうちに聞こえますが、どんなに努力しても、祈っても、主が許されなければ全くダメでした。しかし、すべて主のみ手に委ねさせていただいたとき、祈りが聞かれ、主が許して下さいました。どうか、突然、本当に急に食欲が出てきたのです。ここの十日ほど、ごはんが美味しくほとんど残さずいただきます。おかずも心を込めて作って下さったのが目に見えるようで、嬉しくていただきます。おかゆを食べていた頃には考えられないことでした。少しづつ、トイレ、廊下を歩いてみました。上よりの新しい力を待ち望み、寄り頼んでいます。

常に皆様の厚き祈りを身に覚え、祈りに応えて下さる神

様のみ業を拝する毎日をただただ感謝し、讚美するばかりです。誠にありがとうございました。

近況ご報告をもってお礼申し上げます。今後ともどうぞ覚えて下さい。

平成三年七月十四日 野村末義

こういうお手紙が、信徒会にいただいた手紙で、そのときの野村さんの状態です。



(正野真宏 兄)

私も野村先生から大きな大きな愛を受けた者の一人です。野村先生のことをちよつと考えますと、私は、人柄といえます。謙遜と言うことと忠実と言うことが思い浮かびます。

先ほど榎本先生が御言を引いて言われておりましたように、私のような若輩者であり小さい者に対しても、おっし

やるのが謙遜というか、私よりも下に立ってものを言われるので、私もその下にいかなければならないような、そういう感じをもっておりました。それは決して殊更そのようにしておられると言うのではなく、自然に主にあつてそのご愛によつて出て来るものではないでしょうか。

特に野村先生には、長いこと海老津の集会の責任を持つていただきましたので、私達は何時もお世話になっていくという思いがあるんですけど、礼拝で挨拶をしますと、「いつもお世話になっていきます」と、こちらから言わないといけないことを先に言われまして、夏の暑いときも来て下さつて本当に大変だろうと思うのですが、そういうことはおくびにも出さず「お世話になって、いつも良くしていただいているんです」と、しかもそれを心の底からおっしゃつておられるんですね。私がしてあげてますよというのではなく、させていただいていますという気持ちがいっつもあつて、神様の前に、そして私たちに対しても謙虚な方でいらつしやつたなあとお教えられておりました。

それから忠実ということですが、お疲れのときも身体の調子の悪いときも、神様の前に仕えなされるその忠実さで、海老津の集会にも欠かさず来ていただいたこともそうですし、昨年でしたか先生が少々身体をこわされたとき、私がたまたま家でワープロを買つておつたものですか

ら「みぎわ」のご用をしばらくピンチヒッターでさせていただきました。間もなく野村先生が体調がよくなられたとき、私としては先生がお疲れが出たらと思ひ、私が代わつてしましようかという気持ちもあつて「どうされますか」と一寸申し上げましたら、「有難うございます、また私がさせていただきますましよう」とおっしゃつたのです。

私だつたら「それではお願いします」と言つただろうと思ひますが、野村先生は、これは神様が私に託して下さつたご用ですという思いがあつたと思ひます。そのことは「ぶどうの木」や「燃ゆる柴」の中にも感じられるんですけど、私はその言葉を聞いて「死にいたるまで忠実であつた」ということばを思ひ出しました。

そのことと創世記の中の、ヤコブが最後に天国に行く前に杖に寄りすがつて礼拝したことがありますが、私達は具合が悪いとベッドの上で休んだままでお祈りしたりすることもありますが、ヤコブは死ぬ前の体力を振りしぼつて姿勢を正し杖にすがつて神様を礼拝したという、その姿勢に教えられるんですけど、「私がまたさせていただきます」と言われた言葉の中に、神様に対する忠実、与えられた使命を最後まで全うしたいという思いが強くなりました、謙遜と忠実というのは聖霊によつて結ばれた素晴らしい実ではないかと感じておりました。ほかにも沢山ありますけど、先



生から受けたものを私達は大事にしながら主の前に歩み行かしていただきたいと願っております。どうも有難うございました

(檀本師)

ローマ書二二章に、

「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき靈的な礼拝である」とあります。

私たちは、神様からあわれみを受け恵みを受けて、謙遜に感謝する人はありますけれど、身もたましいも捧げてそのご愛に応えると言うことは、なかなか出来ないことです。けれども野村さんは、本当にいつも謙虚になって、神様のご愛の中にと同時に、そのご愛にお応え申し上げ、身もたましいも捧げて来られた。そこに忠実さが生まれてきたのではないかと思います。私たちも、なすべき礼拝を絶えず捧げるような生涯に入れていただきたいものと思いません。野村さんは、良き型を私どもの前に残して下さったんじゃないかならうかと思えます。

(三好 喜代市 兄)

正野さんのお話しの中に出ましたように、海老津の集会

が始まって私もその集会に通うことを教えていただき、また野村さんのご愛によつて、このような愚かな者に、日に日に主の道に歩くと言うことがどんなことであるかと言うことを、その集会の中で私に教えて下さった人です。

全く主に委ねきつた毎日の生活を私は思い出します。

入院中に私がお見舞いになりましたけど、あの苦しみの中から私の為に「三好さんお祈りしましょう」と、ご自身のあのような状態の中からも他人のことをお祈りして下さる、信仰の強い人ではないかなあと私は思い起こしております。

私には野村先生の記念品が沢山あります。ここに毎年掲げてある御言も、私のうちにある不安を除き従う心を与えられ、また、家の中に短冊、色紙、色々な記念品を掲げ、その御言をもつて励ましの言葉をいただいています。その御言を見ては野村先生の面影を思い出し、本当に私にとつて一番かけがえのない友になっていた方ではないかと今でも考えています。思い出しては私の中から何か取り去られて行ったような思いです。

しかしこれは主がなさったことですから止むを得ません。ただ、野村先生が通つてきたこの道を自分も過つことなく歩いていきたいと、毎日そう願ひながら、今は家内が倒れておりますけれども、そのことを思い出しては励まされ、

また元気づけられて、今ここで神様に従うことが野村先生にも喜んでいただけることだろうと、面影を思い出しながら一歩一歩、先生のあとを自分もしっかり守って、この信仰を守りとおすことができるようにと願っております。

有難うございました

(榎本 師)

野村さんは、先ほどの手紙に「一切を主に委ねて」と書いておりますように、一切を主に委ねて言うことのできない平安のうちにあります。お召される前の日でしたか、私が日曜日の礼拝のあとでお訪ねしたとき、起き上がって、先ほど正野さんがおっしゃったように、杖にすがって礼拝したあのヨセフのようにして、最後と一緒に祈りしたときも、哀歌三章の「われらの尚ほろびざるは、エホバの慈しみによりその憐みの尽きざるによる」このおことばに立って、「主はいかなればこのような者に目を留めて、ここまで導いて下さって」と、尽きない感謝を神様の前に捧げましたのを私は忘れることができません。それが、野村さんの神様に対する大きな感謝と喜びの一切だったと思います。それほどに、自分の状態は、もう人間的には望みはないけれども、平安そのものは動かなかった。それは野村さんのうちに、主にある平安、主に委ねきった平安とい

うものが、いつも心にあつたからだと思います。讚美歌の五三一番、これは野村さんの愛歌ですが、この歌のとおりだったと思います。これを歌って、また続いてお証しを伺いましょう。

(伊規須 太郎 師)

野村先生とは随分長いお交わりをいただきました。思い出も沢山ございますが、ひと言で言いますと、皆さんが言われているように謙遜で柔和な方だったと私も思います。黙って黙々となさる方でした。私だけしか知らない一つのことがありますが、それは戸畑教会で日曜学校が始まりましたときに、別にお願ひした訳ではないんですけど、すすんで、その時間前になると来て下さって、公園に一緒に行つて遊んでいる子供達に声をかけたり、そうして最初の子供達が集まり、そのグループとつながる子供達が次々に入れ替わり来るようになりました。野村さんが黙って実行される、その最初の働きというのが大変恵まれたものでした。神様のみ旨に従うためには、勿論忙しい方ですけど、必ず私と一緒に公園をまわって下さったことを思い出して、私は大変感謝しているのです。それ以来、振り返りますと神様はご真実と憐れみ深い方であったということをしみじみ教えられました。誠に勝利であったと思います。

今朝、食事をしていますと、日野原重明さんのお話に「死を恐れないで、ネガティブな生でなく、ポジティブな生を生きようではないか」、というようなことを言われておりました。そして、三つの「V」を獲得するようにという話で、「ビジョン」と「ベンチャー」と「ビクトリー」であると言われましたが、私は神様の真実というものを現実に見せられますときに、私たちは最後の一息まで神様の前に大いにビジョンを持ち、ベンチャーに取り組み、そしてそれが既にビクトリーでありますから、誠に素晴らしい生涯に入れていただいているなあということをお教えられました。

今日こうして記念会に出させていただいて、愛する兄弟のご生涯を偲んで私どもの身分を感謝したしだいであります。

### （高木 敏夫 兄）

私は昭和二六年五月に、この教会の礼拝に初めて出席させていただきましたけれども、それから六月だったと思いますが、信徒総会が開かれました。私は求道者ですから関係が無いと思って、玄関に出て靴をはいていましたところが、野村さんが私に近づいて来て「残りませんか」と勧めて下さったんです。それで残りましたら、榎本先生に連絡して下さい、私のことを前に呼んで、皆さんに紹介して下さい

って、それから今日まで四十年になりますけど、野村さんとは四十年間本当に親しい交わりをさせていただきました。思い出は沢山あるんですけど、私に足りないところを野村さんは備えておられるんですね。その点で教えられたことを二、三述べたいと思います

先ほどから皆さんおっしゃいますけど、第一番に、神様と神様に立てられた神の器である榎本先生に対して、謙遜という言葉よりへり下るといふ言葉がピタリときまいますが、徹頭徹尾へり下って従順に従われたということですが、

私は最初の頃、何でも先生に質問していたんですけど、ある時こんな質問したんですね。

「先生は献身されて、折滝先生のところまで八年間修養されたそうですが、先生の信仰が進むにつれて、折滝先生と信仰上の意見が相違することがありませんでしたでしょうか、そんな時どんな風にされましたか」と質問したんです。そしたら、先生がおっしゃいますには、「白を黒と言われても『はい』と言って従うこと、馬を鹿と言われても『はい』と言って従うこと、これが従うことです。目に見える人に従うことができないで、目に見えない神様にどうして従うことが出来るか。だからこの八年間は徹頭徹尾、神様から遣わされた折滝先生の言うことに従うこと、これが修養生だ」と、こう言われたんです。私は思ったことを

ズバリと言うほうで、先生にもツケツケと何でも言っておったものですから、そのときから考えを変えまして少しは態度が変わったかも知れませんが、三つ子の魂百まで、なかなか思ったことはズバリ、先生にも言っていたわけです。ところが、野村さんの点は、十三年間折滝先生のもとで修養されただけあって、白を黒と言われても、馬を鹿と言われても、どんなことがあっても従っていかれましたですね。これは、本当に私はつくづく見習わなければならぬと思います。

それから二番目は、人に対してでありますけど、これは皆さんおっしゃったように誠実で柔和ですね。私どもに対していつも謙遜で、先輩であるにもかかわらず優しく優しくして下さいました。そういうことは、非常に教えられます。また、今も子どもさん方のお証しを聞きましたけど、子供さんが一度も荒々しい言葉をかけられたことが無いとおっしゃいましたが、子供さんやお孫さんに対しては本当に慈愛ですね。亡くなって後に恵子さんからお聞きしたんですけど、おじいちゃんやんが亡くなって、美紀子さんや恵子さんたちの子どもさん、野村さんにとつてのお孫さんたちが、声をあげて泣いたと聞きまして、さもあらんと思いました。慈愛の心を持って懇ろに懇ろに導き、祈りをもつていらしたことを思います。

それから、野村さんの愛唱のおことばですけど、「哀歌三・二二」あるいは「エレミヤ三一・三」あるいは、「ヨハネ一五・九」あるいはまた、「第二コリント二一・一〇」これらのおことばをよくお証しするとき用いられましたけど、それはご自分の弱いこと、自分がどういう中から救われたか、自分がどのような人間であるか、それが神様の憐れみによってかくなったという信仰の原点にいつも立っていらっしゃったから、神様にあのように従い、また感謝して喜んでおられたと思います。

私の部屋に四つの御言が壁に懸かっております。その一つは去年の標語で「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、我が愛におれ」、この御言は野村さんが絶えず神様のご愛のうちにおられたということと一致していると思います。それから、中央の四角の額は大分前に野村さんからいただいたものですけど、やはり新年聖会の標語で「エホバを待ち望め、雄々しかれ、汝らの心をかとうせよ」、と言うおことばです。それと、もう二、三十年前の短冊ですけど、これも額に入れていただいたものですけど「汝ら、我が愛のうちにおれ」であります。もう一つは正野のお母さんからいただきました、「無くてならぬものはただ一つなり」というおことばです。もう三十年くらいになりますけど、ずっと掲げております。

それからこれは聖句以外のことでありますけど、私は音痴で音楽教育は全然受けていません。ところが野村さんの歌声は、皆と一緒に聞くより礼拝の司会のときのテープを聞くと野村さんの声だけが聞こえてきますけど、実に朗々とした声でいつも聞きほれます。

それからこの書でありますけど、まことに墨行鮮やかと言いますか、私は白内障になってこの間手術を受け、今はこの標語がはつきり見えます。これが野村さんの最後の絶筆になりましたけど、「彼は死ぬれども、信仰によつて今なお語られる」とありますが、この字、このおことばを通して野村さんの信仰が今甦つて、私どもの大きな参考になして下さることを思います。

それから、何時も前の席に座っておられましたけど、今は奥さんがご主人のあとに座られて礼拝のお祈りもされ、各集会のお祈りもされております。また、子供さんたちやお孫さんたち、それぞれ野村家にかかわる人たち二十人皆が、主に繋がっていることを思いまして、私どもも信仰と希望を持たせていただきました。本当に心から感謝いたします。有難うございました。

(高木 つるえ 姉)

野村先生の信仰の歩みを通して教えられ、恵まれ、信仰

に堅く立たせていただきました。今まで皆さんがお言葉を通して申し上げられましたけど、私自身先生を通して教えられたことを申し上げて野村さんを偲びたいと思います。

コリント第二の手紙二章九節、一〇節に、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところにも完全にあらわれる。：わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」とあります。この御言を通して、先生はいつも神様に感謝しておられました。神様の前に心を低くしておられた先生を思いまして、私たちの歩みを整えていただきました。

それからもう一つは、ヨハネ第一の手紙五章四節、五節の「すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか」。この御言を通して、私たちが先生の信仰の歩みを踏み従って行くようにと、神様から諭され、恵まれ、信仰を与えられました。先生はいつでも、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れ、神様の前に心を低くされてきました。私たちが先生の歩みを通して励まされ信仰を与えられました。

それから、日曜学校の讚美歌集のことですけど、長い間使い続けて破れたり汚れたりしていました。伊規須先生が

おられたときは、先生が書き直してくれましたが、先生がいなくなつてからは、裏打ちしたり透明のテープを貼つたりして修理して使つておりました。昨年の初めでしたか、野村先生に相談して、先生の体調の良いときに書き直していただけませんかとお願いしましたら、先生が「必ず書き直しますから暫く待つて下さい」、と言われました。しかし、体調もなかなか回復しないまま夏になつて、あるとき土曜日の掃除のときに、広田さんの奥さんが破れたところを見て「これでは子どもがかわいそうだから、私でよければ書き直しましょうか」、と言つて下さつたのですが、野村先生とお約束しておりました、必ず書き直すからと言われていましたので、野村先生にお尋ねしてみますというところで、先生にご相談しましたら「では、破れたところだけ書き直してもらつて下さい。あとは自分が書きますから」と言われました。先生に無理をなさらないようにと申しましたが、先生がそうおっしゃるので待つておりましたところ、秋になつて体調も整い、立派に書き直して下さいました。新しく書き直したものは四方にテープを貼り、今までクリスマスの讚美歌やイースターの讚美歌は表紙もなかつたんですが、ちゃんと表紙まで付けて下さいました。そのうえ、広田さんが綴るための板まで作つて下さつて、立派な讚美歌集が三冊できあがりしました。

できあがつたものを先生に見ていただいたときの先生の嬉しそうな顔が、神様からの使命を果たした喜びと感謝、神様から書き直すための体力を回復していただいたという感謝と喜びに満ちておりました。

今、日曜学校でその讚美歌を使わせていただくたびに、野村先生の喜んだお顔が目には浮かび感謝しながら使わせていただいています。

皆さんがおっしゃいましたように、ご自分の使命に忠実で、神様の前に謙遜な歩みをされた先生を思い、私たちもまた、先生の歩かれたように神様の前に忠実に謙遜に従つて行きたいという思いでいっぱいです。

#### (榎本師)

ここに「ぶどうの木」に載せる、野村さんの最後の言葉があります。「これで私の証しを終わります」、と書いてありますが、具体的にこれが最後の証しとなりました。まだ未発表の原稿ですけど読ませていただきます。

《「死んだ犬」(1142頁に別掲)を朗読》

このような素晴らしい、どこに置かれてもそこで主が共にいて下さる、主が愛して下さる。しかも主が、こうい

う者を通して、世の光として地の塩として用いて下さる、  
その主の手に一切を委ねておられた、そこに喜びがあり平  
安があり望みがあった。私どもにも、そのように生きるよ  
うにとの野村さんの心からの願いであったと思います。  
では、一言お祈りしましょう。

お祈り(略)

讚美歌 五二七

頌栄 五四一

祝祷



神はる一人子を  
賜わったほごこ

このまゝ  
愛  
↑  
(ヨハネ ミ  
山平)

(2) 記念会の記録

平成八年（一九九六年）九月十六日（月曜日）

讚美歌 五三一、四九五

祈り（略） 榎本牧師

聖書 哀歌 三・二二～二四

（榎本牧師）

哀歌三章の二二節に、前の訳によりますと「われらの尚ほろびざるはエホバのいつくしみによりそのあわれみの尽きざるによる」とあります。

野村さんは人間的には大変恵まれておられた方だったと思います。それで見込まれて養子にもらわれ、そして大変良い環境におられたのですけれど、結核を患ってそれからと言うものは、野村さんの生活は非常に困難の連続の中に落ち込んでしまった。もう生きる望みを失ってしまった、死を覚悟するというような状態の中にあられたときにイエス・キリストの救いに導かれ、神様がこんな私みたいな者のために一人子であるイエス様さえも犠牲にして愛して下さっている、こんな大きな愛をもって愛して下さる方がいるなら、私もこの方にお従いして行きたい。

それからの生涯は皆様もご存知のように、いろいろな問題

の中にあるけれど、絶えず祈り深く、そしておことばに信頼していらした。だから、私のような者が滅びないで今日あるのはイエス様の一方的なお恵みですと、いつも言われていたのを思い出します。

初めて教会にいらつしやったときに、まだ当時は結核の外科手術というものがはじめて開発されたばかりで、実験患者として、医者から「あなたはどうぞそのままでも死ぬ、手術をして治れば命拾いするが、やってみるかね」、と言われたと言うんですね。そのとき野村さんは「結核は治る可能性は無いと聞いています。それなら一か八か掛けてみましょう」と言って手術を受けたそうです。そのとき四人程一緒に手術を受けたんですが、皆早く亡くなってしまっ、あとまで残ったのは、はっきり分かりませんが私一人ではないかと思えます、と伺ったことがあります。

そういう中で人生のどん底まで落ち込んだときに、教会に来ておられた方が「あなた教会に来てみないか」、と誘われて初めて教会に見えました。

その時のことを私はいつも思い出しますが、畳敷きの教会で皆座っているその側を風のようにすうっと通って行かれるのです。ふと見ると青白い顔をした人が足音も無くすると通って行くので、足があるのかしらと見るほどでした。後から伺ったのですが、そんな大きな手術をしたのだから身



体を動かしたらまたこわれるのではないかと、まるでひびの入った甕のような気持ちで歩いていたのだそうです。

その野村さんが、イエス様がどういうお方であるか、そのイエス様が自分みたいな者のために十字架にかかって下さった。健康でしかも何一つ欠けのないお方が私のためにあのごたらしい十字架を受けて死んで下さった。私は神様を知りもしないくせに、神なんかあるものかという気持ちでおった、そのすべての罪のためにイエス様が死んで下さったということを知って、捨てられても仕方の無い私に目を留めていただくだけでも感謝ですと、それからイエス様を信じて信仰生活を始められたのです。

ところがある時、とうとう養家から締め出されたのです。

帰ってみると戸を閉めて家に入れて貰えなかった。寒いクリスマス晩に、一晩中家の外で震えながら過ごし、翌日教会に帰ってきました。それから私と一緒に八年間生活したのです。その間に野村さんの中に、神様が一人子を賜ったほどに私を愛し、人から捨てられ自分でも捨ててしまつて、もう死んでもかまわないと思つていた私のために、イエス様が天の位を捨て命を捨てて下さった、そんなにまでして下さったのなら、もう私は何も要らない、死んでもかまわない、と言う気持ちになつてイエス様に従つていらつしやう。聖書のおことばと首つ引きといいますが、おことばのとおり、

もうどうなつても構わないという気持ちで私と一緒に生活して参りました。そうしたら、だんだん強められて、もう畑はするし、夏の日照りには水も撒かなければならない、それも井戸水をポンプでついで撒きます。そのときに私と一緒にやるのですけれど、ちつとも病気をした状態ではないのです。

ただ私が心配したのは、背中後ろから見ると袈裟懸に切られたような手術の傷跡があつて、いつも肩を一寸かたげていらつしやるのですね。そんな身体でやつたら、今にその傷がパクンと開くのではないかと私の方が心配で、私は「野村さん、やめとけ、やめとけ」、と何べんも引き止めていたことがあるんです。野村さんは「いや大丈夫です、大丈夫です」と、恐れも無く何の不安も無く一緒に作業をしたことをついでこの間のように思い出すのです。本当にもう生きる望みも無くなつたときに、しかも自分でも命を捨ててしまつたような絶望状態の中で神様のご愛にふれ、「いかなれば人の子を顧み賜うや。(詩篇八・四)」、こんな者を神様は顧みて下さるのですかと、神様のご愛と恵みに感じて、それから野村さんの新しい生涯が始まつたと思えますね。

ここに「主のいつくしみは絶えることなく、そのあわれみは尽きることがない」とあります。野村さんのお通りになつた生涯はいろいろ紆余曲折がありますが、人間的弱さを正直に認めて、本当に私はこんなに弱い者ですからイエス様どう

ぞと、従順に主に信頼していらつしやうた。この御言が、野村さんの生涯のメッセージだったと思うんですね。

「われらの尚ほろびざるは、エホバのいつくしみにより、そのあわれみの尽きざるによる」。

私は野村さんと一緒に生活しながら、この御言通り私もそうだった、私が今なお滅びないのは主の憐れみによつて神様が憐れんで下さっているから今日まで支えられているんだなと、いつも教えられるのです。だから私は、野村さんといふとこの御言が浮かんでくる、またこの御言といふと野村さんを出すんです。

これほどに、野村さんはこの御言どおり、神様はいかに恵み豊かであり憐れみ豊かなお方であるかといふことの証人であつたのではないでしょうか。

あるとき野村さんが戸畑の自宅で感謝会をなさつたことがあります。そのとき野村さんが言われるには「私は身体一つで遠賀川を渡つてきました。そしてこの地に来て、神様が私自身の健康を与えて下さつたばかりでなく家族を与えて下さつた。ヤコブが身体一つでおじさんの所に行き、帰りには沢山の群れになつてヤボクの渡しを渡つて帰つて来た。その姿と重ね合わせて思うのです。私は今、十五人の家族になりました。無きに等しい者を神様は祝して、憐れんで下さつたんです」と、涙をうかべて感謝されたことが私の目に焼きつい

て消えませんが。

確かにそれは、いかに神様のご愛と恵みとイエス・キリストの救いが徹底的な救いであり完全な救いであるかといふことを、野村さんの生涯を通して私は見せていただいているよ  
うな気がします。

この記念のときに、「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない」と、野村さん自身の上にもそのようにして下さつた神様は、また私達にも同じように憐れみと恵みをもって包んで下さることを心において、恵みに感じて神様のご愛に答える毎日でありたいと思います。

お祈り致しますよう。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。」

もう一度、愛する兄弟が人間の弱さ自らの弱さを思い知らされ、またあなたがその中で滅ぶべき者を憐れんで下さつた憐れみの故に、永遠の命まで与えて下さつたことを感謝をもつて歩いて参りました。今、「われらのいま尚ほろびざるはエホバのいつくしみによりそのあわれみの尽きざるによる」と、また私共をもその憐れみ中に取り囲んで下さっていることをおぼえて感謝いたします。

このところから、愛する兄弟が地上の馳せ場を走り尽くしてみくに凱旋して参りましたように、私共も一人一人があな

たの憐れみの中に取り囲まれていることを信仰持つて受け入れ、大胆にお従いして歩み行かして下さることを願ひします。イエス様のみ名によって感謝してお願い致します。アーメン。

讚美歌 四五三



では続いて、野村さんについての思い出、お証しを伺いたいと思います。

(野村 美恵子)

平成三年九月九日、主人を天国に送っていつのまにか五年を迎えました。私は一人になって何も分からない様々な中を守られて参りました。先ず、神様の豊かなお恵みとご愛、陰で折って下さる先生方、また兄弟姉妹、その温かい励ましの中で歩ませていただき、本当に感謝で一杯でございます。

八幡に移り住んで環境も変わり、体調も落ちて困難な中もありましたが、今これらのことも整えられ生活にも慣れて、全て落ち着きを覚えて参りました。私はこの時どうしても、今一度記念の時を持たせていただきたい、そしてこれからの生活のために感謝の壇を築かせていただきたいと切に願って参りました。主が祈りに答えて今日このことを行っていただき、心から感謝をいたしております。そしてお忙しい中をご出席下さいまして有難うございました。

哀歌三章二二節の御言と主人、それは到底切り離すことは出来ないと思います。

福岡大空襲の後で何もかも焼かれてしまつて、本当に着の身着のままになつて歩きだした道は、段々主を離れてしまつていたようです。終戦の時は飛行機の部品を造る会社にいたのですが、イエス様から離れてしまつて落ち込んでいたとき、河本実兄がどうして探し出してくれたのか分かりませんが、自分を探し出して前田教会に導いて下さったということです。それは神様の憐れみであり、主がそのようなして自分を前田教会に送って下さったことを思うとき、本当に考えられないほど不思議であり、神様の憐れみを被ったことをもう一度新しく思わせられて、それからは、いつもいつも、滅びても仕方ない者であつたということが心の中にしつかりと根付いていました。初めの信仰に立たされ、そこからはずれ、

またそこから救われたということについて、神様の深いご愛と憐れみを忘れてはならないことであると心の中に焼き付けたいのだと思います。主人の救いの原点が私の救いの原点であることを思いますとき、私も感謝にあふれています。

また、主人がモットーとしていました「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。(ヨハネ一五・九)」の御言を愛し、神様の愛のうちに絶えずおらせていただいて、愛に満たされていたなあと 생각합니다。そして「汝はわれに従え(ヨハネ二一・二二)」とおっしゃるその御言が、主人の歩く道をいつも導いて下さった御言で、家にいるときはいつも祈っていたということが私の中に焼き付いています。

私が結婚の当初、信仰のことが何もわからない頃でしたが、何かたずねたところ、祈ってみないとわからないから待ちなさいと言ったので驚いたことがあります。これ位のこと考えて行動出来るだろうにと、そんな思いをしたこともあるほど、とにかく何でも祈ってからでないといけない、そして死に至るまで祈り続けた主人でした。その頃はわからない私でしたが、今は主人の歩いた道がよくわかります。

また、子どもたちがお父さんに怒られた思い出が無いように言いますが、主の愛に満たされていたら、子どもであっても怒ることはできない、裁くことはできない、まず祈ろうと

いうことで、子供達が何かあったときにはいつでも、「お祈りするから来なさい、そこに座りなさい」と、皆集められ私も一緒に座らせられて祈ることが度々でした。そういうことを考えると、そこまで神様の愛に満たされて幸せだったなあと 思います。

平成一年の夏頃から身体が弱ってきましたが、秋にはまた少し元気になって、海老津にも遣わせていただくようになり、礼拝の司会やお証しのご用をさせていただくようになったときは、喜んで生き生きしていました。ただ、家ではグタンとして、籐椅子に座っているか、そうでないときは自分の部屋で祈っているかでした。それでも、お米を洗ったり後片付けをしたり、そういったことを頑張っておりました。

最後の頃は礼拝に出席するのもタクシーを使うようになり、車を降りて会堂に入るまで、本当にそろそろと歩いて時間がかかるようになりました。それで立てるのかと思っていました。が、ご用にあずかるときは神様が力を与えて下さって、私は後ろの席で祈りながら聞いていました。が帰るまではしっかりとっていました。神様が憐れんで下さってすばらしい力を与えて下さったことを見せていただき、主に信頼し従って行きたいと願っているときには、どんな力でも神様は与えて下さるといふ信仰を与えられ今日まで支えていただいています。

平成三年六月四日に入院しましたが、その時も主の導きで、

堤先生をとおして萩原中央病院に送っていただき、以前は入院するのを嫌がっていましたが、その時は素直に受け入れました。主人は「『あなたの荷を主にゆだねよ。主はあなたをささえられる。主は正しい人の動かされるのを決してゆるされない』という御言をいただいたから、今からの生活の中で自分の上にどんなことがあっても、主の栄光だから何も心配することは無い」と、本当に平安そのもので病院に行きました。

それからの病院生活は、「ぶどうの木」の中で「病床日誌」として書かせていただきましたが、最後のときは、灯がすうつと消えるように静かに息をひきとっていつて、私は心の内に本当によかったなあ、天国に行ったんだなあ、私も行けるんだと思うと感謝が溢れてきました。

次のご聖日のときに、主人がいつも前の席にいましたので、どうしようか、ここで前の席に出なければ私はダメになるかもしれないと思っていたとき、榎本民子姉がさしかかって「前に行こう」と後ろから背中を押して下さって、座った所が最前列のいつも主人が座っていた席だったので。礼拝が始まり祈りの時が参りましたが、その日はお祈りして下さる方がどなたもいなくて、無言の静かな時が過ぎました。今日はどうしたのだろうか、何時も真つ先に祈られる三好兄も今日はお休みらしい。どうして！段々私の心が騒ぎます。それでも

まだしーんとしています、私はこんなこととは思っていませんでした。主よ私がお祈りしなければならぬのでしようか？それならば今、力を下さい。もうどきどきしながら心で叫んでいました。祈りなさい主人も口を開きなさいと言っているようで、つい「天のお父さま」と言ってしまうました。主が勇気を与えて下さり、自然とお祈りが出て、それからご礼拝のお祈り、そして前の席で御言を聞かせていただくお恵みを今味わわせていただいています。

家でも、主人がいないという実感はあまりなく、お祈りをしているときも聖書を読んでいるときも、イエス様が共におられる、主人もそばにいる、だから一人暮らしですけど少しも寂しいどころではありません。素晴らしい人生に入れていただき、天国目指して喜んで歩かせていただき、恐れも無く、また教会の近くに住まわせていただき教会中心で生活できることが感謝でいっぱいです。主とお交わりしているときには主人もそこにいます。弱い私ですけど、先生方のお祈りと皆様方のお祈りに支えられ、また皆様方には色々と助けていただき、このように記念のときをもたせていただき、感謝させていただきまして、有り難うございました。

(榎本 師)

野村さんが祈り深くして、絶えず祈っていらっしやうと

いうことは、私もよく存じています。またそれだから、ああいう生涯をお送りになることができたんだと思います。祈りは呼吸、息なんですね。呼吸が止まったらおしまいなんです。絶えずお祈りして主とお交わりを持つているとき、主が力を与え全てを支えて下さるのですね。だから、理性が混濁した時でも主が共にいて支えて下さるから、恐れず主と交わりを持つこと、これが勝利の秘訣ではないかと思えますね。それにはしばらくの訓練の時が必要です。初めからお祈りができるようになれば良いのですが、そうはなかなかできません。

私が野村さんと一緒に生活していた頃、朝五時半からの早天祈禱会でしたから、遅くとも五時にはもう起きてきてお祈りします。もっと早いときは四時半頃から起きてきて多くの方々のためにもお祈りします。また集会に出て祈り、集会が終ってまたお祈りします。そういう生活をして参りました。夜は夜で皆で心を合わせて一緒に祈る場合もあるし、一人で祈ることもあります。朝から晩まで殆ど祈りづけといますか、そういう中で訓練されて身についていったんじゃないかと思えます。

それで「敬虔を修行せよ」と聖書に書いてあるけれど、野村さんのお証しを伺って、やはり神様が祈れとおっしゃるのは神様の求められることで、これはこちらからお祈りの口を切って祈って近づいて行かないと、主はすぐそばにいて下さ

るけれどもこちらが信仰を持ってないですね。こちらが絶えず祈って主とお交わりを持つていると、他のことは忘れても、主が何と言われているのか、すぐ主の声に耳を傾ける姿勢ができてきます。

それですから、野村さんが色んな中を通られたけれど、絶えず主のみ旨を伺い、自分の思いではない、主は何とおっしゃっておられるのか、何時もこの姿勢が野村さんの中にあつたのではないかと思えます。

ですから、お家にいらつしやる時は弱い中で壊れた人形みたいであつても、主に立ち返ると全て変えられたというのは、そういう点は私はあると思えますね。

私共が絶えず話しているときは健康状態の良いときで、話が途絶えているときは一寸体調が崩れたとき、疲れたとき、そんな時ではないでしょうか。それと同じように神様との交わりが遠のいて欠けてくると、力が抜け何かギクシヤクしてくるのですね。そういう意味で、祈り深くしていらつしやつた野村さんのうちに絶えず聖霊が働いて下さつて、肉体が衰えてもなお魂は絶えず主によって生かされていらつしやつたのではないのでしょうか。

私共は、先ず祈ることと聖書を読むこと、これだけはどんなことがあつても欠いてはならない。事があればあるほど、祈り深くして行かなくてははいけない。忙しければ忙しいとき

こそ、その中で祈ることです。私共も、そういう中で生活させていただいて本当に素晴らしいと思います。祈っても祈らないでも同じではないか、という気持ちになってきたときは、段々力が抜けてきますね。そういう意味で野村さんは神様との呼吸の中で生活していらっしやっただと思います。

では讚美歌 三一二番を讚美しましょう。  
身体の弱った時この歌は非常に支えになります。

### (野村仰一)

今日は父の記念会のために皆さんお集り下さいまして、本当に有難うございました。

父の思い出ということで、まあ私もいろいろ考えまして、「ぶどうの木」に何か書けたらと思いましたが、筆不精なものですからあれこれ思っているうちにもう五年も経ってしまいました。

今振り返ってみますと、父と何かじっくり話し合ったといった記憶が私にはあまり無いんですね。父自身も、自分のことはあまり話さなかつたと思います。だから父の若かつた頃の話など勿論聞いたことも無いので、榎本先生のお話しかを通して、ああそうだったのかと知るような感じで、父がどんな考えでどんな生活していたのか、若い頃病気をして大手術をしたことは聞いていましたが、救いに至るまでの経過

などはあまり知りませんでした。

父が身体を悪くして仕事を辞めて、家にいるようになったのが丁度私が高校に入った頃だつたと思います。だから、父が家に居て一緒に過ごした時間というのは、私には割合沢山あつたわけです。特に私が高校を卒業して大学に進学するまで、二年間もぶらぶら遊ばせてもらったわけですが、その間姉妹は勤めに、学校にと出かけていますし、母も勤めで不在ですので、家に居るのは父と私と二人だけでした。しかし、

男同士で家に居てもそれ程話すこともありませんし、一寸照れくさいと思うこともありました。父はどう思っていたか分かりませんが、私の生き方に対してあれこれ意見したりすることもありませんでした。その二年間というものを振り返れば、本当に好きなように過ごさせてもらい、勉強も思うように進まず、友達と遊んだり好き勝手な生活をしていたそんな私に対して、父はひと言も小言を言ったりすることはありませんでした。今になって思えば、親には解らないだろうと思つてしていたことも、全て解つていて、その上で父は真剣な祈りをもつて日々祈り続けてくれていたのだということが解ります。

若い頃は親に反抗したいとか、親を乗り越えて見せるとか、いろいろな思いを持つこともあるかと思いますが、私は父に対してそんな感情を持ったことは有りませんでした。今思え

ばやはり乗り越えることなどできない父親だったと思います。ようやく大学進学が決まって東京に行くことになったときも、多分わが家の経済状態では大変だったのだと思いますが、よく行かせてもらえたなと言う気がします。それもやはり、父が事々に神様に祈って信頼していたからだと思います。

私が東京に出て一人で生活するわけですが、そのことについても、家庭の事情とか親の気持ちとか、そういうことは何も言いませんでした。けれど何か伝わってくるものがあつて、私自身、それほど真面目な学生生活を送っていたとは言えませんが、父が祈ってくれている、父は黙って自分を送り出してくれた、そういったことを考えると、決して無謀なこととは出来なかつたんですね。自分自身でブレーキをかけたというよりも、陰で祈っていてくれる人がいることで、自分の生活をきちつとして行かないといけないと思わせられました。

榎本先生が、戸畑に学生として来られた時のお母様のお話しをしておられましたが、それと同じようなことを考えさせられました。

夏休みなんかで帰りますと父は大変喜んでくれました。そこで東京ではどんな生活をしているのかとか、そんな話しはしません、話さなくても喜んでくれるということが何となく分かるんですね。

また、丁度私が大学を卒業する直前だったと思いますが、

柘植先生召天五十周年の記念聖会が渋谷教会でありました。その時父が上京して来まして、私の下宿で二、三日ほど一緒に過ごしました。その時もあまり話はありませんでしたが、私の作った料理を食べて、父がとても喜んでくれたことを懐かしく思い出します。

父とはそんな関係でした。母が言っていましたように、父は静かな中にも、いつも祈っている姿が焼きついていて、この人は祈りによつて支えられているんだなあと感じることもありました。

讚美歌八七番は、私達が子供の頃から毎日の家拝の時必ず歌っていた讚美歌ですが、

「めぐみのひかりは わがゆきなやむ  
やみ路を照らせり 神は愛なり」

人間的には不幸な暗闇の中を過ごす生活だったかもしれない父が、神様の恵みの光に照らされたとき、神様のご愛を心から感じ取つて恵みに満たされた生活をしていて、その姿を見ながら育てられてきました。そんな父の姿を見ているうちに、段々と、この人はこういう生き方をしているんだということ、小言ではなくその姿で教えられました。

平成二年の終わりに肋骨を二本骨折し、その後平成三年と次第に弱つてきて、それまでは子供に弱いところを見せるようなことは無かつた父ですが、何となく子供に甘えると言



ますかそういう弱さも見せられ、弱いからこそこのような歩みをしてきたんだなということも教えられました。

最後のときも、母も父が天国に帰って行くのを喜んだと言っていました、私も不思議と悲しいという思いはなくて、よかったなという穏やかな気持ちだったことを思い出していきます。

最近、私の子供たちに、おじいちゃんのことでも何か思い出はあるかと聞いてみたところ、父が亡くなったとき、まだ小学校に上がる前だった下の娘（理恵）が、おじいちゃんに自分がランドセルを背負って小学校に上がった姿を見てもらいたかったと言っていました。この子は孫たちの中でも一番年下ですから、おじいちゃんの思い出はそんなに多くないと思いますが、この小さな子にも、父の歩みを見せてあげられたことが感謝であったと思います。

五年が経って、記憶が次第に遠のいて行く中であって、もう一度父の歩みを思い起こし、父自身も言っていたように、死んだ犬のような者を守り導いて下さる神様がいらっしやることを新たに記憶させていただいて、心から感謝いたします。

#### （榎本師）

野村さんの若い時は、丁度仰一さんを見るような思いがします。瓜二つと言いますか、野村さんは本当に従順な穏やか

な方だったんですね。ですから、言葉で怒られた記憶が無いということは余程穏やかなことであって、野村さんがイエス様の救いにあずかって祈り深くしていらっしやたので、自分で怒るより主が働いて下さる、主が守ってくださいと、その信仰があつたから仰一さんも何も荒い言葉でなくて、穏やかな孝行息子であつたんだと思いますね。

#### （野村仰一）

私自身は決して穏やかな性格ではなく、むしろ短気で直ぐ大きな声を出して子供達を怒ってしまったのは、父の姿を思い出し、これじゃあいけないと反省したり、そんな者です。

#### （榎本師）

そんなに似ている仰一さんが、自分のことになるとそう言われませんが、やはりお父さんが祈り深く主に信賴し、子供達は私の子供でなくて主の子供であるという気持ちで常に祈りの中に育てられたと思います。非常に子好きだったんですね。だから仰一さんの怒るのは子供が好きだからと私は思います。福岡におりますとき、折滝先生の子供さんが七人おりました。そのお守りは殆ど野村さんがしたと言っていてよいほどです。また、声が良いし歌が上手だったんで、よく子供さんを遊ばせるのに歌を唄っておられました。私はその傍で野村さん

の美声を聞かせてもらっていました。「かやの木山」とか童謡とか唄っていると、子供さんはスウスウ寝てしまうのですね。そう言う特技を持っていらっしやった。

最後まであの張りのある声で讚美歌を唄っていらっしやった。いろいろな問題の中も、あの歌声で讚美歌を唄いながら乗り越えてこられたのだとしみじみ思います。



(上島 南明)

今日は野村先生のためにこうして大勢の方がお集まり下さって心から感謝いたします。

私は野村先生とは本当にいろんな面で教えを受けた者の一人でありまして、いつも野村先生から言われた言葉の中で「我が愛にいなさい」、神様の愛にいなさいと言うことをいつも教えられました。

最初の頃は神様の愛におることとはどんなことか解らなかつたんですね。私の魂の中に入ってなかつたのです。それで私は、野村先生がどうしてこんなに神様の愛の中にいられる

のだろうかと、その目をみるたびに引きつけられるような優しい目をし、言葉一つ一つが懇ろな優しい方だったんですね、どんな時にも優しく接していただきました。そしてイエス様の御言を信じて歩むときは常に主が前に立って下さって愛を施して下さいました。

私達家族はよく野村先生ご夫妻と旅行に行かしていただいたんです。それが私達の写真の中に沢山あります、子供達にとつてこんな大きな財産は無いんですね、私達の宝です。

そして野村先生がいつも話して下さいしたのは「いつもイエス様を見つめて行って下さいよ、イエス様はあなたがたを愛して下さいます」と、励まして下さいました。

今日、うなぎをいただきましたが、野村先生が入院なさつてかなり悪くなられて、もう食欲も殆ど無くなっていらつしやたんですね。その時「お父さん何か食べたいものはないですか？」と言いましたら、もう食欲も無いといわれたんです。「うなぎなんかどうですか？」と言いましたら「うん」と言われましたので、恵三さんと二人で黒崎まで行きまして、まだ開店前だったんですが無理に頼んで焼いてもらって、それを本当に美味しそうに食べていただいたのが昨日のように思い出されます。

私は二十二年位前に皿倉山の頂上に野村先生と一緒に河内から登ったことがあります、その時はまだ先生がかつて肺

を手術したことがあるということ存じませんでしたので、野村先生にその話を聞いてぞっとしたことがあるんです。皿倉山の直線コースは我々でも大変なのに、野村先生はニコニコ笑って、じゃあ登りましようかと言われたんですね。そして一緒に登ったんですが、あの頃は本当に小さな身体でお元気な方だと思いました。そしてその中でいろいろお話を聞かせていただき、お苦しみの中を歩いてこられたことを知りました。その中の一つ、

「上島さん、肺結核になって不治の病と聞かされたある人が、神様からお告げがあったと言い『墓場に行つて棺桶の中にある水を飲んだら生きられるんだ』と、そして本当に墓場まで行くんですよ。神様を知らない人はそんなことをしてまでも生きたいんです。でもイエス様を知ったらそんなことは無くなる。イエス様の愛の中におればどんな病も癒され、恐れも取り除かれるのです」。

私はその話を聞かせていただいたとき、ああ神様の愛の中にいるということは、主に對しても何に對しても常に平安であることだなと教えられました。

皆さんと共に野村先生を思い出すことができましたことを心から感謝致します。

(上島 恵子)

父が亡くなりましたしてもう五年、すごく早いなと思っております。

今日はこうして、父の記念会に沢山の方が集まって下さつて感謝の時を過ごせますこと、有り難うございます。

私達もこの五年間いろいろなことがあつた中で、本当に父が残してくれたこの尊い遺産を受け継ぐ者としてようやく目が開かれ、主のご愛と憐れみとを心から感謝する者と変えて下さつたと知らされています。こんな者のために主は十字架にかかつて罪を贖つて下さつたという、ただ一方的なご愛を感謝いたしております。

父の思い出と言えば、弟が言つたように本当に穏やかな人で、怒られたりしたことは余り思い出せません。ある時私は父に褒められたことを思い出します。私は四人兄弟の真中だったので、何かにつけ立場が悪かつたように思っていましたし、また私は本当にお転婆で元気な子だつたと思います。妹とか弟にお友達が遊びに来るのですが、今は用事があるからと断つたりすると、私が遊んであげたりしていました。

私達がまだ小学校低学年の頃、我が家で日曜学校をしていました。日曜礼拝が終つて帰宅してからですから午後二時くらいだつたと思います。父が「お友達を誘つてきなさい」と言うので、私は何のためらいも無く「日曜学校においで」と言うつて毎週誘いに行きました。ある時私がいつものようにでな

く一寸ずつついて出かけようとしたとき、父が「あなたがしていることを神様が喜んで下さっているのだよ」と言ってくれました。いつも褒められていたわけではないのですが、ぼつんと言ったその言葉に私はひどく励まされました。

小学校六年生の時のクリスマスは、前田教会と合同で八幡市民会館で行われ、私達小さな群の子供達もともに参加させていただいたことを懐かしく思い出します。

父はオルガンが上手ではなかったけれど和音で弾きながら沢山の讃美歌、聖書のお話、御言を教えてくださいました。

母がいつもアメ玉などを用意してくれていたもので、終わったら皆それを貰って帰るのを楽しみにしていた、そういう日曜学校の思い出が蘇ります。

また、狭い家で六人がひしめき合って生活していたのですが、毎朝の祈りのために静まる場所も無く、そばで私たちが学校の準備などで騒々しくしている中、縁側の庭に向かって戸を開け祈っていました。どんな時でもその姿勢は変わることもなく、神様の前にいつも祈り、御言に従った父であったなと思います。

それから、平成一年一月十五日に父がここでお話しをさせていただいたことを思い出します。

それはイザヤ書四六章四節、

「わたしはあなたをたの年老いるまで変らず、

白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。

わたしは造ったゆえ、必ず負い、

持ち運び、かつ救う。」

この御言どおり、神様は父を最後まで責任を持ってお守り下さった。父もこの神様に全てをお委ねし信頼しきって歩んだ人だと思えます。私達もこの父の歩みにならって、やがて主のみに立つとき、主に仕え主を喜ぶ生活を、そして父の待つ天国へと導かれる者になりたいと願っております。ありがとうございます。

(榎本 師)

野村さんが晩年ご用をして下さった海老津の家庭集会の会場として責任を持って下さった正野さんに一言お願いします。

(正野 真宏 兄)

野村先生が亡くなられて丁度五年と言うことですが、考えてみると私の母が平成三年三月に亡くなりましたので、同じ年だったのだなと改めて思い出しました。

今榎本先生が言われましたように、野村先生が本当に長い間、海老津の集会を毎週水曜日に持たせていただきました。

今ちよつと、母のことを書きました「神は愛なり」を見ていて、集会が始まったのが昭和四十四年くらいですから、多

分二十年近く続いたのではないかと思います。最初は榎本先生が来ていただいて毎月一回から始まりましたけれども、途中から野村先生がずっと毎週水曜日に来て下さって、続けて集会をしていただいたことを心から感謝しております。

野村先生と私、お交わりさせていたただいて感じますところは、自分の弱さと言いましようか、身体の弱さもあつたかも知れませんが、魂の弱さを心底知っておられて、その中でイエス様の十字架によりすがっておられた、何かそういう姿とどうか信仰が、私自身が自らの弱さを感じて思い悩んだことがあるんですけど、そう言う意味で野村先生には親近感を持つていつも私自身大変励まされております。

また、神様の前にも人の前にも大変謙遜な方で、私達のような若輩者にも本当に優しく接していただく、ある時は敬語を使われたことがあり、恐縮することが度々ありました。神様の前に非常にへりくだつたお方だなと常に励まされた記憶もございます。

海老津の集会で、鈴木のおばあちゃんや能美さん、なかなか礼拝に出席出来ない方々が非常にこの集会を楽しみにして来られてまして、他の方々も何人か起こされて来られました。また両親も本当に神様のご用に加わらせていたただいて、良きひとときだつたなと思ひ起こしております。

神様の前に善かつ忠なる僕と、イエス様から野村先生はご

褒美の義の冠をいたただいていらつしやるのではないかと思つております。

私達も野村先生の足跡を踏みしめて歩いて行きたいと願つております。

今日は本当に有り難うございました。

#### (広田 寿兄)

お恵みいただきました美味しのお弁当をいただきながら、講壇から話しかけられる野村さんのすき通るような大きな声を、お恵みのお証しをお聞きしておりました。本当に、この場に今も立つておられるような気がしております。

八十年の信仰生涯を全うされました野村さんでございました。折りの人であつたということは前にも申し上げましたし、今も沢山の方のお話しがございました。いつも本当に穏やかな静かなお方でありました。これは主によつて心砕かれた方の姿であろうと思ひます。

話は変りますが、ベレー帽のよく似合うおしゃれな方であつたと今思ひ出しております。

色々なことがありますときに、主を見上げることは勿論でございますが、先ほど言いましたように、生きてそば近くにおられるような良き先輩のお手本が先を歩いて下さいましたので、野村さんがおられたらこんな時どうされるだろうか、

そんな思いにかられます。そしてよき先輩として身近に覚えながら、み名を崇め感謝致しております。

残された生涯を野村さんにならって歩きたいものだと思っております。奥様はじめご家族の皆さんが信仰を受け継いで、今も証しにありましたようにお従いして歩いておられますこと、本当に感謝でいっぱいでございます。どうか主の祝福が豊かにありますようにお祈り致します。

#### (筑山文彦兄)

私は学校が福岡商業学校で、野村先生は先輩になりますので、最初は知りませんでしたけど、ある時それを知りまして、何度か度々お尋ねした時期がありました。

私が商業学校に入学するための受験をしたとき、母が祈っていたかどうかというお願いに行つて、そして一生懸命に祈っていたと聞いたことがあります。

書が上手なことは皆さんご存知のとおりであります。先生の書を見るたびに、その中に先生の性格や真面目さがよく出ているのを拝見いたします。

沢山お世話になつておきながら、何もお報いすることができなかつたことを悲しく残念に思うことですが、ありし日の面影と信仰をたどつて、主にお従いして行きたいと願つております。

#### (檀本師)

子供のときから野村さんを存じあげていた和義が今日来ていますので、何か野村さんについての思い出を。

#### (檀本和義師)

野村先生が亡くなられてもう五年になるということで、私は本当に時の流れが非常に早いなということを思わされておりますが、野村先生の告別式以来、記念会に出たいと願いつつ、なかなか福岡の方とのスケジュールが合いませんので、出席できないでございました。今日は凶らずもこの祭日ということで、私も時間をもらうことができました。こうして皆さんの思い出を聞かせていただいて、本当に感謝しております。

野村先生を最後に私が元気な姿でお会したのは、伝道会の後で、ちょうどオルガンの二つ目位の椅子に蹴躓きましてね、大きな音を立てて転んだんですね。その時が最後だったと私は思います。

それからご自宅で療養なさつたり、その後体調を崩され入院されたりということ、なかなかお見舞いにながりたいと思ひながら出られなかつたことを非常に残念に思うのです。もう一度元気になられると思ひつつ過ごしてしまつたことを非常に残念に思います。おそらく、あの伝道会の時に胸を打

たれて肋骨を骨折なさったのがきつかけとなつたのだろうと  
思うのですね。その意味においても、何か残念な思いがする  
わけですけど、しかしそれも神様の大きなお取り計らいの  
中であつたことと思ひます。

福岡に、野村先生が戦前にキリスト伝道館におられた時の  
ことを知っておられる方がおりまして、その方の話しを伺い  
ますと、—その方がお姉さんに連れられて、今は八十一歳に  
なつておられますが、その頃はまだ二十歳前後で独身だつた  
わけですが、—その方がよく言われるんです。「野村先生は  
美男子だつたよ」と言うんですね。玉子をむいたような肌白  
の、目鼻立ちがくつきりしていて、自分は教会に行くのが余  
り好きでなかつたけれど、野村先生に会うために行つたんだ  
と(笑い声)。それから戦争になつて、自分はしばらく教会に  
行かなくなつてしまつたということを言つておりました。

その頃、私の父と野村先生は、まことに対象的だつたよう  
でありました。榎本先生は色が黒くて気難しそうで、野村先  
生は丸顔で色白で本当に優しく、もう若い人の憧れであつ  
たと：(笑い声)。さもありませんかと思ふのですね。野村先生が  
先ほどダンディでベレー帽の似合う方という話がありまし  
たが、本当にいろんな意味においてモダンな方だつたと思  
ひます。

それと、皆さんが持つていらつしやる思い出と同じであり

ますけれども、非常に優しい方でいらつしやる。物静かな方、  
性格的にもそうだつたんだと思ひます。やはり神様の恵みに  
与かつて、救いに与つて、本当に謙虚な方でいらつしやつた  
と思ひますね。

私も非常に印象深く思ふのは、野村先生がいつも自分を『死  
んだ犬』と、あのメピボセテの記事がございませうけど、その  
箇所をよく引いて、ご自分のことをそのように例えていらつ  
しやつて、そういう者を神様が憐れんで下さつてゐるという、  
その恵みに絶えず生かされておられたことを思ひます。

非常に謙虚な、控えめな方だつたと思ひます。ですから、  
私も度々接しておりましたんですけれど、何かいわゆる強烈  
な、大きな事件とか出来事を共にするというようなことは殆  
ど無かつたように思ひます。と言ひますのは、その時代に高  
木さんとか伊規須さんとか、あるいは東さんとか、若手  
の方々がおられます。それぞれ個性が非常に強い方々で印象  
深いですんですね。ところが野村先生については非常に静か  
で、何と言ひますかあまりご自分の存在を目立たせない、そ  
ういう方だつたなと思ひますね。そしてとても優しく、私  
達が話しかけて色々な議論になつても決して言い返さない。  
あるいは説得しないで聞いてくれる。そして受け止めて、聖  
書の言葉なり聖書からのご自分の教えられていることを付け  
加えて下さる。議論して口角泡を飛ばすということはない。

他にはそういう若い人が沢山いましたから、野村先生はそういう意味において非常に静かであった、優しい方だったと思います。

ところが私の記憶によりますと、その優しい方が非常に強い面がある。何かと言いますと、戦後しばらく食糧難が続きました。私共が子供の頃、家に鶏を飼っておりました。卵を産む間は大切にされますけど、産まなくなりまして、これは当然食卓にのぼるわけです。だいたい父が絞めるとき、——いわゆる殺すわけですね、誰に頼むわけでもないのですけれど、どういう訳か野村さんに声がかかるのです。そうすると、野村さんは非常に上手なのです。鶏に一声も鳴かせずに、すっと安楽死させる(笑い声)。そして後をきれいに処理して下さる。そのときに血を出すんですけど、死んだばかりの鶏の血を盃にとって「これは身体にいいんですよ」、そう言つてクツと口に入れなされる(笑い声)。私はそれを見ながら、到底太刀打ちできない強い方なんだろうと思ひました。それから後は、野村さんを囲んで鶏で焼きが始まるわけです。私は到底食べることはできません。食べられなかったのです。ところが野村先生は「おいしい、おいしい」、そう言つて喜んで食べていらつしやつたことを思い出します。それからもう一つは、やはりその時期だったのですけれど、ウサギを家に飼つておつたんですね。食事が乏しくなつてお

りましたから、それを食べようということになって、今は皆さんウサギを処理することはまずないんですが、その時もやはり野村先生にお願いしたんです。野村先生は喜んで来てくださつて、全部処理してくださつた。そして一緒に食べたのです。私は勿論食べません(笑い)。

まあ、野村先生のあんな優しいところに、どういふこんな強さがあるのかと思ひますけれど、本当に神様がそれぞれ賜物を与えて下さつてゐることを思ひますね。そういう思ひ出が非常に深くあります。

他にも色々あるんですけど、私はそういう野村先生の優しさとして内にある強さ、それは恐らく信仰によつて与えられたキリストにある強さだと思ふのです。

先ほど正野さんがおつしやつたように、本当に自分の弱さをよく覚えて知つてゐる方、自分が汚れたものであり、罪人であることの姿をよくわきまえて、そして神様の恵みに与つて罪許され、生かされているという喜びと感謝を持つておられた。謙遜と感謝の人であつたというのが、私の非常に大きな印象です。と言いますのも、野村先生が何か自分の事情、境遇、事柄について、つぶやいたり嘆いたり悲しんだりというのを一度もお聞きしたことが無いんですね。いつも喜んで感謝しておられた。このことを私は本当に心に刻み込まれております。



伝道会の後で胸を打って骨折なされた時も、本当にまあ余程気の毒だと、私は申し訳ないと思つたのですね。集会が終つて、オルガンの上に今花がありますが、あの花を教卓の方に動かそうとした時ですね、花を取つてちよつと足を後ろに引いた瞬間に、足を引く掛けて転んじやつたんですね。あのとき野村先生があれをしなればよかつた、私がそれをしてらよかつたのではないか。傍にいたものですから気になつて仕方が無いんですね。でもそのことを決して野村先生は、つぶやいたり不平におつしやつたことはありません。むしろ感謝しておられたことをお伺いしたときに、深く私は野村先生の心にあるものが何であるか、その思いを教えられた気が致しました。

このことを私自身いつも思い出しては、謙虚と感謝の人であつたその姿をいつも思い浮かべて、自らの歩み方の鑑といえますか教えとして心に置いてある次第であります。

今日はどうも有難うございました。

### (追記)

和義先生が言われた、主人が骨折したときの伝道会は平成二年十二月二日のことでした。私は、佐世保の甥の結婚式に前日土曜日から出かけていたのです。主人を置いて行くことはとても気がかりだったので、大丈夫だから行ってきな

さいと言うので、お祈りして出かけました。

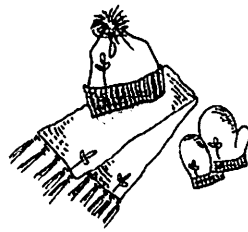
土曜日の夜、電話して元気であることを確かめ、日曜日の式が終わつて、弟達はめつたに無い機会だからもう一泊できないかと勧めましたが、それはできないと帰路につき、夜八時に帰宅しました。ところが主人の帰りが遅いので余程話し込んでいるのかなと思つたり、少し心配したり、お祈りしようとしたところ、林兄の車で送つていただいて帰つてきた主人はちよつと元氣無く、転んで胸を打つたと言いながら、そろそろ上がつて来たのです。皆さんに心配をかけてしまつて、私が打つた箇所を見ると骨折していることが分かりました。私が行かねばよかつた、そしたらこんなことにならなかつたのにと、瞬間そんな思いが頭を走りました。

「お父さん、骨が折れていると思うよ、病院に行こうか?」  
でも今晩は遅いから、明日まで我慢できるね?」

主人は、明日でもよい、寒くはあるしと、家にあつたシツプを貼つて眠れない夜を過ごしました。

私がいればよかつたねと言えば、全ては神様から出たことだから、神様が癒して下さるよと言います。唯々神様に望みを置いて待ち望むだけです。ところが骨折は以外に早く繋がりました。しかし、コルセットを締めるのが苦しくて緩めにしていたのと、先生から立派に繋がっていますと言われた途端に外してしまつたので、次第にずれていったようでした。

しかし、そんな状態でも平成三年のメッセージを書かせていただいたとき「イエス様は例年よりさっと書かせて下さったよ、一度で書くことができたから楽に書いた、主はすごい力を下さるね」と、とても喜んでおりました。



(久保田 宮子 姉)

戸畑教会から参りました久保田です。いつもお世話になっていきます。

膝を悪くしたものですからどうしようかと思っていたのですが、今日は野村先生の記念会に出席させていただきまして本当に有り難うございました。これから私達も野村先生の足跡にならって歩きたいと思っております。

有り難うございました。

(林 正二郎 兄)

今日は、野村先生の感謝会に出席させていただいて、有り難うございました。

先生の思い出と言うと、教会に来られる途中で何度かお会いしたことがあります。ベレー帽をかぶって、ちよつと前屈みで、いつもニコニコしながら歩いておられた姿を思い出します。素晴らしい笑顔に絶えず接し、先生の姿を拝見するだけで、こちらが恵まれてくるような感じがしておりました。見かけは細くて、風が吹いたら倒れるのではないかと思うようでしたが、講壇でのお証しの声といい、讚美されるときの大きな透き通った声といい、本当に素晴らしい。先ほど奥様がおっしゃっていましたが、歩いて教会に来るのが大変な状態の中にあっても、講壇に立たれたときの青年のような姿に接することがありまして、私たちも強められたことがあります。

もうひとつ思い出として申し上げますと、いつ頃かは忘れましたが、夏の暑い時期の伝道集会でした。そこで讚美した三七二番「額に落ちる玉の汗」という讚美歌を野村先生の素晴らしい声で初めて聞いたとき、こんな讚美歌があったんだなあと思つてとても好きになり、家にある古いピアノで、我流ですがその讚美歌を弾いていました。特に夏になると「額に落ちる玉の汗…」を思い出し、先生も信仰の面で天国に行

かれるまで、額に汗しても神様に従って行かれたのではない  
かと思つて、その讚美歌を是非ここで皆さんと一緒に歌わせ  
ていただきたいと思つています。

(讚美歌三七二番を讚美)

(飯田 美紀子)

今日は父の記念会に集まつていただき本当に有り難うご  
ざいました。皆さんから色々な父の思い出をお聞きしまして、  
私の知らない父のことを聞くことができたのも感謝のひとつ  
です。

父が亡くなって五年になると、自分の生活も忙しくて、そ  
の思い出が次第に消えてきたりするのですが、そんな中はず  
きり覚えているのが、昭和二十六年でしたか、父と日曜学校  
に来ていて帰りに大洪水があつたときのことです。

来る時は電車でしたが、礼拝が終つて帰る時には電車は通  
つていませんでした。帰る手段も無く歩いてるとき、尾倉  
町のあたりでしたか、皿倉山の方から水が川のように流れて  
いる所を父がしっかり手を引いてくれ、渡れない所は背負つ  
てくれて中央町まで歩いて、それから牧山の方まで西鉄電車  
のレールの道を、枝光あたりからは山手を走っているので電  
車道の中を歩くのは大変困難でしたが、ずっと二人で歩きな

がら帰つたことが、今でもすっかり頭の中にあるのです。そ  
の時は小学校の一年生くらいでしたが、父が一緒にいると  
いうことだけで何も不安も無く、ただ一生懸命父に手を引か  
れ、すがりながら帰つたのですが、今考えると途中の牧山の  
あたりで崖崩れがあつたり、不安な中で父が祈りながら連れ  
て帰つてくれたんだなあということが思い出されます。

色々思い出はあるのですけれど、私が結婚して東京、千葉、  
横浜と関東の方に十年近く居たとき、私だけが郷里から離れ  
ておりますので、何かあるとすぐ父に電話したり、祈りを求  
めたりしました。主人は航海中全く家に居ないので不安なこ  
となどがあるとよく電話していましたが、そのたびに父が何  
通も何通も手紙をくれて、最初には必ず御言があり、終わり  
には主に依り頼みなさいよ、と書いてくれました。手紙を読  
みながら、子育て中、主人が航海中で居ない時、色々な中で  
私も父の祈りと励ましに力づけられながら過ごして来たなど  
思います。

また、父の召された日が主人の誕生日と一緒に、同時に思  
い出し忘れることは無いので良いことだと思います。

「無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである  
(ルカ一〇・四二)」。父は名誉も地位も財産も何もありま  
せんけど、この御言という大きな遺産を私だけでなく家族に  
残してくれたと信じ、これからも信仰をもつていきたいと思

っております。

(中村光恵姉)

今日はどうも有り難うございました。

野村先生の思い出は、まず信仰の厚い先生であったことと覚えます。そして本当に謙虚な方で、私達からみたら雲の上の人のような信仰の厚い方と思っていたのに、先生は「弱い私を主は愛して下さった」と、いつも謙虚におっしゃっていました。あの謙遜は私達も見習わなくてはいけないなと思います。

我が家の宝物、「神を敬うことを自ら修行すべし」という掛軸をいただいて、朝夕それを眺めては神様の前に謙遜に従っていくことを思い、励まされつつ、野村先生を偲んでいきます。

そして皆様が先生の素晴らしい証しをして下さって、私も振り返ってみますと、まだ私が西南の生徒であった頃、青年会で昔屋にキャンプに行ったことを思い出します。海水浴場の方で泳いでいたら、どこのお兄ちゃんか知りませんが変な人が来て何かチョッカイをかけたのですね。それでここは危ないから向こうの方に行こうと言うので、海水着を着たまま、六角堂というのがあったのですが、その向こうにはきれいな砂浜があるのでそこに移動しようと言うことになり、

テントもたたまず皆で端の方を持ってぞろぞろ歩き出しました。

「まるでイスラエルの民がエジプトを出て行くようにあるネ」などと言いながら目的地に着いて、またテントを張ったんです。

皆はそれから遊ぶことに夢中になって食事の用意をする人も誰もいなく遊んでいました。お腹がすいたと言いながら帰ってきたら食べる物が何もなかったのです。

そしたら「皆がお腹をすかして帰って来るだろうと思ってご飯を炊いていたよ」とおっしゃって下さったんです。

皆は「さすが野村先生だね」と言いながら喜んで食べたんですが、それが辛くて辛くて食べられないほどでした。海の水でご飯を炊いていたんです。そのかわり、味噌汁が甘くて甘くてとても美味しかったこと、お腹はすいているし、あんなに馳走はありませんでした。今も野村先生というと、あの塩辛いご飯を思い出します。

あとから野村先生も「あれは海水で洗って真水で炊いたら美味しかった」とおっしゃっていました。だけど私達は海岸から遠かったものですからお水を汲むこともしませんでしたけど、先生は本当に温かいご飯を炊いて下さったこと、今から考えたらもう五十年近く昔の話ですが、物の乏しいとき、野村先生があんなにして下さったとすっかり思い出します。

祈り（榎本師）

「彼死ぬれども信仰によつて今なおもの言へり」

愛する野村兄弟をとおして、あなたがこのように私どもの歩みを整えていただきましたお恵みを感謝いたします。

信仰がなくては神に喜ばれることは出来ないといひます。あなたが自身を信頼して、馳せ場を尽くして参りました野村兄弟の足跡を踏んで、信仰から信仰へとあなたにお従いして歩み行かせて下さいますようお願い致します。

格別ご遺族のお一人お一人のうえに、上からの豊かな祝福を満たし、栄光を表して下さいようお願い致します。

尊きみ名によつて感謝してお願い致します アーメン。



### (3) 主人の思いで

野村美恵子

はじめに

平成十四年四月十一日、榎本利三郎先生がお召されになる少し前、最後に入院された数日前のことだったと思えます。用事で一寸牧師館にお伺いしました。その頃は先生も大分弱っていらつしやつたので、すぐ帰るつもりでしたが、お上がりなさいとおつしやるので、応接にお邪魔してしまいました。その時先生は、何だか人が来るのを喜んでおられる様子でした。暫らくお話ししているとき、先生は突然、「野村さんの記念誌を作りなさいよ」と言われたのです。私は驚いて答えが出ませんでした。と言うのも、その瞬間大変なことだと思つたからです。そんな私に先生は「仰ちゃんにやつてもらいなさい」と重ねて言われました。その時私の思いの中に感謝が湧いてきました。私に与えられた主のご用なのだと。

先生は何かお命じになるとき、必ず「主のご用です」と言われます。私には何一つ出来ることはありません。しかし「知恵も力も神にあり」と、御言をいただいで、安心してゐるうちに、いつの間にか一年も過ぎ去ってしまいました。

この度、榎本和義先生にこのことをお伝えし、婦人会のお世話も退かせていただいて漸く一段階乗り越え、作業にかからなければと少し動き始めたところ、自分自身の首の故障などで、なかなかスムーズに運びません。兎に角、主のみ手におまかせしてその進行を導いていただき、やつとここまで参りました。今は少しあせっております。

#### 思い出の源

思い出について考えるとき、私はこの所に立ち返らなければ何も進むことが出来ないということがわかりました。

「義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。

あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り

出された穴とを思いみよ」 (イザヤ五一・一)

私が神様のみもとに来ることが出来たのは、主人との出会いがあつたからです。それが主のご計画の第一歩でした。戦後の荒廃した地がまだ広がる荒野の中、今の尾倉町に私の勤める青果市場がありました。私は戸畑から通勤していましたが、その頃一緒に勤めていたYさん(炊事のおばさん)が、あなたに良いと思う方が居るから会ってみないかと薦めて下さつたのです。クリスチャンと聞いていたので、一寸、私の方が大丈夫なのかなあと心配でしたが、きつと真実な人なのだろうと思ってお会いしました。彼の勤

務の都合で盆休みの時と決められ、昭和二五年八月十六日に初めてお会いしました。

その後、彼からの手紙、また私も手紙のやり取り等々がありました。ゆつくり話しの時間も無かったので、お互い理解を深めるためには文通によるしか無かった時代でした。考えてみれば電話も無かったことを今不思議に感じております。

その手紙の一部を私達の出発点の証しとして記させていただきます。

(手紙その一)

今晚も集会に出席されたことは、僕も大変嬉しく思いました。一寸だけ電車を待つ間にお話し出来ました。要する所、僕としては何等の不安も心配ありません。ただ、僕の方が心配されている方だろうと言うことは考えていました。しかし、貴女の気持ちも十分伺いましたので、もう何の問題も無いことと私は思います。僕としては、クリスチャンのはしくれで教会にも籍がある以上は、信者は信者との結婚をすることが本来から言えば正しいのであって、未信者とは男女とも結婚はしておりません。願うのは、貴女が本当に僕の気持ちを理解してくれて、信仰者として聖い正しい道と一緒に歩んでくれるならばと思つて、教会

にお出るよう勧めましたが、一もなく承諾してもらつたので大変良かったと思つたのです。豊かな環境とか良い事情であることも、また愛情あることも重大条件でしょう。しかしもう一步深く、精神的な結合と言うものは更に重大なものだと考え教えられて居ます。それで、どうしても貴女が信仰の道へ進まれることを僕は切に願うのです。そして後は、共にいそしみ励んで行くうちに、すべてを学び取ることが出来るでしょう。信仰の土台により築かれた家庭こそ強固なものであり、真の幸福、スイートホームだと思います……

(手紙その二)

今後については、色々と考えもあり理想もあると思いますが、前にも言った通り貴女が聖い信仰に立つて人生をスタートしてくれることが一番の僕の望みです。信仰なくして何の希望があり得ましょう。清き土台と強き信仰なくしては、何ぞ真の幸福があり得ようか。金銭でも地位でも名誉でもこの世の快樂をもつても、この平安と幸福とは買うことは不可能であります。お互いに助け合つて進めば、暗い時があつたにしろ、恐れることはないのです。しっかりとやりましょう。神のみ旨によりて結ばれるように祈つております。現実の神、生ける神は正しく我らに応え給うこと

を深く信じます。

こうして私達は、神様のご計画により交際を許されました。全くキリストのことを知らない私は少々の不安も感じました。私はそんなに立派な信仰の歩みが出来たのだろうか。

しかし、そんな私も、最初から教会の集會に出席させていただいたことと何となく教会生活に少しづつ慣れ、自然に主イエス様とのお交わりに入らせていただいたと申しますか、讚美も楽しい、集會のお話しも心に喜びが与えられる、本当に新しい人生の始まりを迎えることができ、そして二カ月後の十月十五日、結婚式を行っていただきました。

勿論それからの生活は集會を中心に廻って行きます。これは本当に素晴らしいものでした。時間的余裕はあまり考えられませんが、何か力強いものに引つ張られていくような毎日は、今までの生活とは全く違って感じられました。何故だろう、私はこれで良いのかなと、戸惑いを感じている私にとって、日曜日毎に回転する一週間のとても早いこと。そして各集會に合わせて生活の計画を立てて行くことは、めりはりがあつてとても良いことでした。以来何十年、この生活を続けさせていただいて高齢となった今、このリ

ズムに乗ってこそ、全ての中を神様の守りと導きとご愛に包まれて来たのだと改めて感謝讚美を致しております。

しかし、その当時はまだまだ何も知らない分からない私にとつて、大変だと思ふときも随分ありました。主に従うということがどんなことかもまだ分からなかつた私が決心したことは、主人が歩いている信仰の足を引つ張るようなことはしない、主人が言う通りに従つて行こうと、ただそれだけを心に命じたものです。

#### 愚かな女

こうして私なりに何とか頑張っていました。が、家族も増えていくにつれ、色々と問題が襲います。遂に言つてはいけないつづがやきが出てしまいました。そのとき主人は「愚かな女の言うようなことを言いなさんな」と言いました。私は一寸傷つきながらつい神様の前に不平、不満を言つてしまったことを悔いたものの、主人にとつては主の前に許されない、これこそが足を引つ張る要因であることだとわかりました。以来、愚痴やつづがきは消え去り、主によつて守つていただいております。私は大分後になつてヨブ記二章にヨブが妻に語つているところに同じような記事があることに気づきました。本当に愚かな自分を知ることが出来ました。



主人と共に歩いて四十二年、様々な中を歩きながら御言に励まされ慰められ、ある時は叱られることもあり、主のご愛に導かれ育てられて今日に至りました。

「主は言われる、わたしがあなたがたに対していっている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」 (エレミヤ 二九・一一)

計り知ることの出来ない主のご愛に包まれ、主のご計画に導かれ、今日あるを得させていただき、主人が召されて既に十五年も生活を守られてきたことを今改めて感謝を致しております。

(靈感賦二六・神の保護と佑助)

一 いまにいたるこそ 主のめぐみなれ  
まもりのみてをば などうたがふべき  
いかなるをりにも あいなるかみは  
すべてのことをば よきになしたまふ

二 たよわきものをば たすけいたはる

主エスのみめぐみ わが身にたれり  
さびしきのべにも にぎはふさとにも  
みちびかるるまま うたひつつゆかん

三 主の来りたまふ日 いとちかければ  
うき世のたびぢも しぼしのまのみ  
やがてみさかえの みくにのぼり  
よよにかぎりなく わが主とすまはん



#### (4) 思い出

##### ① 野村末義兄の思い出

尼田 隆己

さて、先生の思い出と言いましても、正直言つてすらすらと書けません。と言うのは、私は高校生の時から教会に導かれていましたが、昭和五年（会堂が新築されて間もなく）神様の前を離れまして、利三郎牧師のご召天を機に再び神様の前に歩む幸いな道に入れていただいた者ですから、二十六年間ものブランクがある訳です。それにしましても、野村先生とは、私の十八歳から三十四歳位まで一緒に教会生活を送らせていただいている訳であります。先生とは残念ながら信仰の深いお話しなどの思い出はありません。でも、いつもにこやかで、少しはにこんだ微笑で、正確な讚美歌を歌つて、力強いお祈りをなさっているのを思い出します。私は深いお話しこそしませんでしたけれども、いつも先生のように成れたら良いなと願つていました。また、一度戸畑のご自宅にお伺いしたことがあります。その時の印象は、座敷の前に庭があつて美しい花が咲いていたのを覚えています。そして目の前が広く開けていたように思っています。その座敷で習字を教えていたのでしよう、玄

関に書かれている文字は忘れましたが『書道教室』の表札と言うか看板がかけられていました。そう言えば、私も端麗な書の色紙を何枚か折に触れただいております。

さて、「ぶどうの木」十九号には、美恵子夫人の手記「主によつて生かされる生涯の幸」が載っています。先生がお召されになつて一年近くなつた頃の手記です。それを読みまして、先生の力強い信仰の一端をうかがい知ることが出来ました。

ご結婚なさる時の態度、「信仰の土台により築かれた家庭こそ、強固なものであり、真の幸福、スイートホームだと感じます：」。この主の前に祝福されたご家庭をスタートされ、昭和六三年に迎えた喜寿には「こんなに主の祝福にあずかるとは本当にこの上ない幸福者であります。そして孫も十人となり総勢二十名を数える大家族となりました」と感謝をされています。よく先生が「無きに等しい者、虫に等しい者」とおっしゃっていたのを覚えています。が、「ぶどうの木」十八号では『死んだ犬』の題でそのことを八十歳の感謝と共に述べておられます。そして「この世の光としての使命を、また地の塩としての味わいを豊かに持ち、この置かれた一日一日のこれからの生活を主の前に歩みたいと、心から願つておる次第であります」というこのお言葉は、私に宛てた先生の遺言であると受け取りま

した。

先にも書きましたけれども、先生とはあまり深いお話しもせず、「信者のお手本である」とは受け取っていませんけれども、今回思い出を書くにあたって先生の書いたものを読ませていただいてこのお言葉を頂戴したことは、聖靈の導きに他ならないことであります。今も生きて導きたもう主に感謝をし、野村先生の信仰の深さを思います。

最後に、十九号の美恵子夫人の手記の中で先生のお召される時の様子が書かれています。ご家族に申命記八章を遺言として残されたとあります。この箇所は、イエス様もお引きになったお言葉があります。「人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによつて生きる」です。イエス様は、悪魔と対決する時この言葉を持って臨んだのですが、先生もこの世の中で生活する第一は、食物を得ることによらず神様を第一にすることをおっしゃったのだと思います。

そして先生の愛歌である讚美歌の五三一番「こころの緒琴に み歌のかよえば」を讚美したとあります。この讚美歌を歌うと、旧会堂で利三郎牧師や、伊規須牧師、高木さん、野村さん、正野さん、俵ちゃんや皆さんと一緒に讚美している姿が浮かんできます。本当に主にある信仰生活の結果は、「み神のたまえる くしき平和よ」であると思ひ

ます。

お召されになる一ヶ月くらい前の入院中に、もう食事が少ししか食べられない時があつて、食事がいらなくなると「イランの国が来た」と言つて食べなくなつたとありますが、苦しくつらい時にもこのようなユーモアがあつたとは、あの静かな微笑の中からは想像も出来ないことで、先生の意外な一面を見たような気がして、もっと色々お話しを聞いておけばよかつたと今更ながら悔やまれます。今回も先生の信仰を通してこのように恵まれましたことを感謝します。

(二〇〇四年五月二六日)

## ② 野村先生、今日は

大田 敏夫

汝ら心に憂ること勿れ

神を信じまたわれを信すべし

(ヨハネ 一四・一)

変体仮名の見事な達筆で先生に書いていただいたこの御言の類縁、もう何十年になるでしょう。八幡から種子島へそしてまた八幡へ、常に私の机の前の壁にかけて毎朝、毎

夕感謝しながらお目にかかっています。先生は常に私の心の中に生きておられます。今も「先生お元気ですか」と、ご挨拶しながら机の前に座っています。

もう十二年になりますね。夏の暑い七月三十日のお昼頃、萩原の病院に薬を貰いに行つて、四階の病室で先生にお目にかかりましたね。これがこの世での最後のお別れとなつたのですが、私はちつともそんな気がしません。我が家のどの部屋にも先生に書いていただいた美しい文字の御言が飾つてあります。どの部屋に行つても、先生にお目にかかっているのです。こうして考えてみると、天上の皆さんと地上の皆さんとの多くの方の中で、一番毎日お会いしているのが野村先生ですね。それほど先生は、いつも私の身近におられるのです。

先生おはようございます。

早いもので、先生が「ぶどうの木」第十七号に寄稿された「奇跡の神の恵み」の中で、『現在七十七歳と四ヶ月と相成りまして：』と、喜寿の祝いを喜ばれておられました。が、いつの間にか私は先生を追い越して、来年は数え年九十歳となります。私もやがてそのうちに、榎本先生や高木さん、林さんのおられる天国前田教会に入らせていただくのも間もなくと思います。

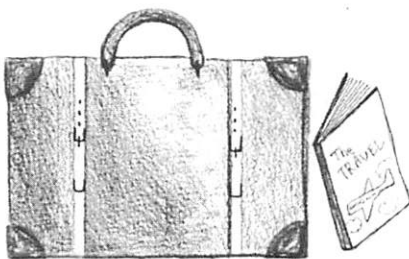
こうして筆をとつていきますと、懐かしさ一杯です。今は

頭も足も弱くなり、ただただ馬齢をかさねるだけで、皆さんにお世話になりながら、それでもババさんに作つてもらうご飯は美味しく、ローラと毎朝元気で散歩に行けるだけ感謝です。家に帰ると先ず先生に書いていただいた次の御言が「今朝も元気でよかつたね：」、と微笑みかけてくれます。さあ今日も一日、神様に守られながら元気で過ごしましょう。野村先生もお元気で。ではまた。

わが恩恵汝に足れり

その能力は弱き中に全うせらるればなり

(Ⅱコリント 一二・九)



### ③ 想い出の記

河本 信生

野村先生とは五年余り仕事を一緒にいたしました。労働集約的な、体力を必要とする職種でしたので、血気盛りであった私でも疲労が激しかった。まして、お若い頃に片肺切除という大手術を体験された先生にとつては想像以上の負担になっていたことだと思います。けれどもいつも柔和で穏やかな表情を絶やすことなく、接する多くの人々に慕われておりました。

また、教会の全ての集会に出席されて、司会や証詞など主のご用に励まれました。その上、前田教会週報「みぎわ」の発行も引き受けて、当時はまだ貴重で品薄な資源だった用紙もご自身で用意なさいました。原紙といていた油紙に鉄筆で一字一字丁寧に彫りこむように書く。それを謄写版で一枚づつ刷るのだから根気が要るし時間もかかる。コピー機が普及するまで長い間、この奉仕を続けてこられました。

新年メッセージの聖句の掛軸も、特別伝道集会のための案内看板も全部引き受けて下さった。冠婚葬祭の案内でもお世話になりました。楷書、行書、草書、なんでも自由自在でした。告別式の準備では、独り黙々と柩の上に置く十

字架を杉の葉を素材にして作っておられた。

リタイアされてからは書道教室で指導なさるほどの書家でした。にもかかわらず、先生の向上心は留まるところを知らず、活字体や速記術など、「書」に関するバリエーションをマスターするための講習会にも積極的に出席なさった。華奢なお体でこの活力は何処から出たものなのでしょうか。圧倒されるエネルギーでした。

昭和十四年に榎本先生が八幡でご用をなさるようになるまで、毎週日曜日には両親に連れられて福岡に行きました。浜の町伝道館での礼拝に出席するため両親がずっと福岡通いでしたから、まだ金生主喜ちゃんと同じ年くらいだったのですが、当時伝道館で榎本先生と共に修養生生活を送っておられた野村先生の若々しい姿が思い出されます。その頃、伝道館の横で様々な野菜を栽培しておられて、トマトや胡瓜、茄子などを挽がしてもらうのが楽しみでした。ときには鳥小屋で産みだての卵を採らせてもらったりしました。ピッカピカのトランプペットも吹いてもらいました。美しい金言（カード）も沢山いただいた。幼児が喜ぶことを次から次に繰り出されるので、まるで魔術師のように思えたものでした。

昭和二十年八月八日の空襲で焼きだされた我が家は、東郷駅近くにある叔父の家に寄宿しました。両家族あわせて

八人と、同居していた畠山英子さんを加えると九人になりました。その後、叔父と兄が復員して帰って来たので総勢十一名、家はバンク状態でした。そんなある日、小学校から帰った私は思いがけなく野村先生の姿を目にしました。所用で福岡に行った兄が、焼け野原になっていた街の路上で偶然出会ってお連れした、ということでした。福岡の伝道館も、当時先生が徴用で働いておられた工場も、空襲で焼失してしまって困惑しておられたので、ひとまず東郷にいらつしやいませんか、という経緯だったと聞きました。

さて、この窮屈で狭苦しい環境でどう対応するのか、子供心にも興味津々でした。懸念は杞憂に終わりました。両親は駅前の「あけぼの旅館」の一部屋を借りて先生に住んでいたことにはしたのです。我が家は空襲で丸裸になり生活の保障もない状態でしたが、献身した方を尊び敬愛して、如何にもして、と尽くす姿勢を無言で示した両親の心情を今改めて思います。

一年後に我が家は八幡に戻りました。小学六年になった私は多くの教示をいただきました。以前「講談社の絵本」を手離さなかったことを覚えておられて、あるとき、今どんなものを読んでいるのか訊ねられました。夏目漱石の「坊ちゃん」が面白いから読んでごらん、と勧められたのが最初でした。次には「プルトーク英雄伝」、ギリシャとロー

マの将軍や政治家の伝記を良識に満ちた語りかけで描いたもので、躍如として描写されている人物像が、ヨーロッパの歴史と文化に興味を抱かせてくれました。

イギリスの歴史家ギボンの「ローマ帝国衰亡史」、フランスの評論家アンドレ・モーロワによる「英国史」と続きます。

「クオ・ヴァ・デイス」という映画を観たのもこの頃だったと思います。和義先生も話されたことがあります。ポーランドのシェンキエヴィチという人の原作です。

舞台は一世紀のローマ、古代的世界観とキリスト教信仰の闘争を背景に、暴君ネロや使徒ペテロやパウロなど、高い人物を通じて描かれた古代都市ローマの生活の種々相は面白いものでした。キリスト教徒に対するネロの迫害を逃れてローマを去ろうとしていたペテロが、そのためにアツピア街道を歩いていたときに甦られたキリストに再会します。イエス様は追われるペテロに代わって、もう一度十字架にかかるためにローマを目指しておられたのです。ペテロが自ら恥じて極刑が待っているローマに引き返す場面は衝撃的で、伝道者ペテロの信仰に対する厳しい姿勢には襟を正す思いが致しました。題名の〈クオ・ヴァ・デイス〉はラテン語で〈主よ、いずこに行き給うや〉の意で、死に赴こうとするイエス様に問いかけたペテロの言葉（ヨハネ

一三・三六)です。

野村先生は欧米の映画にも堪能でした。イギリスの名優ローレンス・オリビエが主役を演じた「ハムレット」に感動したのもこの時期で、話がこの映画におよぶと、流れとして当然原作者シェークスピアの人物月旦、どんな人であったのか知りたくなります。野村先生はシェークスピアについてこのように説明して下さいました。

彼、シェークスピアは四百年以上もの間、変わらぬ人気を保持している世界的古典作家です。十七世紀のイギリスは、カトリックとプロテスタントの確執、インフレ、女王の跡継ぎ問題等が原因となって、社会情勢が非常に不安定でした。そんな辛い時代に演劇は人々にとって貴重な娯楽で、劇作家は観客の感情を揺さぶる徹底したエンターテインメントを求められていました。庶民から王侯貴族までの幅広い観客を満足させる必要がありましたから、シェークスピアの演劇には複眼的に多彩な視点を持って、主役級の朗々と語る名台詞から召使いや街の人といった無名の登場人物の呟きまでが戯曲の中に盛り込まれました。ですから、どんな人も必ず作品のどこかに自分を投影できる魅力があるのです。その喜劇、悲劇、史劇と幅広い傑作の中で、「四大悲劇」である「ハムレット」「オセロ」「マクベス」「リヤ王」の憂愁と懐疑はとりわけ印象的ですよ、と。

ちょうどその頃上映された映画「ハムレット」は、予備知識を与えられておりましたので一際興味を持って鑑賞したものです。主役を演じたローレンス・オリビエが英国の舞台俳優でありましたので、今度は演劇論になりましたが、先生はここでも驚くべき博識を見せて下さいました。

十九世紀末、モスクワ芸術座でリアリズム演劇の旗手として、チェーホフとゴーリキーの戯曲を上演したスタニフラスキー。演出家としての彼の芸術創造に対する誠実な態度、厳しい規律と訓練は、作者の意図と様式をあくまで浸透させることでした。彼のシステムは人間の心理を深く解明し表現する演技の力、劇の情緒的内容をいきいきと再現する演出の力とあいまって、幾多の名優を輩出させ世界に冠絶する劇団にまで高めた、というような解説で、映画、演劇に関して一層の興味を惹起していただきました。

日本でも新劇出身俳優の優れた演技力は、このスタニフラスキー・システムによる徹底的な厳しい訓練を受けているから卓越しているのであって、演技者としての生命も長いのだという説明を聞いて、それからは俳優の演技に対する見方がはつきりと変わってきました。こういう解説を聞くと一層興味がわくものですね。

それにしても野村先生は広角度に、諸事万般に就いての造詣が深いお方ではありました。

六〇年代はまたフランス映画の黄金時代でありましたので、ルネ・クレール、ジャン・ルノワール、オータン・ララ、ジャック・フェデー、ジュリアン・デュヴィヴィエ、マルセル・カルネなど一流といわれる映画監督の名前や評判になったその作品群のことを話して下さいました。

「未完成交響曲」という題名通りに、シューベルトが主人公になった映画の公開も同時期でした。バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームス、シューベルトなど、古典派と称される作曲家を中心にクラシック音楽の解説が展開されるのですが、長くなりますので割愛することに致します。

以上述べた事柄はいずれも中学生時代に属するものであります。高校になると柔道に明け暮れる日々で、先生の折角の手解きを楽しむことは先送りになってしまいました。けれども忘れてはならないことがあります。前述の、最初に勧められた「坊ちゃん」の漱石人脈からは、後の一高校長、学習院長の安部能成や小宮豊隆、芥川龍之介、そして「三太郎の日記」の阿部次郎が人口に膾炙されることとなります。一高生必読と言われた「三太郎の日記」は、青年としての成長に裨益するところ大なるもので、今でも心ある人は青年期に限らず愛読しているようです。

仕事を離れて一年を過ぎ、青春の歩みを回顧する余裕も

漸く与えられました。野村先生の数々のアドバイスが、どれほど少年期以降の人生に楽しさの幅と心の豊かさ、好奇心や向上心を与え、本質の探求を促したものであるかを思料して只管感謝しております。

汲めど尽きせぬ知の泉のような教養の人でありながら、自らを誇ったりひけらかすことは些かもなく、信仰に堅く立って動かされること無く、あくまで謙虚に控えめで穏やかな紳士であられた先生の滋味掬すべき温顔に思い至らせられるのです。

#### ④ 野村先生の思い出

小松 南子

「今より後もわたしは主である。わが手から救い出される者はない。わたしがおこなえば、だが、これをとどめることができよう」 (イザヤ四三・二三)

先生の大好きな御言を掛軸にとお願いして書いていただきました。今我が家の家宝として床の間に掛けてあり、素晴らしい筆の力強さと優しさの中に、神様の深いご愛と先生の信仰と愛と忍耐とをひしひしと感じ、味わわせていただいております。



(先生の信仰の思い出)

「われらの尚ほろびざるはエホバの仁愛によりその憐みの尽きざるによる、これは朝ごとに新なり汝の誠実は大いなるかな」  
(哀歌三・二二―二三)

先生は、この御言を持って神様の前に徹底して己を低くし、謙遜に神様に従って、世の光として地の塩として天寿を全とうされたのだと思います。

ぶどうの木十八号に「死んだ犬」と題してお証しを書いてありました。一部を引用いたしますと、『見るも無惨なドロにまみれた死んだ犬のような者を清めて、立派な生きた犬として育てるため、キリスト様があの十字架の上に、罪のない方があの醜い姿になって十字架について下さった。こんな死んだ犬のごとき者が主イエス・キリストの契約のもとに、あがなわれて、いやされて、新しくされて、毎日主のそばで安んじておられる生活に入らしていただきまし。十字架をあがめて心から感謝でいっぱいでありまし』  
この先生のお証しが私達に残してくださった足跡であり遺言だと受け止めております。

(海老津の家庭集会の思い出)

先生には長い間大変お世話になりましたが、とくに親しくお交わりをいただくようになったのは、海老津の家庭集

会に来て下さるようになってからだと思えます。

毎週水曜日、正野さんのお宅にお伺い致しますと、日当りの良い明るいお部屋で皆さんと共にダンディーなお姿でにこやかに迎えて下さいました。

美しいお姿にセンスの良いお洋服とネクタイ、つい見とれている間に集会が始まるというパターンでした。美しい歌声、はりのあるお声でお説教、深い祈りによって導かれた御言を持って神様の深いご愛と恵みとをいただき感謝と喜びでいっぱいでした。

その後は正野さんの心こめたお茶とお菓子をいただきながら話が弾み、レギュラーの方々はお老人が多いのですが、とても明るく賑やかで楽しい時間でした。また先生は愛を持って一人一人に心を掛けて祈って下さり、私もいつも事あるごとに祈っていたが、今恵みの内に信仰生活を続けることが出来るのも先生のおかげと心より感謝致しております。

(ある日の思い出)

先生がまだ戸畑の小芝に住んでおられたある五月晴れの日、お宅にお伺いしたことがあります。玄関に入りますと大きな木立ベコニヤが赤い大きな花をたくさんつけて美しく迎えて下さいました。部屋に入りますとサツキの鉢が

部屋中とところ狭しと並んでいるのです。一鉢一鉢見事な枝ぶりに美しい花が咲き誇り、まるで夢の中です。

また狭い庭には（ごめんなさい）、またまた色々な花や植物が所狭しと……もう驚きです。先生は毎日お忙しい中を一鉢一鉢丹精をこめて、大切に大切に育てておられる愛の深さと忍耐。帰りの電車の中でイエス様と先生のお姿がダブリながら、コリント第二の手紙三章一八「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」

感謝で一杯でございます。

## ⑤ 野村先生の思い出

島崎 博子

先生の思い出といえ、先ず初めに私の次女の結婚式の時大変お世話になりましたことです。

次女は、岡山の大学一年から四年までずっと付き合っていた男性が居り、卒業の時、男性の方からどうしても結婚してくれと言われ、私に「こんなに自分を愛してくれる人は他にない」と次女が言ったことです。

その男性は、在学中二度ほど家に来たことがあり、そのとき私は好い感じを受けました。背は一八三cmと言う長身で、中学、高校、大学とテニスをし、テニス部のキャプテンもしていましたし、大変明朗でハキハキし、身なりも派手でなくきちんとした清潔な感じでした。それで私は本人は気に入ったのですが、その家は農場経営で両親の他に祖父母も居られると言うことです。私の姉夫婦に言うときと真つ向から反対され、私も不安で、主人も島崎の母も亡くなっていたので誰に相談することも出来ず、ご迷惑と思いつながら野村先生に電話で度々相談いたしました。するとその都度「祈っておりますから」、と先生はやさしく言っておりました。私も真剣にお祈り致しました。

卒業して一年してよいよ話が決まったのですが、そのとき先生は「銀行とか大企業のサラリーマンなら皆も飛びつくのですが、知栄（次女）さんの結婚も神様のおはからいですね」と言われ、大変喜んで下さいました。

そして「日々是好日」と書かれた短冊を下さいました。これは黒塗りの枠にガラスをはめた箱に立派に書かれた短冊が入れてあり、私はお祝いにいただいた次女に見せましたが私が欲しくてたまらず、次女にはよく頼んで私がいただくことにし、今もお座敷に掛け、毎日仰いで心の糧に致しております。

私は、次女は誰にもなじみやすい性格なので人間関係はあまり心配してはいないとは言え、やはり不安だったのですが、両親とも曾祖母ともうまく行き、今年で二十年になります。その間一度もトラブルが起こったことはないそうです。そして、今大学二年の長男はじめ、四人の男の子を育てて来ています。その間農場も七年前から会社組織にして、有限会社佐々木農場として、婿が社長で社員が十数名居り、ハウスの多いのでは島根一になって、社員共々皆楽しく働いております。やはり神様のお導きによる結婚は何の憂いもないと神様に感謝すると共に野村先生に感謝致しております。

また、最後になりましたが、先生は美男で上品な方でいらして、書の大変お上手な方でいらつしやいました。島崎の母がいただいていた「わがうちなるすべてのものよその聖なるみ名をほめよ」と書かれた色紙は、私の居間にかけて日々礼拝いたしております。

先生は若い時に結核を患われ、九大で手術第一号で成功され、それから八十歳あまり迄生きられ、これは素晴らしき神様のみわざと思われます。

神様に祈り、神様と共に歩む人生は何の憂いも無いことを知らされました。

つたないお証しですが感謝して筆をおきます。

## ⑥ 野村先生と私

正野 真宏

野村先生と言えば、まずあの柔和で優しいお顔を思い出します。いつお会いしても、にこやかに接してくださって、こちらまで優しい気持ちになってしまふ、そういうお方でした。

しかし、そのご生涯はお顔とは裏腹に、まことに厳しく、苦難に満ちたものでした。若い時に死の病と言われた結核を患い、九死に一生を得られたこと、戦災に会われ、戦後の混乱の中でのお仕事苦労や病との闘いもお有りになりました。それは今日では経験することができない、小説以上の波乱万丈のものであります。そういう中で、信仰を持って歩み通された。そのこと自体が実に尊い生涯だと思ふのです。

あの優しさは、先生の持つて生まれたご性質かもしれませんが、私は苦難の中を通った者だけが持つことができる優しさだと思います。イエス様ご自身も、「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかつたが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。(ヘブル

四・一五」とあるように、試練の中を通ったからこそ、弱さを思いやり、真の優しさを身に付けられたのです。

先生はご自分が病弱であられたゆえに、病にある人を中心に同情なさって祈られました。ご自分の弱さを感じておられましたから、私達の弱さを思いやることができたと思います。

私が先生に親近感を覚えたのは、その弱さです。先生は自分の弱さを隠さず、こういう弱い者がイエス様のご愛によって支えられていることを感謝され、そしていつも、主の前だけでなく、私達にも謙遜な態度で、誇ることがありませんでした。

そのことは、弱い私にどんなに大きな励ましになったか分かりません。榎本先生や高木先生・伊規須先生の信仰を見ていると、どんな困難をも乗り越えて行く強さを感じますから、自分みたいな弱い者はとてもできないと思ってしまうますが、野村先生は私と同じように弱さを持っておられるけれども、信仰によって、あの平安と優しさと喜びを持っておられる。弱いことは信仰上のマイナス点と思っていたけれども、そうではないのだ、弱さのゆえにいよいよ神に信頼する、信頼することで主のご愛と力とを知ることができ、ことを証しされ、「わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。(Ⅱコリント二・一〇)」、と言ったパウロ

の信仰を實際に歩んでくださったように思えるのです。

主は八幡前田教会にいろいろなタイプの聖徒を置いて下さって、後輩の私達の良き見本として下さっていることを感謝するものです。

私も漸く、「それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。(同九)」、ということが分かるようになりました。これからも、良き先輩の足跡に倣って主に従い、私なりの信仰の足跡を残せることができればと思っています。

### ⑦ 野村先生と海老津集會

正野 百合子



私達は、昭和四三年一月、岡垣町海老津に家を建てて、主人の両親と弟、私達夫婦と一緒に生活するようになりました。

母は「私をこんな隠居の身にさせていたでいて何と感謝

してよいか分からない、自分は神様を知らなかったときは不運なことを悔やんだが、神様を知り祈りの生活をしていると神様が次々にみ業をなして下さって、何も無かつたところから働かなくても生活が出来るようにして下さった、この喜びを、以前の私のように悩んでいる人がいたら、イエス様の元に来なさいと教えてあげたい」と思うようになり、家庭集会を持たせていただくようになりました。初めは年に数回でしたが、毎週お話を聞きたいと言われる方もあり、野村先生にご用に来ていただくようになりました。

先生は、柔和で優しく、また熱心に忍耐強く、初心者のために分かりやすく聖書のお話しをして下さいました。クリスマスには榎本先生もご用をして下さり、楽しい劇や、愛餐の時も持たれました。この時は父の順番で、早くからメニューを考え、手作りの料理をしてもてなすのを楽しんでいました。

私達の家族は、主人の転勤などもあってしばらく海老津を離れていましたが、能美イチさん、鈴木美保さん(もともと前田教会員で海老津に住まっていた)、三好喜代市さん、小松南子さんなどが中心となって、集会を楽しみに支えて下さいました。近所からも入れ替わり立ち替わり求道者も来られるようになりました。

昭和五二年に、また私達も海老津に帰って来て、集会に

出させていただきましたが、先生は以前と変わらず熱心に若々しい声で讚美し、お話しをして下さいました。ある時は体調が悪く熱もあつたようでしたが、お話し中はそんな様子を一つも見せず、ご用の後で伺って驚いたこともありました。先生は趣味も多く、書道をはじめ盆栽やお花の世話も上手で、魂の養いと共通したコツがあるように思いました。

昭和六三年に正野の父が召され、その後皆さんもお年を取られ、平成二年の初めの頃、野村先生も体調が優れず、休会となりました。平成三年の三月に母が七十九歳、六月には鈴木さんが九十歳、九月には野村先生が八十歳で召天され、海老津集会も天国に移されたようです。

しかし、ここで先生始め皆さんが祈られた祈りは神様に聞かれ、鈴木一幹(ご夫妻、三好正喜(ご夫妻、園田幸子さん(能美さんの娘)、深町郁子さん達が前田教会に来られるようになりました。また、海老津集会に来られていて他の教会に行かれていた方にお会いすると、あの集会で養われたから今日があると感謝されることもあります。

「汝、主イエスを信ぜよ。さらば汝も汝の家族も救われるべし」(使徒行伝一六・三一)

私達も信仰の先輩達に倣って、祈り励んで行きたいと思っています。

◎ 野村先生

正野 悠子

野村先生は、「海老津の家庭集会」を受け持っておられました。毎週水曜日九時頃、八幡から三好兄もご一緒で、海老津駅前からタクシーで近くの老人ホームに回られ、能美姉を迎えて三人で正野宅まで来て下さいました。

その美しいお声で讚美をリードして下さい、その合唱は家中に響いておりました。それからご自分のお証しを交えて解りやすくメッセージを取り次いで下さいました。

集会後は楽しいティータイムで、鈴木姉や能美姉、正野の両親と、終始あの優しい笑顔でお交わりなさいました。

私共の結婚の折には「主の恵みふかきことを味わい知れました。それは我が家の家宝の一つで、狭いアパートですが居間の中央にかけてまいりました。三十年近い日々の中をこの御言で励まされてきました。

祈ってお送り下さった聖句のとおりをの歳月を過ごさせていたでいて、心から感謝しております。

◎ 主の恵みに感謝

鈴木 一幹

「主を待ちのぞめ

強くかつ雄々しくあれ」(詩篇二七・一四)

平成元年正月「色紙」

「なんじら心をさわがすな

神を信じまた我を信ぜよ」(ヨハネ一四・一)

平成三年正月「短冊」

「わたしは神

あなたの神である」(詩篇五〇・七)

米寿に際し「色紙」

右は、故野村末義先生から亡き母(美保)が生前いただいた聖句の色紙や短冊です。母の部屋に現在も大切に飾らせていただいております。

さて、私は当時、勤め先の安川電機行橋工場から昭和二五年四月に黒崎の安川電機本社に転勤となり、同年八月に行橋から黒崎の社宅に引越しました。従って行橋教会から当前田教会に転籍させていただき、母が毎週日曜日、孫娘

を連れて日曜学校と礼拝に出席していました。その頃から、榎本利三郎先生や野村先生に大変お世話になりました。

その後昭和四二年四月、岡垣町吉木に自宅を設け引越しました。引越し前とは異なり、岡垣町から前田教会まではバスとJ.Rを乗り継ぎ、黒崎駅から前田町まで再びバス利用となり、母も年令と共に苦勞していたようで、毎週の出席が月二回または一回となる等、体力的に大変だったようでした。

その頃黒崎に居られた正野様ご夫婦（義雄、サカエ様）が、昭和四三年、同じ岡垣町の野間に新居を建てられ、お引越しをされ、榎本先生のご配慮もあり、正野様宅での岡垣集会を開かれることが決まりました。集会は平日でしたが、榎本先生がその都度お越しになることになり、お蔭様で集会には母はバスのみの利用で出席していました。

その後昭和五三年になり、正野真宏、百合子様ご一家が、北九州からご両親の住まれる岡垣町野間の家に戻られました。平日での岡垣集会のお世話は百合子さんが担当され、集会のご指導を榎本先生は野村先生に譲られました。

この集会には岡垣町内の信者は勿論、宗像市や近郊からもかなりの方々が毎週出席されていたようです。参加者の中には母のように高齢者もいて、歩行が困難な方も居られ、その方々を百合子さんが車で送迎されて本当に感謝するば

かりでした。

母は私が会社から帰ると待ちかねたように、集会での楽しい様子を私に話して聞かせました。母はまた、自分の好きな聖句を野村先生に色紙や短冊に書いていただき、これらを自室に飾り毎日拝読していたようです。

私は、野村先生には殆どお会いする機会はありませんでしたが、母から毎回の集会の様子を聞いていたので、先生の立派なお人柄が偲ばれます。

その後平成三年三月に正野サカエ様が、同年六月に母が、同年九月に野村先生が召天されました。三人が天国の主の元に集い、最近召天された榎本先生をお迎えし、楽しく過ごされていることと思ひ、主のみ業に感謝申し上げる次第です。

以上



## ⑩ 野村先生を偲んで

深町 郁子

私が信仰に導かれたのは海老津の集会でした。ここで初めて野村先生にお会いしました。

当時、私は信仰とか聖書等には全然縁の無い者で、何の考えも無く誘われるままに集会に参加させてもらったのですが、先生の説教もさっぱり分からず時間ばかりが非常に長かったことを思い出します。それと、説教の中で先生がご自分のことを「こんな卑しい私を神様は憐れみお恵み下さっている」と、このようなことを何度も何度も言われたことをその時は不思議な気持ちで聞いていたことを思い、今先生の深い信仰に頭の下がる思いです。

説教の後での雑談の中でも、私の話にも真剣に耳を傾けて、優しいお顔が忘れられません。

先生を通して最初に私にいただいた御言が「イエス・キリストは昨日も今日もいつまでも変わることがない」、でした。私はどんな意味かも分かりませんでした。先生はこれを色紙に書いて下さいました。この御言は今も私の部屋にあって、迷ったり悩んだりの中で力を与え慰めとなっております。色紙は色も褪せてきましたが、野村先生の優しいお顔を思い出させてくれています。

先生の深い信仰にならって、私も主と共に主に従って行く生涯を歩いていきます。

## ⑪ 故・野村先生の思い出と感謝

水村 静江

尊い主の恵みに感謝申し上げます。

数々の思い出の中、野村先生には、生前中に本当にお世話になったことを思い出します。先生は下松家での家庭集會でも毎回ご出席され、良き交わりをしていただきました。その頃のことを思い出しますと、また元氣が出ます。

先生は素晴らしい信仰者でしたし、書道家でも有られました。当時息子の光義が小学校の二年生で、私が町内の子供会の役をしていました。最近は子供の人数も少ないですし、外で遊ぶ子も少なく喧嘩をする子もあまり見ない時代ですが、当時の子供達は、朝から夜まで時間に関係無く元気に遊びまわっている子供達が多く、長い休みの時などは、本当に親達も大変でした。そのような時代でしたが、世間も少しづつ学歴社会になってきていたように思います。

町内には「えびす会館」があり、子供会や老人会や色々な多目的に使える所でした。当時はそろばん塾がありました



が、書道教室にも通わせたいと言う声も有り、町内のお母さんたちと話し合つて野村先生にお願ひしましたところ、快く引き受けて下さいました。小学生から社会人まで、色々な方を教えられました。その中でも高校生でした娘の千恵子も教えていただき、当時商業科が必要でした。ペン習字を習い2級の資格を取ることが出来ました。子供達も社会に出てどんなにか役に立ったことか、感謝です。

戸畑から八幡までのかなりの距離と、帆柱町までの坂道を六年間通つていただきました。子供達を書いた字や赤丸をもらつて喜んでる姿や、墨汁の匂いを思い出します。遠い昔の思い出ですが、こうしてまだ覚えていられることを感謝します。

やがて天国でお会いする日が楽しみですね。

## ⑫ 手紙より(その一)

水村 光義

「しかり、わたしはすぐに来る」(黙示録二二・二〇)

主よりの慰めをお祈り致します。先生の告別式に行くことができずすみませんでした。電話で先生の召天のことを聞き、本当に悲しくて泣きました。しかし先生は死んだ

ではなく、永遠のいのちをいただき永遠の礼拝生活に入られましたから、この地上にいる時より祷告に励まれると思ひます。

ここ数日、いつも先生のことを思い、励まされています。私も先生のように愛の人でありたい、主に忠実な者でありたいと願ひます。

私は、生まれる前から祈つていただき、また本当にお世話になりました。それだけではなく、私にとつての信仰の先生でした。何も語らずして語つて下さいました。先生の前ではいつも自分の高慢が示されました。どんなに先生のことを偲んでも思い出は尽きません。いつも主に忠実に仕えられ、主の愛に感謝されていた後姿が心から離れません。

神学校で私の証しする時が与えられ、先生のことを証しさせていただきました。私の大好きな先生、私にいつも手紙を下さいました。私のために祈つて下さいました。こんな私の前でもいつも謙遜だった先生を尊敬していました。

この地上では会うことはできませんが、先生が私の先にみ国に帰られ、主とともに私が信仰の戦いを立派に勝利できるように祈つていて下さることを信じます。

奥様の上に主からの慰めと平安をお祈り致します。また、つづけて小さき僕のためにお祈り下さい。

一九九一年九月一二日

⑬手紙より(その二)

李 文珠

神様のご愛を感謝しつつ…

この前のお便りで百合子先生が八十八歳になられると伺ったばかりでしたのに、新年聖会の二日目にお召されになったと伺って悲しく思っております。今はイエス様に顔と顔をあわせてお会いしているのですから、霊にあつては喜ばしいはずのところですが、やはり内にあつては心の中どこかに大きな穴が開いたような気がしています。

皆様の上にイエス様からのねんごろなお慰めがありますようにお祈りしております。でも神様はちゃんと金生先生を備えられていますから感謝ですね。榎本先生が初めて前田教会においてになった頃は、丁度今の金生先生くらいのお若さではなかったでしょうか。

野村先生もその頃は主の器として備えられるべく、榎本先生とご一緒に修養されていたと伺っています。野村先生は本当に忠実な一生を過ごされたと思います。母もいつもそう言っております。野村先生のご生涯は上からの知恵に満ちたものだったと思っております。

「しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、

偽りが無い。義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである。(ヤコブ 三・一七―一八)」とありますから、お子様達もご両親の愛のうちに育てられて何よりと思っております。

お手紙の中で、母が河本さんのお店でお世話になっていた頃のことを思い出されていますが、私もつくづくあの頃は良かったと思っております。貧乏のどん底で兄と父を失った中、毎年が感謝で終っていたことを思い出します。

榎本先生が残された聖句のように「神を信じ、またわたしを信じなさい」と、御言を信じる生活のうちに知らず知らずのうちに私共を栄光の奥義、つまりイエス様のご愛と希望の中に包んで下さっていたことが今わかります。

「信仰によって得たりと感謝しなさい」と、榎本先生がよくおっしゃっていたことを思い出します。

(二〇〇四年二月二十日 カナダ在住の李文珠姉から  
いただいたお手紙より抜粋)



⑭ 父の思い出

飯田美紀子

「我がぎりなき愛をもって汝を愛せり

故に我たえず汝をめぐむなり」

(エレミヤ三一・二三)

我が家の和室に父の書いた額があります。私はこれを見ながら、父は自分の一生をこの御言でしめくくって天国へ召されたのだ、とよく思います。

父の人生は決して平坦では無くむしろ波乱万丈、小説のような人生であったと思います。私達が大人になって、父が自分の生い立ち等を話してくれたりする度に、小説にしたら：：などと言ったものでした。

私が記憶にある一番古い思い出は、四歳の頃だったでしょう。幼い私に鉄琴を買ってくれ、讚美歌を数曲教えてくれました。そしてその年のクリスマスに、私は生まれて初めて大勢の前で一人で鉄琴を演奏し、大きな箱のプレゼントをいただき、戻る時に講壇舞台の袖で父が「良く出来たネ」と言う顔で、ニコニコと見てくれたのを覚えています。多分その頃から毎週日曜学校に父と二人で通う生活が始まったような気がします。

私達四人兄弟姉妹の青春時代は、今の若者同様その当時も歌番組等大好きで、皆でテレビを囲んでいましたが、時代劇大好き人間の父は「水戸黄門」や「眠狂四郎」でしたか：：、それが始まるとテレビは父のものでした。

また、父は佐久間良子が大好きで、テレビに出てくると「良子さんだ、良子さんだ！」と、喜んで見ていました。

他にはイングリット・バーグマンも好みでした。私達が「お母さんとえらい違いね」とひやかすと、「そっくりだよ」と、母に向かつて「ヨシコサーン」と呼んだり、今考えると信仰一筋のイメージとは違った愉快な面も沢山持っていました。

しかし信仰に対しては近寄り難い厳しさのある父で、青春時代は子供達にとつては窮屈な思いも有りました。

結婚をして、私一人関東の方で八年間過ごしましたが、父はいつも達筆な字で手紙を書いてくれて(母からの手紙は、いま考えると一通も貰っていないような気がします)、返事を出した私の手紙には「あんたの手紙は誤字、脱字、送りかな、間違いだらけ：：」なんて、ついでに怒られたものでした。

主人の仕事上、留守の多い家庭で、二人の幼い娘達を四苦八苦しながら育てている私をいつも気に掛けてくれて、そんな父の手紙には数々の御言が書いてあり、その最後に

は「ことごとく祈りなさい」と必ず書いてありました。

「ことごとく祈りなさい」のことば通り、父はいつも静かに祈りの時間を持っていました

早朝、目を覚ますと縁側で一人長い時間祈っている姿、毎週「みぎわ」を作る時も、毎年暮に新年聖会の標語を書く時も……。あんなに上手なのに、別にお祈りしなくてもいいだろうに、なんて思っていました。それは字の上手さでなく別の祈りだったのです。

また、娘達を連れて里帰りをしているときには、泣いてぐずっている赤ん坊を抱いて、《主われを愛す》を何度も何度も歌って寝かせ付けてくれていました。

父はよく色々な人に「病気がちだった、たった一人の私、今は孫が十人もいるんですよ」と嬉しそうに話していました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

もし人がわたしにつながっており、またわたしが

その人とつながっておれば、その人は実を豊かに

結ぶようになる」 (ヨハネ一五・五)

ぶどうの木から出た一番大きな枝である父、そして母、私達と、本当に大きな実をつけることが出来るように、今はまだまだ小さな信仰の私ですが、父の歩みを思いながら。

「人は心に自分の道を考え計る、

しかし、その歩みを導く者は主である」

(箴言一六・九)

神様を見上げ進んで行きたいと思えます。

今、母は父が天国へ召された年齢を二歳も超えました。神様に守られ、教会の方々に助けられ毎日をごさせていだいております。そして父に代わって私達子供のために、またそれにつながる家族のために祈ってくれています。

私は、そんな母をお守りくださいと神様にそして天国の父に祈っております。



⑮ 父の背中

野村 仰一

私にとって父の思い出といえば、ともに生活していた二十歳になる頃までのことである。それゆえ記憶はかなり断片的で曖昧なものばかりであるが、それでもいくつかが、その時の映像とともに鮮明に甦ってくるものもある。父の証しの中にも出てくる、父が「叔母さん」と思っていた実母、そこに父と一緒に行ったのは、おそらく三、四歳の頃ではないかと思う。大宰府の池にかかるアーチ橋のようなところで遊んでもらったことを微かに覚えている。また、今でも最も記憶に残っているのは、父の背中に負われての病院通いのことである。私は小学生の頃まで大変病弱な子どもで、両親には幾度と無く心配をかけてきた。朝、学校に行く頃になると熱がでたり腹痛を起したりで、母は職場に着くなり、「子供さんから、具合が悪いと電話がありました」と言われ、とんぼ返りで帰宅するといったことが度々であった。そんな中、歩くと十五分か二十分のところにあった小児科医院まで、寒いときでも夜でも、父は私を負ぶって連れて行ってくれた。その背中に負われているときの何とも言えない安心感は、今でも忘れることができない。熱や腹痛で不安な自分を、それ以上に心配しながら背負っ

て歩いているはずなのに、何故かその背中に乗っている私は不思議な安堵感に包まれていたものである。心配しながらも絶えず主に祈り、主に信頼していたその姿が、子どもにも安心感を与えたのだろう。

決して多くを語ることはなかったが、絶えず主に祈り、主に従って歩いていた父の姿、頼りないように見えて実は全く動かされることの無い、主に信頼しきった後姿は、多くの言葉よりもはるかに雄弁に語りかけていたと思う。子供達のために、また家族のために忍耐をもって主に祈り続けていてくれたのだということが、私自身その立場になつてようやく理解できるようになった。そんな鈍い者のために、神様は「父」というロールモデルを示して、信じて従って行くことがどれほど幸いなことであるかを教えて下さったのである。幼い日、父に負ぶさっていたあの背中の思い出とともに、主に信頼して動かされることのなかった父の後姿を思い出し、自分もそのような歩みをしていきたいと願っている。

七 思い出の写真

§ 思い出の作品 §

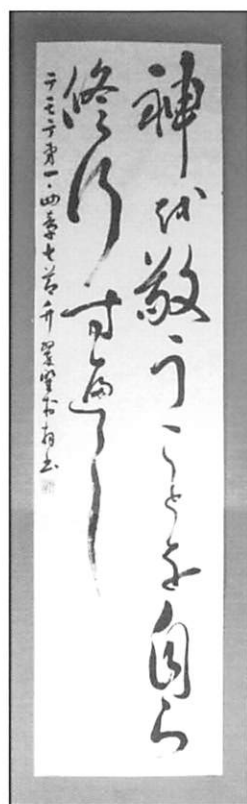
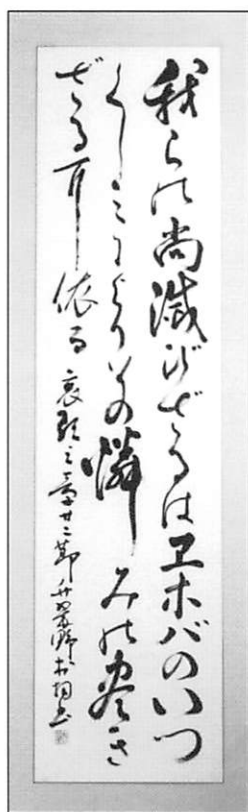


画 飯田 恵

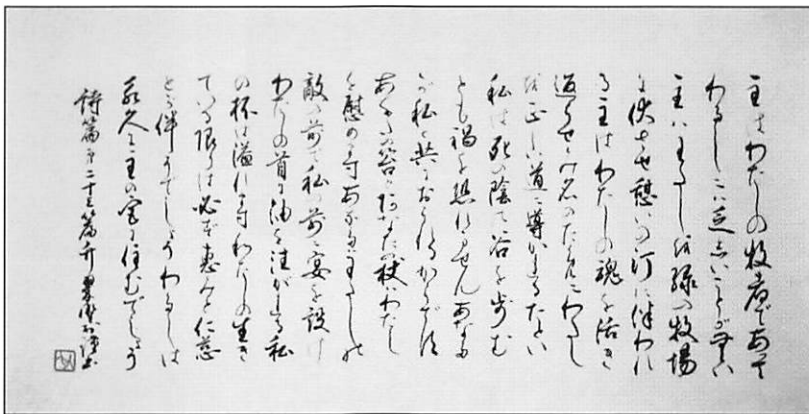
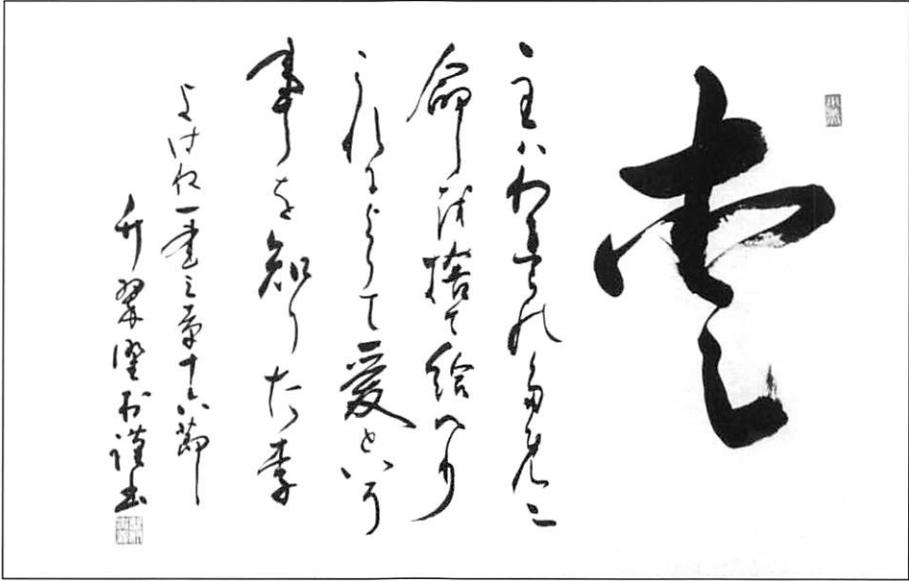


「無一物」

自分の物は一つ無いのである。  
持ち物も事情も境遇も、全ては神様  
からいただいたもの。そして命：







愛の力……… 忍びあることなし  
 全に愛におかしくしなす取ら降く  
とけい 二才四歳十二月廿九日 聖徳太子

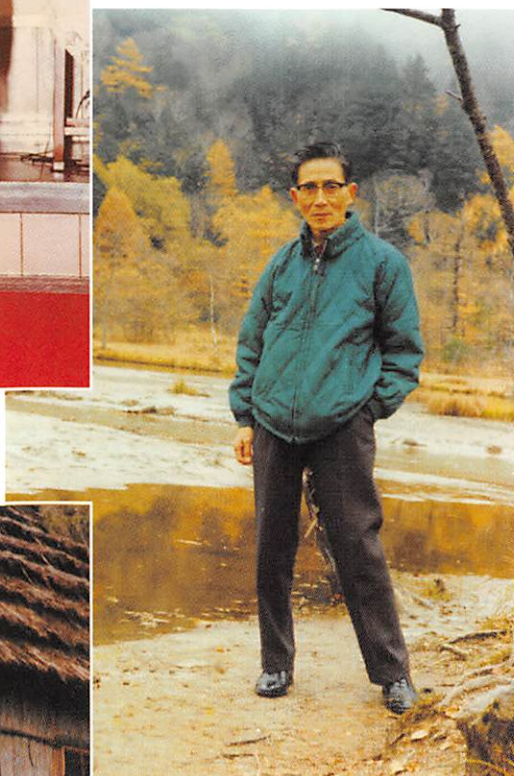
是て神の御霊に導かれて  
 いも者は即ち神の子である  
口下書 八歳十四節

わの恵らぬは是れなり、能力は  
 弱し申……… 今う………  
とけい 二才四歳十二月廿九日 聖徳太子

§ 思い出の写真 §



昭和49年6月  
上島南明・恵子 結婚式

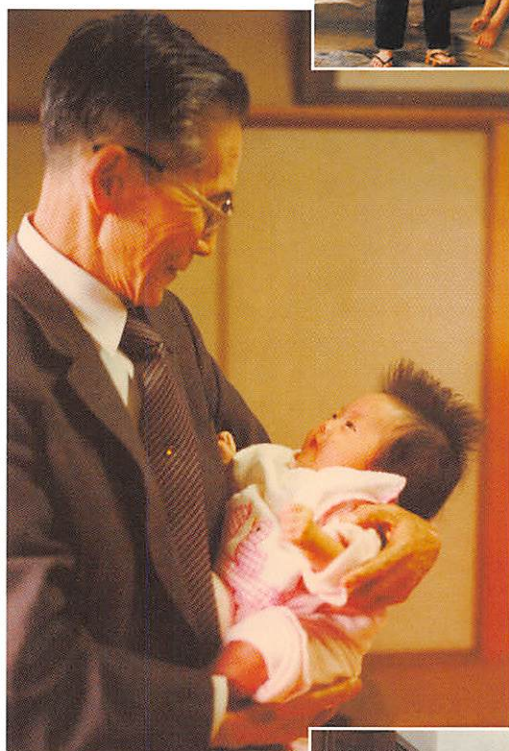


昭和50年10月 上高地にて



昭和53年6月 北海道旅行

昭和54年7月  
戸畑教会修養会  
(岩屋海岸にて)



昭和57年9月  
孫・あゆみ 献児式にて



昭和57年1月  
大濠公園教会新年聖会



平成 3 年 1 月 新年聖会





平成 3 年 9 月 告別式



平成 3 年 11 月 記念会

## あじがき

この小さな小冊子（野村末義の記念誌）発行にあたり、私はいま改めて、神様への深い感謝を新たにしております。

平成十四年、お召されになる前の榎本利三郎先生から「野村さんの記念誌を作りなさいよ」と命じられて以来、何も手のつかないまま時は東の間に過ぎ、こんなに長くかかるとは思いませんでした。いつまでたっても何もできない、その糸口すら見出せないことに少々焦りを覚えながら、「主よ、お助け下さい。このことについて、どうしたら良いのでしょうか。あなたの道を教えて下さい」と、主のみに手を全てをお委ねすることができたとき、主は一つ一つ進める道を示して下さいました。

それから主の導きにより、榎本和義先生、金生先生にご相談し、ご指導、アドバイス等いただきながら、婦人会のご用など様々な仕事を離れ、集中することになりました。しかし、八十歳過ぎのマイペースでもうにもならない事ばかり、そのうえ思いがけない身体的支障、どこまで時間がかかるのか分かりませんでした。主の恵みの故に期日に縛られることなくここまで辿り着くことができ、全てを導いて完成させて下さった主に感謝いたしております。

## 《表題について》

表題については、「汝は我に従え」または「汝ら我が愛におれ」のどちらにしようかと迷いましたが、「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。（ヨハネ一五・一〇）」とあります。やはり従うことが第一であり、主人がいつも書き残していた御言でした。

私が四十三年間共に暮らして、主人がその信仰の歩みの中で教えてくれたと思えます。「汝は我に従え」この御言しかないと思えました。只々主の祝福を祈り感謝申し上げます。

ご指導をいただいた榎本和義先生、金生先生、ご協力下さった兄弟姉妹、また皆様のお祈り、誠に有り難うございました。

野村美恵子

## 編集後記

「お父さんの記念誌を作ろうと思う」

母からそんな話しがあつたとき、それは一大事、大変なことになつたなあと、一瞬眩暈のする思いがしたものです。

母の記録によると、それは平成十四年とありますから、以来四年有余、自身の怠慢癖と多忙もあつて、今日にいたるまでの長きに亘り、多くの皆さんからいただいた父の思い出の原稿を暖めておりました。

父が召されて十五年、記念誌の編集をしながら、何度も何度も父の証しや多くの兄弟姉妹方のお証しを読み返し、父は、言い尽くせないほどの幸いな生涯を歩んだ人だったのだなど、改めて感謝を深くしました。

榎本先生、金生先生には、お祈りに加え数々の助言をいただき、有り難うございました。また、お祈り下さった多くの皆様、原稿をお寄せ下さった皆様、誠に有り難うございました。また、この記念誌の編集・発行にあたり貴重な助言を下さった正野兄姉に御礼申し上げます。

このことを全うさせて下さった主に感謝しつつ……。

二〇〇六年九月

(K・N)

汝は我に従え

— 野村末義の生涯と信仰 —

二〇〇六年九月 発行

北九州市八幡東区前田一丁目一・五六〇六

野村 美恵子